

塩部遺跡

SHIOBE SITE

県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書

1996・3

山梨県教育委員会

塩部遺跡

SHIOBE SITE

県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書

1996・3

山梨県教育委員会

序

塩部遺跡は県立甲府工業高等学校を含む広い範囲にあります。今回、高等学校の改築に伴い、校舎が建てられる予定地のグラウンド部分を発掘調査いたしました。昭和26年のグラウンド造成時以前は「塩部田園」と呼ばれる地域であり、やや起伏のある水田風景であったと想像されます。グラウンドのバックネット付近が小高い丘状であり、そこに存在していた方形周溝墓が造成時に削られ、土器などが出土したために、甲府工業高校校庭遺跡として報告されるようになったと思われます。

発掘調査の結果、方形周溝墓の立地する微高地、平安時代の住居群が立地する微高地とその間に河川が流れしており、発掘時も豊富な地下水の出水がありました。また河川が大きく湾曲する部分は沼状の堆積が見られ、水路の取入口（堰）の部分も認められました。塩部遺跡は平地にあった遺跡というよりも、相川の扇状地の複雑で、起伏に富んだ地形に立地していたと想像されます。

なかでも、SY03と呼ばれる方形周溝墓からは、長さ5センチを測る勾玉、装飾器台、壇、馬齒の出土がありました。この方形周溝墓の年代が4世紀から5世紀とすると、日本でもっとも古い部類に属する馬の歯ではないかと思われます。

最後に、ご協力をいただきました甲府工業高等学校をはじめとする諸機関、直接発掘調査、整理に携わった方々、さまざまなご教示をいただいた方々に心より謝意を表します。

平成8年3月20日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

目 次

第1章 発掘調査の実施と経過	1
第1節 発掘調査の経過	1
第2節 発掘調査の実施	1
第2章 地理的・歴史的環境	4
第3章 遺構と出土遺物	
第1節 弥生時代の遺構	6
第2節 古墳時代の遺構	7
第3節 奈良・平安時代の遺構	10
第4節 中世の遺構	12
第5節 現代の遺構	12
第4章 遺物	
第1節 方形周溝墓出土の土器	13
第2節 溝出土の土器	15
第3節 NUMA・KAWA2・確認面出土の土器	17
第4節 住居址出土の土器	18
第5節 木製品	19
第6節 石製品	21
第5章 考察	
第1節 塩部遺跡の歴史的景観	23
第2節 塩部遺跡の律令期祭祀具	24
第3節 塩部遺跡SY03（3号方形周溝墓）出土のウマ	30
第4節 塩部遺跡出土の焼夷彈からみた甲府空襲	31
付 編 塩部遺跡における古環境復元および木製品の樹種	37

例　　言

- 1、本書は、山梨県甲府市塙部二丁目に所在する塙部遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は山梨県教育庁学校施設課の依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3、発掘調査は平成7年4月10日から9月31日まで実施した。調査面積は約10,000m²である。
- 4、本書は小野が編集を行い、分担執筆は次の通りである。

第1章 小泉、第2章 村石、第3章 大谷、第4章第1・2・3・4・6節 小野、第4章第5節

小泉、第5章第1・2節 小野、第5章第3節 小泉、第5章第4節 村石

第5章第3節は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘助教授よりレポートをいただいた。

石材鑑定は山梨県埋蔵文化財センター 宮里 学が行った。

付録は、パリノ・サーベイ株式会社に委託した土壤分析などのレポートである。

- 5、本書の挿図のスクリーントーンなどの凡例はそれぞれの図に記入してある。
- 6、光波測量機で処理したため、SBは住居址、SDは溝、KAWAは旧河道、NUMAは沼、TANBOは水田址などを記号化したものである。

挿図・図版編目次

挿図

- 第1図 塩部遺跡と周辺の遺跡図
- 第2図 塩部遺跡発掘調査範囲
- 第3図 塩部遺跡周辺地形分類図
- 第4図 S Y 0 3 出土勾玉
- 第5図 S D 0 1 出土遺物実測図
- 第6図 E 46集束焼夷弾
- 第7図 焼夷弾分布図
- 第8図 焼夷弾・弾頭実測図

図版編

- 第9図 塩部遺跡全体図
- 第10図 S Y 0 1 実測図・出土状況図
- 第11図 S Y 0 2 実測図・出土状況図
- 第12図 S Y 0 3 実測図
- 第13図 S Y 0 4 実測図
- 第14図 S Y 0 3・0 4 出土状況図
- 第15図 S Y 0 5 実測図
- 第16図 S Y 0 6・1 1 実測図
- 第17図 S Y 0 5・0 6・1 1 出土状況図
- 第18図 S Y 0 7・0 8・0 9・1 0 実測図
- 第19図 S Y 0 7・0 8・0 9・1 0 出土状況図
- 第20図 S B 0 1 実測図
- 第21図 S B 0 3～0 9 住居址全体図
- 第22図 S B 0 2・0 3 実測図
- 第23図 S B 0 4・0 5 実測図
- 第24図 S B 0 6・0 7 実測図
- 第25図 S B 0 8・0 9 実測図
- 第26図 塩部遺跡セクション図(1)
- 第27図 塩部遺跡セクション図(2)
- 第28図 S D 0 1 実測図
- 第29図 S D 0 8・0 9 実測図(1)
- 第30図 S D 0 8・0 9 出土状況図・実測図(2)
- 第31図 S D 0 7 実測図・出土状況図(1)
- 第32図 S D 0 7 実測図・出土状況図(2)
- 第33図 S D 0 7 実測図・出土状況図(3)
- 第34図 S D 1 6 実測図・出土状況図
- 第35図 水田跡平面図
- 第36図 S Y 0 1 出土土器実測図
- 第37図 S Y 0 2 出土土器実測図
- 第38図 S Y 0 2・0 3 出土土器実測図
- 第39図 S Y 0 3 出土土器実測図
- 第40図 S Y 0 4 出土土器実測図(1)
- 第41図 S Y 0 4 出土土器実測図(2)
- 第42図 S Y 0 5・0 6 出土土器実測図
- 第43図 S Y 0 7・1 0・1 1 出土土器実測図
- 第44図 S B 0 1・0 2・0 3・0 4・0 5
出土土器実測図
- 第45図 S B 0 6・0 7 出土土器実測図
- 第46図 確認面出土土器実測図
- 第47図 S D 0 7 出土土器実測図(1)
- 第48図 S D 0 7 出土土器実測図(2)
- 第49図 S D 0 7 出土土器実測図(3)
- 第50図 S D 0 7 出土土器実測図(4)
- 第51図 S D 0 7 出土土器実測図(5)
- 第52図 S D 0 7 出土土器実測図(6)
- 第53図 S D 0 7 出土土器実測図(7)
- 第54図 S D 0 8・1 6 出土土器実測図
- 第55図 NUMA出土土器実測図
- 第56図 KAWA出土土器実測図
- 第57図 石器実測図
- 第58図 木製品実測図(1)
- 第59図 木製品実測図(2)
- 第60図 木製品実測図(3)
- 第61図 木製品実測図(4)
- 第62図 木製品実測図(5)
- 第63図 木製品実測図(6)
- 第64図 木製品実測図(7)
- 第65図 木製品実測図(8)
- 第66図 木製品実測図(9)
- 第67図 木製品実測図(10)
- 第68図 木製品実測図(11)

写真図版目次

図版1

- 塩部遺跡西半全景
- SB01 炭化材出土
- SB01 全 景
- SB01 壺 (1)
- SB01 炉

図版2

- SD07C 遺物出土
- SD07C 遺物出土
- SD07C 土層断面
- SD07D 遺物出土
- SD07E・F 遺物出土
- SD08 遺物出土
- SD07・08 全景 [南から]
- SD07 北半全景 [南から]

図版3

- SY01 全景 [南から]
- SY02 全景 [南から]
- SY02 遺物出土
- SY02 壺 (2)
- SY03 全景 [南から]
- SY03 ウマ歯 (下顎)・高坏 (11) 出土

図版4

- SY03 東ベルト [南から]
- SY03 丸底壺 (6)
- SY03 丸底壺 (3)
- SY03 装飾器台 (10)・小型丸底壺 (15)
- SY03 ウマ歯 (上顎)
- SY03 高坏 (11)
- SY03 ウマ歯 (下顎)・高坏 (11)

図版5

- SY04 全景 [西から]
- SY04 北ベルト [東から] 上部に洪水細砂
- SY04 装飾器台 (16)
- SY05 全景 [南西から]
- SY05・06 全景 [西から]
- SY05 土器 (1)
- SY06 全景 [南から]
- SY10 土器 (1)

図版6

- 塩部遺跡東半全景
- SB02 ブラン [南から] 洪水細砂に切られる
- SB02 カマド周辺
- SB02 全景 [南から]
- SB05 全景 [南西から]

図版7

- SB06 全景 [西から] 奥はSB03
- SB06 カマド
- SB07 全景 [西から] 奥はSB05
- SB08・04 全景 [西から]
- SB09 全景 [南から]
- SB03~09

図版8

- KAWA 曲物 (66)
- KAWA 頭骨
- KAWA 土器 (3) [西端、R-25G]
- KAWA 斎櫛 [Q-22G]
- KAWA 人形

図版9

- KAWA 漆塗椀 (76)
- KAWA 断面・壺破片
- KAWA 断面
- KAWA 斎櫛 (90)
- KAWA 曲物 (103)
- NUMA 流木 [I-13G]

図版10

- NUMA 遺物出土 [J-19G付近]
- NUMA 木製品 [38~42]
- NUMA 網代 (32・33)
- NUMA 木皿 (20)
- NUMA 木製品とケルミ
- TANBO [南から]
- NUMA 南半全景 [東から]
- NUMA~KAWA 断面 [南東から]

図版11

- SD16 全景 [NUMA側から] 取水部
- SD16 全景 [南から]
- SD16 温め部
- SD01 全景 [南から]
- 集束焼夷弾 (E-46) 弾頭
- 焼夷弾 (M-69) [K-28G]

図版12

- KAWA 人形 (77・78)
- 人形 (78) 顔
- 曲物 (66)
- 曲物 (93)
- 曲物 (88)
- 曲物 (103)

第1章 発掘調査の実施と経過

第1節 発掘調査の経過

- 平成6年10月5日 試掘調査の開始
平成6年10月14日 試掘調査の終了
平成7年4月6日 発掘通知を文化庁に提出する
平成7年4月10日 発掘調査を開始する
平成7年7月29日 遺跡見学会を実施する
平成7年10月6日 発掘調査を終了する
平成7年10月13日 遺物発見通知を甲府警察署に提出する

第2節 調査の実施

1. 調査方法と調査区の設定

調査範囲は現在の県立甲府工業高等学校の校舎部分の敷地であり、調査当時は同校のグラウンド部分であった。

調査区の設定は、国土座標系（平面直角座標値系）に基づいて調査区南東部を起点として5mメッシュとし、グリッドを設定し、起点より北へ向けてA～W、西へ向けて1～40の名称を付した。グリッドの表し方はA-1グリッドというように表示する。

調査は排土を現場内で処理する必要があったため、段階的に行った。まず調査区西側3分の1を調査し、その後、残る東側3分の2について調査を実施した。

2. 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 小野正文・大谷満水・村石真澄・小泉敬

調査員 平重蔵

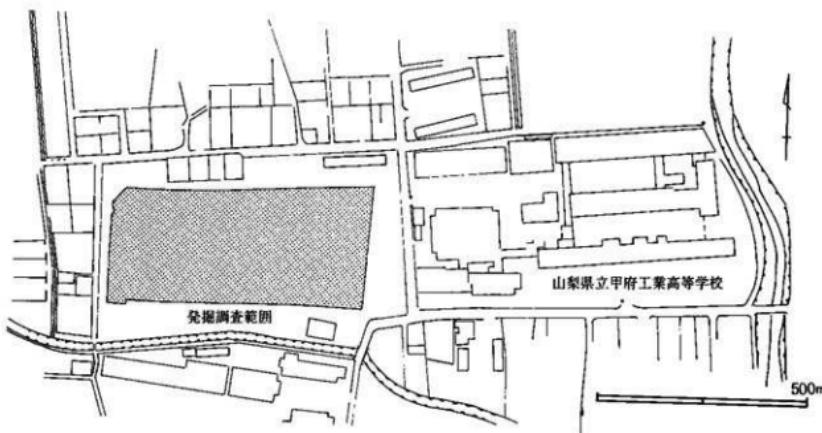
作業員及び整理員 青木邦知 青柳清 赤岡敦 秋山仁 浅野由美子 網野晴仁 雨宮加代子 有賀ひろ子
安藤純子 飯田みづほ 飯寄貞子 池田真一 池田澄子 池谷馨 池谷さち子 石田文男 石原はつ子
石原由紀 石原由美子 板持光夫 市川啓子 市川祥子 出月多枝美 出月多津子 出月満す江 出月遊
亀子 井上昌則 猪股順子 今沢美代 岩崎満佐子 岩間友子 岩間佳子 植松まゆみ 内田千恵子 内
山教子 宇野和子 上鷗十郎 大久保発子 大塚教子 大塚昭六 大森仁美 緒方秋江 関田伸吾 小川
貴志 長田可祝 長田和子 長田久美子 長田千鶴 長田てる美 長田富子 長田奈代子 長田久江 長
田正寿 長田美和子 長田由美子 小沢恵津子 越智真樹 笠井千鶴 数野睦 加藤智 加藤智恵子 金
杉玲子 柄澤真路 神沢正孝 菊川寿夫 菊島慶子 北村春美 橘田貴大 木之瀬浩美 楠間美季江 久
保田明義 小池孝男 越石力 奥石勝 小林としみ 小林信雄 小林美津代 小林康一 小林美紀 小林
よ志子 古原貞子 小宮山喜美江 作山修 佐々木富士子 佐藤直美 佐藤美枝子 志村君子 志村悟
志茂博 末松福江 菅沼芳治 杉江修 鈴木恵理子 鈴木祐一郎 平美与枝 竹内孝治郎 多胡かね子
田中正江 田辺秋太郎 近浦正治 東郷学 土橋園子 内藤安雄 中川美千子 中沢恵美子 中込幹一
中込星子 中込みち子 中込よしミ 長坂清 中澤敏雄 中村喜代美 名取洋子 成田勲 西洋子 野沢
茂子 羽中田弘 花形正男 花曲敬子 林紀子 横口きくえ 横口久子 平川涼子 深沢聰美 深沢久
古屋茂子 古屋和喜子 保坂真澄 保坂好宣 細田正子 保延勇 堀内僚三 本田泰視 真嶋崇 丸山輝
雄 丸山玲子 宮北忠佳 宮久保朝乃 宮坂晴幸 三好美智 向井製装春 村田美由紀 望月篤子 望月
芳郎 森田良子 森本幸子 矢崎悦子 矢崎米子 矢野晴代 山口賢哉 山崎悦子 山崎さかえ 山崎せ
いか 山崎聖子 山下いよ子 横山秀一 米山玉恵 渡辺金重 渡辺岳乃女 渡辺洋子 渡辺礼子



第1図 墓部遺跡と周辺の遺跡

2山之神遺跡、3若宮前遺跡、4天狗山古墳、5続石古墳、6鐘推堂山遺跡、7山路遺跡、8西前田遺跡、13鴨塚古墳、14御蔵遺跡、15天神北遺跡、16天神西遺跡、17櫻田遺跡、18跡部遺跡、19塙本遺跡、20西大坂A遺跡、21西大坂B遺跡、22天神平遺跡、23羽黒無名墳、24金塙西遺跡、25加牟那塙古墳、26神田遺跡、27八幡東遺跡、28音羽遺跡、29大平1号墳、30塙沢寺裏無名墳、31大平2号墳、32湯村山6号墳、33湯村山城跡、34湯村山5号墳、35万寿森古墳、36湯村山4号墳、37湯村山3号墳、38湯村山2号墳、39湯村山1号墳、40三光寺山遺跡、41和田無名墳、42緑ヶ丘2丁目遺跡、43緑ヶ丘1丁目遺跡、44十二天神遺跡、45永井遺跡、46村之内遺跡、47向田A遺跡、48向田B遺跡、49西前田B遺跡、50御馬屋小路A遺跡、52御馬屋小路B遺跡、53土屋敷遺跡、54お塙山古墳、55峰本南A遺跡、56峰本B遺跡、57長開遺跡、66穴塙、67西川原遺跡、68平石遺跡、69居山村村上遺跡、70前田遺跡、71豆田遺跡、72前田遺跡、73富士見遺跡、74塙部遺跡、75新紺屋小学校遺跡、76山梨大学遺跡、106南河原B遺跡、107南河原A遺跡、108南河原D遺跡、109南河原C遺跡、110村西遺跡、111宝町遺跡、112寿町遺跡、113上石田B遺跡、114上石田遺跡、115甲府城跡、116御崎田遺跡、117大北河原遺跡、118久保北河原遺跡、119千松院遺跡、120青沼遺跡、180宮北遺跡、181秋山氏館跡、185伊勢町遺跡、187太田町遺跡、188青沼3丁目遺跡、189湯田1丁目遺跡、190飯田一丁目遺跡

これらの遺跡の番号は甲府市教育委員会の『甲府市遺跡地図』(平成4年刊)による。



第2図 塙部遺跡発掘調査範囲図

第2章 地理的・歴史的環境

甲府盆地は北に奥秩父山地を背負い、西を南アルプス、南を御坂山塊によって区切られ、南を頂点とする逆三角形を成している。塩部遺跡は、甲府市街の北側にそびえる標高1200mほどの山稜から南西に広がる相川扇状地の扇端部に位置する。

塩部という地名の由来は、「甲斐国志」によれば、溝水に塩氣があったためとされている。塩部遺跡の範囲は相当に広く、甲府市作成の遺跡分布図によれば、東西約500m、南北約700mの規模に及び飯田一丁目遺跡を含めて登録されている。今回の調査地点は、この範囲のはば中央部の標高約267m付近にあたっている。ここは県立甲府工業高校のグラウンドであり、この整備中に土師器が発見され、これらが実測図と共に報告されている(山本1968)。しかし残念ながら調査に至らず、遺跡の性格は明らかにされなかつた。報告された土師器は、今回調査した方形周溝墓と同じ古墳時代前期を中心とする時代のものであり、これらに関わるものと考えられる。

発掘調査に加えて、米軍撮影の空中写真(1947年11月撮影の約4万分の1と1948年3月撮影の約2万分の1)と大日本帝国陸地測量部が明治43年に発行した2万分の1地形図甲府近傍を基に微地形分類を行ったのが第3図である。空中写真的判読は、土地利用と土地の含水程度を目安として行った。

丘陵：甲府城付近など「丘陵」が扇状地中に孤立してあるのは、愛宕山の一連の尾根であったものが扇状地の形成によってその周囲が埋没したためである。

扇状地Ⅰ：「扇状地Ⅰ」よりやや高く甲府市街地をのせている。空中写真が撮影された1940年代後半においても、すでに市街化が進んでいる。本来の地形としてはさらに分類が可能なはずであるが、市街化のために判読がやや困難であり、今回は一括とした。

扇状地Ⅱ：「扇状地Ⅰ」よりやや低く、相川による影響だけでなく、荒川の影響も強く受けている。

自然堤防（高位面）：おもに畑として利用されて、高く乾いた土地である。周囲との比高差から低位面と区別した。甲府盆地底部の縄文時代中期の集落遺跡として著名な上石田遺跡は第3図から若干南にはずれるが、この分類に含まれる。

自然堤防（低位面）：おもに畑として利用されて、高く乾いた土地で、高位面により若干低い土地である。今回の調査地点の南側に、縄文時代～古墳時代の遺物が発見された飯田一丁目遺跡が立地している。

後背湿地・旧河道：相川や荒川の旧河道と後背湿地である。

塩部遺跡周辺の地形は、基本的には南に緩やかに傾斜する相川の扇状地である。ところが、荒川に沿った形の東西方向の旧河道があり、ときに荒川の氾濫が相川扇状地を駆け登って来たものと理解される。しかし大層的に見ると、小規模な洪水の影響は若干あるにしろ、大きな洪水の影響を受けず甲府盆地の中では比較的安定した土地と言える。また調査地点周辺、とくに東方では、旧来より条里型地割とされる北北東の軸をもつ地割がかなりの範囲で認められている。

文献上でも、鎌倉時代には「塩戸莊」、戦国時代には「塩部」の郷名がみえる。ただし、大字の「塩部」は、古く歩兵49連隊の兵営地や練兵場があった現在の緑ヶ丘などを含んでいる。つまり、かなり広い範囲を想定しなければならないが、土地条件がよく条里型地割が遺存していることなどからも、古くから開発されていた土地であることが判る。

空中写真的判読と発掘調査成果の照合では、発掘調査にてKAWA2と命名した旧河道部分とNUMAと命名した溜池状の部分が、微地形分類では後背湿地・旧河道にあたっている。このことから、同様の環境が周囲に広がっていることが推定される。

この塩部遺跡周辺の地域について微地形分類から言えることは、荒川に沿って自然堤防がよく発達していることである。先に述べた上石田遺跡や飯田一丁目が立地する自然堤防以外にも、県立中央病院をのせるものや、甲府市立西中学校と荒川を挟んでその対岸などに自然堤防があり、これらは高く乾いた土地であり、集落跡などが存在する可能性が非常に高く注目される。

また留意すべきは、発掘調査においてKAWA2やNUMAなどに比べてやや高く、方形周溝墓や住居跡が発見された微高地が、空中写真では判読できなかつたことである。微地形分類では多くの場合、住居跡が存在するような微高地は、判読可能な場合が多いのであるが、今回の微地形分類作業では残念ながらよく判読できなかつ

た。つまり、この地域については、後背湿地・旧河道ではない扇状地部分ではいずれも集落跡が存在する可能性があり、遺跡の確認調査には細心の注意が必要である。また今後も、他の空中写真を判読するなどの検討をさらに続けていきたい。

山本寿々雄（1968）「32 甲府工業高校庭遺跡」『山梨県の考古学』 P201-202



第3図 塩部遺跡周辺地形分類図

第3章 遺構と出土遺物

第1節 弥生時代の遺構

S B 0 1 (1号住居址) (第20図、第44図1、2)

(位置) M・N-26・27グリッドに位置する。古墳時代前期の2号方形周溝墓のほぼ中央にあたる。

(形状・規模) 南北の長軸が4m50cm、短軸が3m90cmの小判形プランを呈する。壁高は確認面より8~14cmを測る。

(炉・床面) 炉は中央やや北よりで確認された。直径45cmのほぼ円形を呈している。石は使用されておらず、掘方は床面より10cmを測る。床は粘質土を踏み固めたものである。床面近くには多量の焼土、炭化物が散在しており、焼失家屋と考えられる。南側壁付近の床は一段高い位置にあったと考えられる。

(その他の施設) 柱穴と考えられるピットが6基が検出された。

(出土遺物) 1は住居址の南西側の床面と考えられるところから出土した小型の壺である。口径11.7cm、底径5.7cm、高さ13.8cmで胴部から底部にかけて強く二次焼成を受けている。胎土は粗く黒褐色である。口縁部からほぼ垂直にハケ目の調整を行っている。

S D 0 7 (7号溝) (第31~33図、第47~53図)

(位置) J-35、K-34、L-O-33、O-Q-32、R-T-33、T-32グリッドに位置する。

(形状・規模) 北北東の方向に比較的真っ直ぐ伸びているがQ-31グリッド付近から急に北西へ方向を変え弧を描くように続いている。これはQ-32グリッドの北側に方形周溝墓の残骸と考えられる遺構が確認されており、墓域を避けるためかと考えられる。Q-32グリッド付近は過去において削られた形跡があり、ここから徐々に浅くなりT-32グリッド付近で溝は消滅する。溝の断面形はV字状を成しており幅は90~120cm、深さは60~70cmである。

(出土遺物) 底から約40cmの上端にかけ全面にぎっしりと弥生時代後期の土器を中心とした遺物が廃棄されていた。

第0図1~7は壺である。1、2は有段口縁をもつもので、1は棒状貼付文を貼り付けており、2は沈線で両者とも縦に文様を施している。7は肩部にRLの縄文を施し、円形貼付文をその上に付加している。大型の壺で49がその底部となると思われる。8~36は壺で、8から13と30、36は頸部がくびれて、壺の形に近いもので、他は胴下半がしばむものである。特に36は赤彩され、あるいは壺に分類されるかもしれない。15は口縁に刻み目を有する小型の壺で底部が欠けている。胎土は粗く外側全体が二次焼成を受けており黒色に変色している。29は壺で、口縁部の一部と胴部の半分が残存する。胎土はやや粗く赤褐色である。34は台付壺で口縁部の一部と胴部の半分、底部がばらばらに廃棄した状態で出土した。内側の胴部付近にヘラ調整を受けている。外側には二次調整を受けた黒褐色の部分が所々に見られる。37~39は瓶である。39は小型の瓶の完形品である。胎土は粗く赤褐色を呈する。38は2孔を有する。41、42は高壺と思われ、42は内外面ともに赤彩がある。44は蓋、45は手捏である。

8、13、110の3点は、ちょうど屈曲する部分から出土した。8は口縁に刻み目を持つ胴部の貼りだした壺で胎土はやや粗く茶褐色である。13は胴部の一部と底部が欠けた口縁に刻み目を有する壺である。胎土は粗く茶褐色を呈する。10は口縁に刻み目を有する壺である。口縁の一部と胴部の半分が残存する。外側が細かなハケ目調整を受けている。胎土は密で黒褐色を呈する。

S D 0 8 (8号溝) (第29~30図、第54図)

(位置) J-36・37 K-35・36 L-35 M-34・35 N-35 O-34・35 P-34グリッドに位置する

(形状・規模) 北東の方向に緩やかな弧を描きながら延びている。幅は2~4m、深さは50~70cmと傾斜のなだらかなスリ鉢状の断面をしている。9号溝とはM-36グリッドで合流し、この付近の幅が最大となる。7号溝同様北に行くに従い浅くなりP-35グリッドで消滅する。

(出土遺物) ほとんど完形になる遺物は見られなかったが、溝南端のJ-35グリッドから完形の土器が溝の確認面に近いレベルから3点出土した。1は口縁部に刻み目を持つ土器で、口縁部から肩部かけてハケ目調整をうけている。2は口縁の一部を欠いた甌で胎土は粗く茶褐色を呈する。3は完形品で口縁に刻み目を有する。胎土は粗く茶褐色を呈している。胴部の一部に二次焼成を受けたと考えられる黒色の広がりがある。外側全面と内側の口縁にハケ目調整をうけている。

S D 0 9 (9号溝) (第29・30図)

(位置) M-35、N-0・P・Q-36、Q・R-35、R-34グリッドに位置し、M-35グリッドで8号溝と合流する。

(形状・規模) 8号溝との合流地点から北西の方向に緩やかに弧を描くように北東の方向に延びている。幅1m 30cm~2m 10cm、深さ30~50cmのスリ鉢状の溝である。R-34で消滅する。

(出土遺物) なし

第2節 古墳時代の遺構

S Y 0 1 (1号方形周溝墓) (第10図、第36図)

(位置) K~L-28~30、M-29・30グリッドに位置する。北溝は、2号方形周溝墓と溝を共有する。

(規模・形状) 長辺が11m 30cm、短辺が9m 20cm前後の方形プランを呈する。周溝規模は北溝を除き幅1m~1m 30cm、深さ30~40cmを測る。北溝は2号方形周溝墓と共有しているが、1号方形周溝墓は2号方形周溝墓の溝を利用し、後に作られたものと考えられる。ブリッジは南東コーナーにある。台状部は一辺約7m 50cmの方形を呈し、墳丘の盛り土は確認されなかった。

(埋葬主体部) 確認されなかった。

(出土遺物) 1は北辺の周溝から10、12などとともに出土した。頸部から口縁部が欠けている壺である。5西辺の周溝から1、3、6、9、11とともに出土した小型の碗である。底部が丸みを帯びており安定感がない。胎土は密で茶褐色を呈する。7は東辺の周溝からまとまって出土した大型の壺で口唇部に刻み目を有する。9は台付壺の一部と思われる。

S Y 0 2 (2号方形周溝墓) (第11図、第37・38図)

(位置) O・M-28~30、L-28・29、O-28・29グリッドに位置する。南溝を1号方形周溝墓と共有する。台状部の北側から北東コーナーにかけて10号溝に切られている。台状部の中央からは弥生時代後期の1号住居址が確認されている。

(形状・規模) 一辺が約14m 60cmほどの方形状を呈する。周溝規模は幅1m 80cm~2m 30cm、深さは40~50cmを測る。ブリッジは南東コーナーにある。台状部は一辺約9m 60cmの方形のプランである。1号方形周溝墓より溝、台状部ともに一回り大きい。

(埋葬主体部) 確認されなかった。

(出土遺物) この方形周溝墓の遺物出土状況は西辺の周溝に遺物が集中する傾向がうかがわれる。また1号方形周溝墓と重複する部分の遺物の所属は1号とした。1は8の高壺とともに出土した壺である。胴部より下の部分が残存するのみで外側はハケ目調整をうけている。胎土はやや密で赤褐色を呈する。2は壺で西辺の周溝中央より3、4とともに廃棄された状態で出土した。胴部の歪みが激しい。胎土は密で底部近くは二次焼成の跡がみられる。3は胴部の下半分に二次焼成の跡がみられる。8は口辺と脚下端を欠く高壺で、胎土はやや粗く赤褐色を呈する。9は高壺の脚部である。中央に直径1cm程度の孔が上からみると正方形状に四カ所開けられて

いる。胎土は緻密で明茶褐色を呈する。

S Y 0 3 (3号方形周溝墓) (第3・14図、第38~39図)

(位置) K ~ L - 31 ~ 34 J · N - 32 ~ 34 グリッドに位置する。1・2号方形周溝墓のすぐ南西側にある。

(形状・規模) 長辺が20m、短辺が12mであり、南溝が舌状に極端に南側に張り出す特異な形状を呈している。南溝の幅は最大約8mあり、他の溝の1m70cm~2m80cmを大きく引き離している。溝の深さはほぼ均一で40~50cmを測る。覆土に黒褐色の砂質粘土を含み底部に多量の水がしみ出ることから、築造当時より湿地であったと考えられる。台状部は一辺10mほどの方形を呈しているが墳丘は確認されなかった。

(出土遺物) 溝の深さや遺物の出土状況から最も遺物の保存の良い方形周溝墓と考えられる。また、湿地であるため馬の歯も出土している。装飾器台や壇などの土器は、廐棄場所が四角に囲むそれぞれの溝のほぼ中央から、馬の歯と高坏は北西コーナーから出土しており、規則性が考えられる。ほとんどの土器は古墳時代前期と考えられるが、一部古墳時代後期と考えられる坏が周溝覆土上層から数点出土している。

(出土遺物) 5は丸底壺で西辺の周溝のほぼ中央北側の底の付近より出土した。胎土は緻密で明褐色を呈する。付近から1、7の出土がある。6は小型の丸底壺で東辺の溝のほぼ中央から完形で出土した。胎土は密で明褐色を呈する。10は高坏で、脚部には直径1cm程度の円形の孔が三単位開けられている。北溝の北西コーナーの底より僅かに高い馬の歯が出土したほぼ同じ位置・レベルで出土した。表面全体に細いヘラ状工具によつて緻密に磨かれている。胎土は緻密で明褐色を呈する。16は手捏のミニチュア土器である。たいへん粗い作りで、口縁はでこぼこである。胎土はやや粗く暗茶褐色を呈している。9は器受部の大きく張り出した装飾器台である。東溝のほぼ中央の底に近いところより底部を除いてほぼ完形品の状態で出土した。外側は全体にわたってヘラ状工具により緻密に磨かれた跡がある。器受部の下の部分には直径1cm程度の円形の孔が中央に一ヵ所、それを取り巻くように四単位、脚部は上から見ると三単位を2段で計6個開けられている。胎土は緻密で明褐色であるが赤彩を施したあとがある。また、口縁部の一部に二次焼成を受けた跡がある。17は坏で、西溝の北西コーナー付近の底より40cm程度のところより出土した。外側と内側に赤彩が施されており、外側にヘラ削りの調整が見られる。この土器は18とともに他の土器が古墳時代前期と判断されるのに対して古墳時代末と考えられる。胎土は密で茶褐色を呈する。4は丸底壺である。南溝の中央やや東よりから、ほぼ底と考えられる位置からバラバラに廐棄された状態で出土した。底部に二次焼成を受けたあとがある。胎土は緻密で明褐色を呈する。14は口縁部が欠けているが、小型の平底壺と考えられる。内外面ともに粗い調整が行われている。外面は頸部から肩部にかけハケ目調整を受けており、内面は指による調整を受けている。6、9、11とともにまとめて出土した。南辺の舌状の周溝の中央部から翡翠製の勾玉が出土した。



第4図 SY 0 3 出土勾玉

S Y 0 4 (4号方形周溝墓) (第0図、第0図)

(位置) I · J 28~32、K 29~31グリッドに位置する。北東コーナーを1号溝に切られている。

(形状・規模) 北東コーナーを1号溝に切れられ、東溝が確認されなかつたので正確な規模を知ることはできない。しかし幅が2m90cmから5m、深さが北溝の長さが16m66cmと塙部遺跡最大の方形周溝墓と考えられる。東溝が確認できなかつたことについては、6号方形周溝墓の東溝との共通性が考えられる。どちらの溝も平安時代の川に切られるような位置にある。しかし、溝の残骸さえ検出されないことから、築造当時の地形が段丘の縁である可能性が高く、その地形を利用し、東溝をあえて築造しなかつたと考えられる。

(出土遺物) 4号方形周溝墓の出土遺物は北西コーナー付近に集中する様相がうかがわれる。装飾器台、高坏はこの一個所にまとまっている。2は口縁部から頸部を欠く丸底壺で胎土は粗く褐色を呈する。3は胴部のほとんどが欠けた壺である。胴部が大きく膨らみ底部が極端に萎む不安定な器形をしている。胎土は密で明褐色を呈する。13は高坏である。脚部の下半分は欠けている。脚部の中央には直径1.5cmの孔が三単位で三カ所開けら

れている。西溝の北西コーナーより底から30~40cm上部で出土した。胎土は緻密で明褐色を呈する。16は装飾器台で、器受部の底部には上から見ると直径1.5cmの孔が三単位、同じく脚部も三単位で2段計6個開けられている。脚部の内側に回転ヘラ削りの調整を受けている。脚部の底部の一部に二次調整を受けた跡がある。胎土は緻密で明褐色を呈している。23は碗で、底が丸みを帯びており安定感がない。胎土はやや粗く褐色を呈する。なお、北西コーナーの土器集中区からは馬の歯と思われる歯の細片が出土した。SY03と同様の周溝北面コーナーであり、注目される。

SY05（5号方形周溝墓）（第15図、第42・57図）

（位置）S・T・U28~30グリッドに位置する。6号方形周溝墓に東溝を切られている。

（形状・規模）東西が11m25cm、南北12m10cmのほぼ方形を呈する。幅は1m60cm程度、深さはまちまちで東溝は25cmであるが、西溝は5~10cmと極端に浅く削平されたものと考えられる。台状部は9m20cmの方形で墳丘の盛り土は確認できなかった。南西コーナーにブリッジがあり、そこに合計8基のピットを確認しており、周溝墓に伴う何らかの施設があったと考えられる。こうした様相は2号方形周溝墓、6号方形周溝墓に見られる。

（出土遺物）1は小型の壺で、口縁部の内側の一部に横走するハケ目調整がみられる。南辺の周溝の南東のブリッジ付近より出土した。胎土はやや粗く赤褐色を呈する。南辺の周溝のほぼ中央部からは打製の石包丁（第57図7）が出土している。

SY06（6号方形周溝墓）（第16・17図、第42・57図）

（位置）R・S・T・U25~28グリッドに位置する。西溝が5号方形周溝墓を切っている。

（形状・規模）東溝が確認されないため詳細は不明であるが、一辺が14mほどの方形を呈すると思われる。東辺の周溝は恐らくKAWA2によって流失したものと思われ、ブリッジもはっきりと確認できない。しかし、5号方形周溝墓のブリッジから確認されたピットと性格が近似していると考えられるピットが南東コーナーから3基確認された。墳丘の盛り土や主体部は一切確認されなかった。溝の規模は幅1m20cmから2m30cm、深さ25~40cm。覆土は黒褐色の砂質粘土層である。

（出土遺物）出土遺物は少ないが、南辺の周溝の東端で打製の石鋤（第57図1）の出土がある。

SY07・08・09（7・8・9号方形周溝墓）（第18・19図）

（位置）3基の方形周溝墓はほとんど原型を止めないため位置は確定しにくいが、5号方形周溝墓の南約15m付近に広がる。その周辺には約30基余りのピットが確認された。また、この区域は7号溝が屈曲する部分でもあり、周溝墓との関連が考えられる。屈曲する一つの理由に周溝墓の墓域を避けて溝が作られたということがあげられる。もう一つの理由としてこの区域の削平が激しいことから一段高い地形であったと考えられ、それに沿って溝が屈曲したということも考えられる。

SY10（10号方形周溝墓）（第18・19図、第43図1）

（位置）北西の端、U34・35、V34グリッドに位置する。

（形状・規模）南溝の一部が確認されているだけである。南溝は長さ4m60cm、幅60cm、深さ30cmである。覆土のほとんどは黒褐色の粘土で、湿っている。

（出土遺物）1は片口土器で、内外面に赤彩の塗布がみられる。特に内側が顯著である。胎土はやや粗く赤褐色を呈する。

SY11（11号方形周溝墓）（第17図、第43図）

（位置）6号方形周溝墓の北辺の東端に南下している南北に伸びる溝である。

（規模）調査区域の北端に一部のみ検出されたので、規模などについては不明である。

(出土遺物) 周溝の端の部分のみであるが、東辺の周溝か西辺の周溝であろうと思われる。出土遺物はS字状口縁の壺が主体である。

第3節 奈良・平安時代の遺構

S B 0 2 (2号住居址) (第21・22図、第44図1)

(位置) I・J-19・20グリッドに位置し、北東のコーナーを沼に切られ、南側の壁を溝に切られている。

(形状・規模) 沼と溝に切られているため不明確であるが、南北3m40cm、東西3m20cmの方形を呈すると考えられる。確認面が床面に近いため壁高は2cm~3cm程度である。

(カマド) 北側壁のほぼ中央に残存する。ほぼ確認面付近から30×40cmの火床面が確認された。カマド内とカマド周辺から須恵器片などが出土した。

(その他の施設) 堀込みが浅く柱穴とは考えにくいが三箇所のコーナー近くより3つのピットが検出された。

(出土遺物) 1は須恵器の蓋である。胎土はやや粗く、青灰色である。

S B 0 3 (3号住居址) (第21・22図、第44図1~10)

(位置) H・G-17グリッドに位置し、6号・8号住居址に切られている。

(形状・規模) 平面プランは長軸4m50cm、短軸3m10cmの長方形を呈する。壁高は確認面より3~5cmを測る。

(カマド) カマドは住居址東壁のやや北よりに残存する。残存するカマドの上部から内部にかけ平安前期の壺と鉢が出土した。

(その他の施設) 住居址北西コーナーには拳大程度の四個の石で直径40cmの円形に囲った施設がある。この施設の下部から長軸70cm、短軸50cm、高さ10cmの楕円形の焼土塊が検出された。

(出土遺物) 出土遺物は6号住居址に切られているため、カマド周辺から出土した須恵器の壺1点、同一個体と思われる土師器の壺の口縁部と底部が各1点のみである。6は須恵器の高台付壺で口縁部から底部の半分が残る。県内では8世紀末の年代観が与えられている。

S B 0 4 (4号住居址) (第21・23図、第44図1)

(位置) F・G-16・17グリッドに位置する。南側壁のほとんどと東側壁の一部を8号住居址によって切られている。

(形状・規模) 南北3m10cm、東西4m15cmの長方形を呈する。壁高は確認面より3~7cmを測る。

(カマド) カマドは確認できない。床面は砂質粘土を踏み固めたものである。

(その他の施設) なし

(出土遺物) 流れ込みと考えられる弥生時代後期の小型の壺が一点出土した。

S B 0 5 (5号住居址) (第21・23図、第44図1,2)

(位置) F-16グリッドに位置する。7号住居址を切っている。

(形状・規模) 南北3m90cm、東西3m40cmの方形を呈すると推定されるが、東側の壁が7号住居址に切られておりまた西側もほとんど壁を削られているため、東西方向の詳細は不明である。

(カマド・床面) 東側壁のほぼ中央の内側により、高さ約10cm残存するのみであり、上部をほとんど削られた状態で検出されている。火床面と考えられる地点から燃え残りと思われる炭化物が検出されている。南側半分に床面らしき硬い黒褐色の面が残存している。

(その他の施設) なし

(出土遺物) 2は土師器の壺で口縁部から胴部の一部である。県内では甲斐型土器のⅣ期の年代観が与えられている。胎土は堅緻で明茶褐色を呈する。

SB 06 (6号住居址) (第21・24図、第45図1~6)

(位置) G・H-17・18グリッドに位置し、3号住居址を切る。

(形状・規模) 平面プランは南北の長軸4m80cm、東西の短軸2m80cmの長方形を呈する。壁高は確認面より14cmを測る。

(カマド) 東側の壁の南側に偏って確認された。火床面から30cmの高さで残存する。3号住居址から9号住居址の住居群中では最も保存状況の良いカマドである。東西の袖は粘性の強い砂質粘土により作られている。残存するカマドの上部には拳大の石が10個のっている。カマドの前方からは壊が一点出土した。床面は細繊・酸化鉄を含まない均質なシルト層を踏み固めたものである。

(出土遺物) 3は口径18.5cm、底径9.8cm、高さ7cmで赤褐色の密な胎土を有する鉢である。内面の底部は見込みの調整がある。県内では、Ⅷ期の年代観が与えられている。2はカマド内とその周辺から出土した壊である。底部から胴部にかけヘラ削り調整が行われている。胎土は密で赤褐色を呈する。県内ではⅨ期もしくはⅩ期の年代観が与えられている。5は底部に糸切り痕を有し、ロクロ調整を受けている甕である。底径は7cmで全高6.7cmである。胎土は粗く暗赤褐色を呈する。県内では甲斐型土器のⅨ期の年代観が与えられている。

SB 07 (7号住居址) (第21・24図、第45図)

(位置) F・G-16・17グリッドに位置し、5号住居址に切られている。

(形状・規模) 南北4m、東西3m20cmの長方形を呈する。壁高は確認面より10~14cmを測る。

(カマド) カマドは確認できない。床面は不明瞭であるが、砂質粘土を踏み固めたものと思われる。

(その他の施設) 住居址の北東コーナーの壁付近に10~20cm程度の石の集中(8個)がみられる。

(出土遺物) 須恵器の壊の底部から胴部の一部が残存する。底部にはヘラ切り痕があり甲斐型土器のⅦ期に相当すると思われる。

SB 08 (8号住居址) (第21・24図)

(位置) H・G-16・17グリッドに位置し、3・4・7号住居址を切る。

(形状・規模) 南北3m80cm、東西2m90cmの長方形を呈する。壁は確認された面がほぼ床面に近かったため、残存していない。

(カマド) 東側の壁やや南よりに残存する。火床面付近の幅65cm、奥行き1m10cm楕円形を呈する。掘り込み面より10cm程度の高さの袖は、砂質粘土により作られている。煙道の一部と考えられる円筒状の部分が住居址の外に向かって延びている。

(出土遺物) なし

SB 09 (9号住居址) (第21・25図)

(位置) H-16・17グリッドに位置している。

(形状・規模) 北側と西側の壁がほとんど削られた状態で確認されており、プランは不明確であるが南北約2m90cm、東西約3m70cmの長方形を呈すると考えられる。

(カマド) 確認できない。

(出土遺物) なし

溝状遺構

SD 16 (16号溝) (第34図、第54図)

(位置) D-13、E-13、F-12・13、G-13・14、H-13・14、I-14グリッドに位置し、H-14で14号溝に切られる。

(形状・規模) 沼の取水口から南東端まで約30mに達する。幅80cm~3m80cm、深さは48~93cmである。覆土は主に黒褐色の砂質粘土である。川から沼に取り入れた水を放水した灌漑用水路と考えられる。特徴的なのは取

水口が非常に狭く沼の底近くにあり、そこから急に南へ登り勾配になっていることである。また、E-12付近は、水を貯めておくような広い溝になっている。温め施設と考えられる。

NUMA（沼）（第9図）

（位置） H～R-12～20グリッドに位置し、KAWA 2に隣接する。

（形状・規模）相川の旧河道（KAWA 2）の流路を利用したものであり、NUMAとKAWA 2を区別したがその境界は明瞭ではない。確認できたおよその規模は、東西31m、南北34m、深さ1.9mである。また、珪藻・花粉分析の結果でも、NUMAはKAWA 2から常に流水の影響を受けていると推定されている。このことは、NUMAの水質が溜池のように富栄養化することなく、比較的清浄であったことを物語っており、当時の水の利用方法を検討する上で考慮する必要がある。

KAWA 2（川）（第9図）

（位置） G～T-18～26グリッドに位置し、調査地区の中央に当たる。

（形状・規模）方形周溝墓などが築造された西側の微高地と東側の地形の境を流れている。幅約17m44cm～20m、深さ約2mを測る。地山も扇状地性の砂礫の堆積物であり、KAWA 2の覆土とが極めて類似していること、また地下水の湧水も多く、明確に河床面を確認できなかった。SY06の東側の部分では焼けた人頭大の礫と平安時代の壺や骨の出土があり、祭祀もしくは葬送が行われた可能性が認められた。大型の木製人形（ひとがた）が2体頭を寄せるように接近して出土した。また周辺で斎弔も出土したが、地面に突き刺さったような状態でなく祭祀を行った地点を特定できなかった。

第4節 中世の遺構

SD 14（14号溝）（第9図、第54図）

（位置） E-16、F-15、G-15、H-10～15、I・J・K・L-10、M・N-11グリッドに位置する。16号溝をH-14付近で切る。

（規模・形状）北側は沼に沿って蛇行し、平安時代の住居群の東側に大きく蛇行して流れ調査区南東の端に到達する。長さは約75mに達し、幅1m20cm～2m、確認面からの深さ21～30cm、N-11で消滅する。遺物を見る中世のものと思われる陶器片が出土しており、沼が埋没後、湿地となった頃つくられたと考えられる。

（出土遺物）陶器片

第5節 現代の遺構

SD 01（1号溝）（第28図、第5図1～9）

（位置） H・I-28、J・K-27、K・L-26、M・N-25、N・O-24グリッドに位置する。微高地の縁を走り4号方形周溝墓を切る。

（形状・規模）グラントを造成する前の水路であったと考えられる。溝の両側には土止めに使ったと思われる杭が多數出土した。南北に延び全長55m、幅は1m～1m40cm、深さは確認面から30～40cmである。覆土は灰色の砂質粘土である。

（出土遺物）ガラス製のピン、学生服のカラー、平安時代の土器片など

第4章 遺 物

第1節 方形周溝墓出土の土器（第36図～第43図）

本遺跡の方形周溝墓は11基確認されているが、旧野球部のダイヤモンド地域は、SD07、08、09がこの付近から流出していることからも判明するように旧地形は微高地であったと思われ、削平のため方形周溝墓はほとんど失われていたので、5から11号までの方形周溝墓からの出土遺物は少ない。これに対して、やや地形が低い部分にあった1～4号の方形周溝墓は幸い削平を免れ、出土遺物も豊富であった。4号方形周溝墓の土層断面の観察からは、KAWA 2（川）を覆っていた砂層と類似した物が4号方形周溝墓の堆積土の中にも見られ、平安時代までは、方形周溝墓の溝は存在した可能性が高い。であるから、3号、4号の方形周溝墓の溝の中から古墳時代後期の坏などが出土するものと思われる。

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
SY01								
1	壺			5.8	内面ハケ	密（長石）	明褐色	
2	壺			22.8	内外面ヨコナデ	密（雲母）	明褐色	
3	壺				外面ヘラ	密（長石）	明褐色	
4	壺			11.4	内外面ヘラ	密（雲母）	明褐色	
5	钵			8.3	3.0	4.3	ナデ	密（雲母）
6	甌				内面ヘラ	密（長石）	褐色	
7	甌			18.5	内外面ハケ	やや粗（雲母長石）	明灰褐色	口唇部キザミメ
8	甌			20.4	内外面ハケ	密（雲母長石）	明褐色	
9	台付甌				外面ハケ	密（雲母長石）	明褐色	
10	高环			19.6	外面ヘラ	密（雲母長石）	明褐色	
11	甌			6.7	内外面ヘラ	密（長石）	明灰褐色	
12	甌			5.8	外面ヨコナデ	密（長石）	明赤褐色	
13	甌				外面ハケ	密（雲母長石）	明褐色	口唇部キザミメ
14	甌				外面ハケ	密	明褐色	LRの裏筋横文の縫を結
15	甌				口唇部キザミ	密（雲母）	明褐色	口唇部キザミメ
16	甌				口唇部キザミ	密	褐色	口唇部キザミメ
17	甌				外面ハケ	密（長石）	褐色	口唇部キザミメ
18	甌				口唇部キザミ	密（長石）	明褐色	口唇部キザミメ
19	甌				口唇部キザミ	密（長石）	褐色	
20	甌？				外面たたき	織密	青白色	須恵器
SY02								
1	甌			8.4	5.7	18.0	外面タタキ	密（長石）
2	甌			12.8	8.4	29.2	外面ヨコナデ	密（長石）
3	台付甌			15.2	8.6	26.4	外面ハケ	密（長石）
4	台付甌			15.4	7.1	23.2	外面ナデ	密（雲母）
5	甌			6.7			外面ハケ	密（雲母）
6	台付甌							
7	甌							
8	有透装飾高杯							
9	有透装飾高杯							
10	有透装飾器台？							
11	甌							
SY03								
1	甌			24.0			ヘラヨコナデ	密（雲母長石）
2	甌			15.8			内外面ナデ	密（雲母）
3	甌			15.7			内面ヨコナデ	密（雲母）
4	壺						外面ヘラ	密
5	壺			12.0	6.5	17.3	内面ナデ	密（長石）
6	壺			10.0	4.9	18.0	内面ハケ	密
7	S字状口縁台付甌			14.1			外面ハケ	密（雲母長石）
8	台付甌						内外面ハケ	密（雲母長石）
9	有透装飾器台						外面ハケ	密（雲母長石）
10	有透装飾器台			22.5	18.5	14.0	内外面ミガキ	密
11	高环			25.8	16.3	14.4	内外面ミガキ	密
12	高环			26.8	16.8	14.6		
13	高环			22.2			外面ヘラケズリ	密（雲母）
14	环			15.0		5.4	外面ヘラ	密
15	小型甌			9.3	2.0	5.7		明褐色
16	小型甌						ナデ	明褐色
17	手捏土器						密（雲母長石）	褐色
18	环			4.9	3.1	3.9	外面ヘラ	密
19	环			13.0		3.7		明赤褐色
20	甌			13.3		5.1	密	赤褐色
							ナデ	明褐色
								口縁部横状浮文

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
21	壺				密	暗褐色		頸部裏面にキザミ
22	壺				密(長石)	明褐色		口縁部横状浮文
23					密(雲母)	明赤褐色		崩毛状沈線文
24								崩状波紋
25					外面ハケ	密		沈線文
26					外面ハケ			条痕文か?
27					外面ハケ			崩毛状沈線文
28					外面ハケ			崩状波紋に凸形浮文
29					崩毛状沈線文			
SY04								
1	壺	24.2				密	明褐色	有段口縁 536,539,578,579,580,581,582,583,597,599,600
2	壺	10.6		19.2				有段口縁 315,215,314
3	壺	11.6	4.9		内外面ヨコナデ	密(長石)	明褐色	378,379
4	壺	15.0			外面ハケ	密(雲母)	明褐色	有段口縁 234
5	壺				外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	507,508,499
6	甕	22.1			内外面ハケ	やや粗	明褐色	468,465,462
7	甕	21.4			内面ハケ	密	明褐色	
8	S字状口縁台付壺	10.9			内外面ハケ	やや粗(雲母長淡)	褐色	
9	S字状口縁台付壺	11.6			内外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
10	S字状口縁台付壺	16.2			外面ハケ	密	明褐色	
11	S字状口縁台付壺	13.9			外面ハケ	密	明褐色	
12	S字状口縁台付壺	14.4			外面ハケ	密	明褐色	
13	高坏	20.9			内外面ハケ	密	明褐色	
14	高坏		7.2		外面ナデ	密	明褐色	
15	高坏				外面ヘラ	密	明褐色	
16	有造黃銅器台	20.0	16.1	14.1	外面ミガキ	密	暗褐色	
17	器台	28.0			ナデ	緻密	明褐色	
18	高坏	20.0				緻密(長石)	明褐色	
19	器台	9.2	13.5	9.3		緻密(長石)	明褐色	
20	器台					緻密	明褐色	
21	器台					密	明褐色	
22	壠				ナデ	密	明褐色	試點SY03出土
23	壠	12.6		5.4	密	明褐色		
24	壠	13.0			3.7 外面ヘラ	緻密	明褐色	
25	壠	14.0			内面ヨコナデ	緻密(雲母長石)	明褐色	
26	壠	12.8			外面ナデ	密(雲母長石)	明褐色	
27	壺	15.0			外面ヨコナデ	緻密(雲母長石)	明褐色	
28	甕				外面キザミ	密	明褐色	陰帯上キザミ
29					外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	波状文
30					外面ヘラ	密(雲母)	明褐色	陰帶上繩齒状工具でキザミ
31					外面ハケ	密(長石)	明褐色	波状文
32					外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	波状文
33					外面ハケ	密(雲母)	明褐色	波状文
34					内面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
35					外面ヘラ	密(雲母長石)	明褐色	
36					外面ヘラ	密(長石)	明褐色	沈線文
37					外面ヘラ	密(長石)	明褐色	沈線文
38	S字状口縁台付壺				内外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
SY05								
1	片口壺	8.0	6.2	11.7	外側ナデ	密(雲母長石)	明赤褐色	有段口縁
2	壺			4.9				
3	甕			7.8				
4	甕			5.6				
SY06								
1	壺	28.2			内外面ヨコナデヘラ	密(長石)	明褐色	
2	壺				外側キザミハケ	密(雲母長石)	明赤褐色	
3	甕	16.1			外面ヘラ	密(長石)	明赤褐色	
4	高坏				内外面ハケ	密		
5	甕	20.2				緻密	明褐色	
6	甕	20.0				密(長石)	明褐色	
7	台付甕		6.7			密(長石)	明褐色	
8		10.0			外面ナデ	密(雲母長石)	明褐色	
SY07								
1	甕				外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	口唇部キザミ
SY10								
1	片口鉢	12.6	4.3	7.1	外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	内外面赤影
SY11								

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
1	S字状口縁台付甕	18.2			外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
2	S字状口縁台付甕	16.0			外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
3	S字状口縁台付甕	15.2			内外面ヨコナデ	密(長石)	明褐色	
4	高坏	12.6			内面ヘラ	密(雲母長石)	明褐色	
5	S字状口縁台付甕				内外面ヨコナデ	緻密	明褐色	周面刺突文
6					内外面ヨコナデ	密(雲母長石)	明褐色	
7	高坏				内外面ナデ	緻密(長石)	明褐色	
8								

第2節 溝出土の土器（第5図、第47図～第54図）

本遺跡の溝はSD07と、SD08、09、16が弥生時代に属するものと思われる。特にSD07の調査区南端のJ-34グリッド付近には土器の集積が著しく、調査に手間取るほどであった。故意に土器を溝に投棄したような様相が伺える。

SD06はNUMA（沼）から取水して下流に流す水路（セギ）であったと思われる。SD01は昭和26年の運動場造成時に埋没した水路であり、出土遺物もごく最近のものである。

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
SD01								
1	壺	5.8	4.3	1.6	ロクロ	密	明褐色	
2	湯飲み	6.8	3.6	6.0	磁器			
3	湯飲み			5.9	磁器			
4	容器の蓋			5.6	プラスチック			
5	皿	15.4	7.2	4.2	磁器			
6	湯飲み	6.0	2.8	3.2	磁器			
7	小型ピン			1.6	ガラス			
8	小型ピン			5.8	ガラス		底に番号	
9	小型ピン	2.4	5.3	23.1	製作り	ガラス	底に文様あり	
SD07								
1	壺	24.0			ナデ	密(雲母長石)	淡褐色	口唇部横状浮文
2		18.0			内外面ハケ	やや粗(雲母民)	淡褐色	口唇部に棒状沈線文
3	壺	26.4			内面ヨコナデ	密(長石)	淡褐色	
4	壺	13.4			外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
5	壺	15.2			ナデ	密(雲母)	淡褐色	
6	壺				内面ヨコナデ	密(雲母長石)	淡褐色	
7	壺				外面ハケ	密(雲母長石)	淡褐色	
8	壺	27.0	9.6	32.0	外面ナデ			LRの構文地に円形浮文
9	壺	22.0			外面ハケ	密(雲母長石)	褐色	口唇部キザミメ網代筋
10	壺	19.8			外面ハケ			口唇部キザミメ
11	壺	17.7			外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	口唇部キザミメ
12	壺	15.0			外面上部ハケヨコナデ	密(雲母長石)	明赤褐色	口唇部キザミメ
13	壺	18.8			外面ハケ			口唇部キザミメ
14	壺	16.3	5.9	17.5	内外面ハケ	密(雲母長石)	褐色	口唇部キザミメ
15	壺	12.6				密(雲母)	明褐色	口唇部キザミメ
16	壺	17.0			颈部ハケ	密(雲母長石)	淡褐色	口唇部キザミメ
17	壺	15.0			外面ハケ	密(雲母長石)	褐色	口唇部キザミメ
18	壺	23.2			外面ヨコナデ	密(雲母長石)	明褐色	口唇部キザミメ
19	壺	21.8				密(雲母長石)	明褐色	口唇部キザミメ
20	壺	21.4				密(長石)	明褐色	口唇部キザミメ
21	壺	22.0			内外面ハケ	密(雲母)	明褐色	口唇部キザミメ
22	壺	18.2			ハケ	密(雲母長石)	明褐色	口唇部キザミメ
23	壺	17.1				密(長石)	明褐色	口唇部キザミメ
24	壺	18.0				密(長石)	明褐色	口唇部キザミメ
25	壺	18.2				密(雲母)	明褐色	口唇部キザミメ
26	壺	20.4				密(長石)	明褐色	口唇部キザミメ
27	壺	13.8			外面ヨコナデハケ	密(雲母長石)	明灰褐色	口唇部キザミメ
28	壺	13.4				密(長石)	褐色	口唇部キザミメ
29	壺	19.0			内外面ハケ	密(長石)	褐色	口唇部キザミメ
30	壺	15.0			内外面ハケ	密(雲母長石)	褐色	
31	壺	16.4			内面ナデ	密(長石)	明褐色	
32	壺	14.0			外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
33	壺	9.0			内面ヨコナデ	密(雲母)	明褐色	
34	台付甕	19.4	9.0	19.3	内面ヘラ	密(雲母長石)	明褐色	
35	壺	16.4			外面クシ	密(雲母長石)	明褐色	
36	壺	15.8			外面ハケヨコナデ	密(雲母長石)	明褐色	内外面赤彩
37	甕	15.5	5.4	10.8	内外面ナデ	密(長石)	明褐色	
38	甕	6.0			外側ヘラ	密(雲母長石)	明褐色	
39	甕	10.6	4.6	6.3	内外面ナデ	密(長石)	褐色	
40	甕	5.0			内外面ナデ	密(雲母長石)	明褐色	
41	甕	15.0				密(長石)	淡褐色	

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
42	鉢	18.0			内外面ヨコナデ	密(素母長石)	明褐色	内外面赤彩
43	小型鉢	8.6			内外面ヨコナデ	密(素母長石)	明褐色	
44	壺	4.9			内面ヘラ	密(素母長石)	明褐色	
45	手捏土器	4.4	2.7	2.8	密	明褐色		
46	壺?				内外面ヘラ	密(素母長石) 褐色		
47	壺?				密	密(素母長石)	明褐色	
48		5.9			内面ヘラ	密	明褐色	底木葉裏
49	壺	17.4			内外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	底木葉裏
50		8.3			ナデ	密(長石)	明褐色	底木葉裏
51		6.9			外面ナデ	密(長石)	明褐色	底木葉裏
52		7.1			外面ナデ	密(素母長石)	褐色	底木葉裏
53		7.8			外面ハケ	密(素母長石)	明赤褐色	底木葉裏
54		5.7			内面ヘラ	密(長石)	褐色	底木葉裏
55		8.0			密	密(素母長石)	明褐色	底木葉裏
56		6.3			密	密(素母長石)	明褐色	底木葉裏?
57	鉢	6.1			密	密(素母長石)	明褐色	底内外面赤彩
58	壺	7.0			密	密(素母長石)	明褐色	底
59		5.7			密	密(素母長石)	明褐色	底
60		4.3			密	密(素母長石)	明褐色	底
61		10.6			密	密(素母長石)	明褐色	底
62		6.1			密	密(素母長石)	明褐色	底
63		6.2			密	密(素母長石)	明褐色	底
64		11.6			密	密(素母長石)	明褐色	底
65		7.3			密	密(素母長石)	明褐色	底
66		5.9			密	密(素母長石)	明褐色	底
67	壺				密(素母長石)	明褐色	口縁部棒状浮文	
68	壺				密(素母長石)	明褐色	口縁部棒状浮文	
69					密(素母長石)	明褐色	口縁部RLの純文	
70	壺				密(素母長石)	明褐色	肩部LRの純文	
71	壺				密(素母長石)	明褐色	肩部RL、RLの純文	
72	壺				密(素母長石)	明褐色	肩部LRの純文	
73	壺				密(素母長石)	明褐色	肩部円形浮文	
74	壺				密(素母長石)	明褐色	肩部円形浮文	
75	壺				密(素母長石)	明褐色	口唇部キザミ	
76	壺				密(素母長石)	明褐色	口唇部キザミ	
77	壺				ヘラヨコナデ	密(素母長石)	明褐色	口唇部キザミ
78	壺				外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	口唇部キザミ
79	壺				外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	口唇部キザミ
80	壺				外面上部ヘラ	密(素母長石)	明褐色	口唇部キザミ
81	壺				外面ハケ	密(長石)	明褐色	口唇部キザミ
82	壺				外面ハケ	密(素母長石)	明赤褐色	口唇部キザミ
83	壺				外面ハケ	密(素母長石)	褐色	口唇部キザミ
84	壺				外面ハケ	密(素母長石)	深褐色	口唇部褐色
85	壺				外面ハケ	密(素母長石)	暗褐色	
86	壺				外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	
87	壺				外面ハケ	密(長石)	深褐色	
88	壺				外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	波状文
89	壺				外面ハケ	密(長石)	褐色	波状文
90	壺				外面ハケ	密(素母長石)	明灰褐色	波状文
SD08								
1	台付壺	16.3	8.6	26.1	内外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	口唇部にキザミ
2	瓶	14.1	5.0	11.3	内面ハケ	密(長石)	明褐色	単孔
3	壺?	13.5	6.9	14.7	外面ハケ	密(素母長石)	明褐色	口唇部にキザミ
4	壺?				内面ハケ、ヨコナデ	密(素母長石)	褐色	波状文
5	壺?				外面ハラ	密(素母長石)	明褐色	沈殿文
6	壺?				外面ハケ	密(長石)	赤褐色	波状文
7	壺?				内外面ハケ	密(素母長石)	褐色	波状文
8	壺?				外面ハケ	密(長石)	明褐色	波状文
SD16								
1	环	23.0			内面ヨコナデ	密(素母)	明褐色	甲斐型の环か?
2	壺	26.0			内面横文	密(素母)	明褐色	
3	环	11.4	5.9	2.3	ロクロ	密(長石)	明褐色	古代末～中世の环
4	壺	12.1			内面ナデ	密(長石)	明褐色	
5	壺?				外面液状文	密(素母)	赤褐色	
6	壺?				外面液状文	密(素母長石)	褐色	

第3節 NUMA・KAWA 2・確認面出土の土器 (第55図～第56図)

沼、川から多量の木製品とともに土器が出土している。これらの土器の年代により木製品の年代と沼、川の利用年代が判明する。

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
NUMA								
1	环	13.2	9.4	5.0	ロクロ外面ヘラ	密(雲母長石)	明褐色	
2	环	10.3	8.3	5.4	内外面ヘラ	密(長石)	明褐色	暗文
3	环	12.4	6.5	5.5	外面ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
4	环	13.5	8.5	3.6	クロ	最密	灰色	
5	环	10.8			ロクロ外面ヘラケズリ	最密淡	褐色	
6	环	14.7	8.2	3.9	ロクロ	最密	灰色	
7	环	12.8			ロクロ	最密	灰褐色	
8	环	14.3	4.6	4.8	ロクロ外面ヘラケズリ	最密(雲母)	淡褐色	
9	环	14.0	7.7	3.8	ロクロ	最密	灰色	
10	环	12.3	4.2	4.0	ロクロ底部ヘラケズリ	最密	明褐色	
11	环	14.0	4.2	5.0	ロクロ外面ヘラケズリ	最密(長石)	淡褐色	
12	环	12.1	3.6	2.8	ロクロ外面ヘラケズリ	密(長石)	明灰褐色	
13	环	11.6	4.9	4.5	ロクロ底部ヘラケズリ	最密	淡褐色	
14	重	15.6			ロクロ	最密	淡褐色	
15	重	6.0			ロクロ	最密	淡褐色	
16	重	16.0	6.2	2.5	ロクロ	最密	淡褐色	
17	环	5.1			ヘラケズリ	最密	淡褐色	放射状暗文
18	蓋				ロクロ	最密	灰色	須恵器蓋
19	裏				密(長石)	明褐色		
20	蓋			20.0	内外面ナデ	密(雲母長石)	淡褐色	
21					内外面ヨコナデ	密(雲母長石)	淡褐色	
22					内外面ヘラ	密(雲母)	沈縞文	
23					内外面ヘラ	密(雲母長石)	褐色	縄文土器(曾利式)
KAWA2								
1	环	12.4			内外面ヨコナデ	最密(雲母長石)	褐色	
2	环	11.6	4.8	4.5	ロクロ	最密(雲母)	明灰褐色	内面放射状暗文
3	环	14.7	6.7	5.4	ロクロ	最密(長石)	褐色	
4	环	12.0	5.6	3.9	ロクロ	最密(雲母長石)	淡褐色	
5	环	12.3	4.9	4.1	ロクロ	最密	淡褐色	
6	环	12.6	5.1	3.6	ロクロ	密(長石)	明褐色	
7	环	5.6			ロクロ	最密(長石)	明褐色	
8	环	12.1	4.2	4.0	ロクロ	最密	褐色	
9	高环			9.6	内外面ヘラ	密(雲母長石)	淡褐色	
10	器台			10.3	内外面ナデ	密(長石)	明褐色	
11	器台			17.0	ロクロ整形	最密	明褐色	
12	器台				内面ヘラ	密(雲母長石)	淡褐色	
13	环	12.2	5.5	3.4	ロクロ外面ヘラケズリ	最密(雲母長石)	明赤褐色	
14	蓋	24.0			最密(雲母長石)	明褐色		
15	羽釜	24.1			外面ヘラ	密(雲母長石)	外副褐色	
16					外面ハケ	密(雲母)	褐色	口唇部キザミ
17						密(雲母長石)	褐色	波状沈縞文
18						密(長石)	褐色	
19	S字台付蓋					密(雲母)	淡褐色	
20	縄文深鉢把手					密(雲母長石)	赤褐色	縄文土器(曾利式)
KAKU								
1	壺	15.4	外		面ハケ	やや粗(雲母長石)	明褐色	
2	壺	16.4			外面上部ハケ	密(雲母長石)	明褐色	
3	台付壺	14.0				密(長石)	明褐色	
4	壺					密(長石)	暗褐色	口唇部彷彿状浮文
5	壺				内面ハケ	密(長石)	明褐色	口唇部沈縞文
6	壺					密(雲母長石)	褐色	縄文地に円形浮文
7	壺					密(雲母長石)	褐色	縄文地円形浮文
8	壺					密(雲母長石)	暗褐色	無文地円形浮文
9						密	暗褐色	縄文土器(相之内式)

第4節 住居址出土の土器（第44図、第45図）

弥生時代の住居址が2号方形周溝墓の中に1軒のみ検出されたが、弥生時代の土器の出土量に比して、住居軒数がきわめて少ない。平安時代の住居址はH-18付近に集中して重複しており、血縁的集団がある程度の期間居住したと思われる。

No	器 形	口径	底径	高さ	調 整	胎 土	色 調	備 考
SB01								
1	壺	11.7	5.7	14.0	外面ハケ	緻密（雲母長石）	褐色	
2	壺		7.5		外面ハケ	緻密（雲母長石）	明褐色	
SB02								
1	壺	16.2				審（長石）	青白色	須恵器
SB03								
1	壺	13.2				緻密	灰色	
2	壺	12.0				緻密（雲母）	明褐色	
3	壺	17.8				審（長石）	明褐色	
4	壺	14.8				緻密	深褐色	
5	壺	3.4			外面ヘラケズリ	審	黃褐色	
6	高台壺	12.6	7.9	3.6		審（雲母長石）	灰褐色	須恵器
7	壺	25.6				審（雲母長石）	明褐色	
8	壺	22.0				審（長石）	褐色	
9	壺	192.0				審（長石）	褐色	
10	壺？		11.6		ナデ	審（雲母長石）	明褐色	
SB04								
1	壺	11.4			外面ハケ	緻密（長石）	褐色	波状文
SB05								
1	壺	5.8			外面ヘラケズリ	緻密	明褐色	
2	壺	12.0			外面ヘラケズリ	緻密	明褐色	1と接合か？
SB06								
1	壺	11.6				緻密（長石）	明褐色	
2	壺	11.5	5.2	3.9	外面下部ヘラケズリ	緻密	明褐色	
3	鉢	18.5	9.7	7.0		緻密	明褐色	
4	壺	18.7			外面下部ヘラケズリ	審（雲母長石）	明褐色	
5	壺				内外面ハケ	審（雲母長石）	褐色	
SB07								
1	壺	6.8			底部ヘラ切り	緻密	青白色	

第5節 木製品(第58図～第68図)

番号	東西トレーナー	グリッド	名 称	最大長	最大幅	最大厚	形態的特徴
1	東西ルン	R-25	直串	5.70	1.00	0.500	直い三角柱状・上端欠損・先端へ向けて細くなる
2	TANBO	K-21		2.80	1.55	0.436	
3	TANBO	K-21	角材木製品	6.30	4.80	2.900	
4	TANBO	K-21	杭	19.60	2.50	2.100	上端欠損・前面・三角柱状・現代のものか?
5	TANBO	K-21	板状木製品	6.35	5.00	1.470	上端及び下端欠損・右側面から左側面に向かって薄くなり、断面はくびれ形
6	SD15	H-19	棒状木製品	21.80	1.40	1.600	下端から3cmほどどのところに直径1mm程度の穿孔・先端1cmほどか厚さ1mmほど切り込まれている
7	SD01	L-26	下駄	22.10	8.10	1.700	表面に葉と思われる模様・通路・底部穴一部欠損
8	SD01	N-25	F駄	21.40	7.40	2.800	表面に葉と思われる模様が見られる・通路・左側と底部が欠損
9	NUMA1	-	板状木製品	5.30	2.80	0.450	原板状・下端欠損・上端は斜く切り落す
10	NUMA1	-	直串	15.30	0.90	0.606	先端部が膨化・上端欠損・角材状
11	NUMA1	I-11	直串	11.00	0.70	6.000	先端部が膨化・上端欠損・先端を削て作る・角材状
12	NUMA1	I-12	板状木製品	25.10	1.65	0.800	12-15で同一個体・圓錐の角を丸みを帯びて作る・上下端欠損
13	NUMA1	I-12	板状木製品	25.10	1.65	0.800	12-15で同一個体・圓錐・前面の角を丸みを帯びて作る・上端端欠損
14	NUMA1	I-12	板状木製品	25.10	1.65	0.800	12-15で同一個体・圓錐・前面の角を丸みを帯びて作る・上端端欠損
15	NUMA1	I-12	板状木製品	25.10	1.65	0.800	12-15で同一個体・圓錐・前面の角を丸みを帯びて作る・上端端欠損
16	NUMA1	I-12	板状木製品	6.50	2.80	0.823	17の一部か?
17	NUMA1	I-12	板状木製品	16.50	16.40	0.811	複数に沿てて5分割されている・各部欠損
18	NUMA1	I-12	柱状木製品	39.60	8.60	8.700	上下端欠損・下端部に若干変化の痕跡・正面下部4分の1ほど削り落す
19	NUMA1	J-14	直串	9.98	0.60	0.330	先端部が膨化・上端欠損・残存部上端3分の2は三角柱状・サワラ
20	NUMA1	J-12	直串	11.33	7.83	0.570	浅い風の一部・2点あり・ハルニレ
21	NUMA1	J-13	板状木製品	15.30	4.20	1.300	上端及び下端欠損・正面中央で左が低く段差形成(左側削板状)
22	NUMA1	J-13	棒状木製品	6.60	2.75	0.700	上端端欠損・下端が膨化・表面に剥離
23	NUMA1	J-14	棒状木製品	18.00	1.45	0.806	上端及び下端部欠損・扁平な棒状
24	NUMA1	J-15	棒状木製品	13.30	1.20	0.998	上端端欠損・角材状
25	NUMA1	J-15	棒状木製品	8.00	1.20	1.100	上端端欠損・角材状・中央で折れる
26	NUMA1	J-16	棒状木製品	18.00	1.50	1.760	先端は鋸めに欠損・上端も欠損
27	NUMA1	J-18	角材木製品	11.10	4.70	2.500	下端欠損・左側面に削り落が頭著に見られる・全体的に直方体となるよう一本の木から形成・残存部上端ではほぼ直な突起が残る
28	NUMA1	J-19	直串	21.30	1.40	1.600	不整形ながら三角柱状につくる・先端を鋸角に削る
29	NUMA1	J-19	直串	11.60	1.30	0.500	下端で切り落し・上端剥離
30	NUMA1	J-19	板状木製品	6.90	3.30	0.438	片面(実験用では裏面)に広範囲な変化・薄板状
31	NUMA1	J-19	直串	6.90	0.90	0.576	先端部が膨化し、木目と垂直の方向に裂けている
32	NUMA1	J-19	削代繩み	4.00	3.52	0.030	33と同一個体
33	NUMA1	J-19	削代繩み	19.83	6.43	0.030	32と同一個体
34	NUMA1	J-19	板状木製品	7.50	2.50	0.900	上端端欠損・板状
35	NUMA1	K-16	直串	11.30	0.50	0.600	先端部が鋸化・上端欠損
36	NUMA1	K-18	板状木製品	16.60	3.40	0.650	上下端欠損・表面はほぼ完全な板状・側面は一面のみや斜めに削られている
37	NUMA1	K-18	板状木製品	11.60	2.10	0.467	上端端欠損・左半分の下2分の1はこわれて折れている
38	NUMA1	K-18	棒状木製品	30.00	0.80	0.500	出土時：手一組で樹皮状の物でくらっていた・先端を鋸く斜めに切り落す・ほぼ角材状・若干反りを持つ
39	NUMA1	K-18	棒状木製品	39.00	1.00	0.700	同上
40	NUMA1	K-18	棒状木製品	36.40	0.60	0.390	同上
41	NUMA1	K-18	棒状木製品	19.20	0.80	0.500	同上
42	NUMA1	K-18	棒状木製品	12.20	0.70	0.270	同上
43	NUMA1	K-19	板状木製品	11.90	2.40	0.871	若干角をとれた板状・上下端欠損
44	NUMA1	K-19	板状木製品	7.80	1.00	0.700	若干角をとれた板状・上下端欠損
45	NUMA1	K-19	直串	16.50	1.20	0.500	下端欠損・下端は丸平につくる・薄板状・上端2cmほどが曲がっている
46	NUMA1	K-19	板状木製品	11.70	2.00	0.605	上端及び下端欠損・扁平な板状
47	NUMA1	K-19	板状木製品	16.90	3.30	0.534	表面が平らではないが、全体として板状・上下端欠損・所々に黒い付着物・上端左一部欠損
48	NUMA1	K-19	板状木製品	14.30	2.40	1.193	上端及び下端欠損・扁平な板状
49	NUMA1	K-19	板状木製品	11.60	2.30	0.784	上端及び下端欠損・扁平な板状
50	NUMA1	K-19	棒状木製品	23.60	2.50	1.550	下端2分の1程度が一部欠損・上部へ向かって次第に薄くつくり、上端は丸平を削ぎる?・角材状
51	NUMA1	K-19	柱状木製品	54.00	11.25	7.400	正面左半分が変化により欠損・一部に角柱状に加工した痕跡
51	NUMA1	K-19	柱状木製品	31.65	5.20	1.80	柱状の一部か?
52	NUMA1	L-11	棒状木製品	8.15	1.35	0.650	先端は丸平に作る
53	NUMA1	L-12	板状木製品	17.20	5.20	0.562	上下端欠損・出土時は信ほの長さを有したが、裏面に至る過程で捲れ不能など破損・裏面に削えうる部分のみ
54	NUMA1	L-12	棒状木製品	7.20	1.10	0.750	上端端欠損・角材状
55	NUMA1	L-19	板状木製品	42.00	5.50	0.800	上端とも欠損・全体にわたり左側欠損・板状・ヒノキ科
56	NUMA1	L-19	棒状木製品	13.70	2.40	2.100	上端及び下端若干欠損・断面は裏面に近い梢円形・極目取り・左側に鋸めに切り込み・トケル
57	NUMA1	L-19	板状木製品	9.80	0.70	0.500	側面が変化・上端端欠損・板状
58	KAWA2	K-21	板状木製品	6.30	1.00	0.350	上端欠損・薄板状
59	KAWA2	K-21	棒状木製品	11.20	1.50	1.000	下端欠損・上端は斜めに切り落す・ほぼ角材状
60	KAWA2	K-21	板状木製品	15.80	0.78	2.250	全体に丸みを帯びた木片・流木の可能性あり
61	KAWA2	K-21	板状木製品	6.50	1.95	0.700	上端端欠損・薄板状・ほぼ全表面化
62	KAWA2	K-21	板状木製品	8.20	8.20	6.500	二段の円柱状・円周約5分の1を欠損・下端腐食により欠損・木製杯の脚部の可能性あり

番号	東西トレンチ	グリッド	名 称	最大長	最大幅	最大厚	形 態 的 特 徴
63	KAWA2	K-22	直串	7.20	1.30	9.500	上下端欠損・三角柱状
64	KAWA2	N-22	直串	10.50	0.80	0.319	先端部が炭化・先端を斜めに切り落とす
65	KAWA2	N-22	直串	6.90	1.00	0.570	底面部が斜めに切り落とす
66	KAWA2	N-22	曲げ物	14.91	11.26	0.650	底面と側板が接合した状態で出土・側板に桜形の縦じ目が認められる・底はスギ・側板はヒノキ
67	KAWA2	N-22	直串	5.30	0.60	0.248	直串の一部か?
68	KAWA2	N-22	直串	9.20	1.20	0.950	先端部が炭化・上端欠損・上端へ向かって薄くなる三角柱状
69	KAWA2	N-22	直串	6.00	1.80	1.100	下軸の板部の一部と思われる
70	KAWA2	N-22	板状木製品	8.40	1.40	3.560	上に端欠損・薄板状
71	KAWA2	N-22	下駄(衡部)	8.20	4.80	2.800	運搬部の一部と板の一部が残る
72	KAWA2	N-22	直串	13.90	1.30	1.262	上端欠損・先端部が炭化・いびつな三角柱状
73	KAWA2	N-22	板状木製品	19.50	2.40	0.442	上端とも欠損・下端に向けた縮くなる・下半分は切り込み側の開口部が若干斜めに平たく削かれている・底か?・ヒノキ
74	KAWA2	N-22	直串	9.50	1.00	0.418	表面が若干斜めに切り落としてあり・斜めになった面がわずかに炭化・下端へ向かって細くする
75	KAWA2	N-22	直串	18.30	1.40	0.800	上下端欠損・下端3分の1ほどから下へ若干細くなる・板状
76	KAWA2	N-23	碗	15.68	5.18	0.670	黒漆塗り・非常にていねいに加工されている・底は欠損・ケヤキ
77	KAWA2	N-23	人形	35.50	8.20	0.760	表面に切り付けられた痕跡が多くみられる・スギ
78	KAWA2	N-23	人形	38.80	8.80	0.720	表面部が円錐状に炭化・表面に瘤突部・スギ
79	KAWA2	O-22	板状木製品	18.70	3.30	0.489	上下左右欠損・上端5cmほどの右側面より径1.5cmほどの穴あり
80	KAWA2	O-22	板状木製品	19.90	3.00	0.524	上下左右欠損
81	KAWA2	O-23	板状木製品	11.15	2.70	1.300	下端を斜めに切り落とす・裏面は丸みを帯びている
82	KAWA2	O-23	板状木製品	20.60	4.60	1.850	下端欠損・下端に向けた薄く縮くなる板状・裏面一部剥離
83	KAWA2	O-23	直串	8.00	1.20	1.350	先端部が炭化・先端は丸みを帯びる?・五角柱状
84	KAWA2	O-24	曲げ物(側板)	10.00	4.80	0.460	板皮剥離め具残存・BSと同一個体?
85	KAWA2	O-24	曲げ物(側板)	9.62	5.02	0.400	左端欠損・表面に斜めに継割りあり・BSと同一?・ヒノキ異
86	KAWA2	O-24	板状木製品	11.10	2.80	1.100	上下端欠損・下端若干炭化・全体的に磨滅・角材状
87	KAWA2	P-22	直串	13.50	1.00	0.650	先端部が炭化・先端は削れ状・上下端欠損・三角柱状
88	KAWA2	P-23	曲げ物(側板)	16.10	4.83	0.420	縫合部が認められる・ヒノキ
89	KAWA2	P-23	直串	9.10	1.30	1.182	先端部が炭化・上下端欠損・角材状
90	KAWA2	P-25	直串	36.20	0.80	0.787	先端部が炭化・もう片方は削りた・ほぼ完形・中央部が細く両端に丸みを帯びていてよくくくる・ほぼ角材状・ヒノキ
91	KAWA2	P-25	直串	9.80	0.90	0.500	先端部が炭化・いびつな薄板状・上下端欠損
92	KAWA2	P-25	板状木製品	6.35	0.70	0.200	洞窟か?・薄板状
93	KAWA2	Q-25	曲げ物(底?)	13.21	10.32	0.800	側板と結束する板皮剥離め具残存・スギ
94	KAWA2	Q-22	板状木製品	5.70	3.40	1.800	断面三角柱状・一面は丸みを帯びる・上端は平らに斜めに切り落とす・下端欠損
95	KAWA2	Q-22	直串	29.85	1.70	1.100	先端部が炭化・いびつな三角柱状・先端部約3cmほどが剥離する・丸みを帯びて、ヒノキ
96	KAWA2	Q-22	曲げ物(側板)	3.30	6.20	0.366	左端欠損・表面が炭化? (黒い付着物)
97	KAWA2	Q-23	板状木製品	8.25	1.95	0.900	上端欠損・角材状・上端へ向かって薄くなる・下端炭化
98	KAWA2	Q-23	枝	-	-	-	3個体あり
99	KAWA2	Q-23	棒状木製品	22.00	2.05	1.200	上下端は削れ欠損・裏面は角円内の断面・ヒノキ
100	KAWA2	Q-25	板状木製品	13.30	6.10	0.850	部材か?・上端欠損・下端部より1cmほど上に穴あり
101	KAWA2	Q-25	棒状木製品	14.30	5.00	4.200	側板さればほぼ円柱状・上下端は若干斜めにつくられる・針葉樹
102	KAWA2	Q-25	板状木製品	11.70	1.05	0.550	100の一部か・サツラ
103	KAWA2	R-24	曲げ物(底)	12.98	8.03	1.020	側板と結束する板皮剥離め具残存・スギ
104	KAWA2	R-24	板状木製品	12.63	6.62	0.220	非常な薄い板状
105	KAWA2	R-24	棒状木製品	18.90	2.60	1.900	上下端欠損・いびつながら縦平面の凸凹状断面・正面側面には全面が炭化
106	KAWA2	R-25	直串	9.00	0.90	0.589	上下端欠損・三角柱状・下端側面一部剥離欠損・先端へ向けて細くなる
107	KAWA2	R-24	板状木製品	14.70	1.55	1.250	先端部が斜めに切り落とされ炭化・上端欠損・角材状
108	KAWA2	R-25	材端	13.50	10.50	8.500	上下端は丸みを帯びて炭化・下端は先端灰になる
109	KAWA2	R-25	板状木製品	2.90	0.90	0.478	上端欠損・先端を斜めに切り落とす
110	KAWA2	R-25	直串	10.80	1.70	1.250	柱形を有する角材状・先端は炭化・下端左側一部欠損か?・先端へ向けて細くなる
111	KAWA2	R-25	直串	13.40	1.40	1.500	先端部が炭化(若干欠損)・上端を斜めに切り落とす・先端へ向けて丸みを帯びる・断面はほぼ正三角形
112	KAWA2	R-25	板状木製品	8.10	1.50	0.450	下端欠損・薄板状・上端は斜めに欠損
113	KAWA2	R-25	板状木製品	1.55	1.70	0.200	薄板状
114	KAWA2	R-25	板状木製品	10.35	1.30	0.700	上下端欠損・側面一面を平らに削る
115	KAWA2	R-25	棒状木製品	7.10	0.90	0.60	上下端欠損・上端から2.5cmほどのところ左側面に丸みを帯びてつくれるようを意味する
116	KAWA2	R-25	板状木製品	21.50	3.48	0.250	薄板状3点あり
117	KAWA2	R-25	板状木製品	25.10	3.00	0.30	板状
118	KAWA2	R-25	板状木製品	14.60	3.60	0.70	上下端とも欠損・若干ラミングを帯びた板状・ヒノキ
119	KAWA2	R-25	棒状木製品	31.90	2.40	0.212	先端部が広範囲で炭化かつ一部欠損・先端部を斜めに切り落とす・若干厚手な棒状・上端は丸みを帯びてつくる
120	KAWA2	R-25	棒状木製品	3.65	1.70	0.200	薄板状
121	KAWA2	R-25	棒状木製品	8.65	0.85	0.60	下端欠損・三角柱状
122	KAWA2	R-25	板状木製品	6.40	2.50	0.200	薄板状
123	KAWA2	R-25	板状木製品	4.00	3.30	0.680	両側面を斜めに切り落としている・上端及び下端欠損・板状・ヒノキ
124	KAWA2	R-25	棒状木製品	11.20	2.70	0.507	先端3分の1程度を三角形に切り込み・下3分の2を長方形に加工・方形部の画面の1つは幅1mm程度に変更ともくさび状

番号	東西トレンチ	グリッド	名 称	最大長	最大幅	最大厚	形 態 的 特 徴
125	KAWA2	R-25	棒状木製品	27.30	3.60	1.900	上下端欠損・左側面一部を除き欠損・右側面は平らに加工・角材状
126	KAWA2	S-24	直串	7.50	1.40	1.100	上下端欠損
127	KAWA2	S-24	直串	5.80	1.80	1.150	上下端欠損・三角柱状
128	KAWA2	S-24	直串	7.50	1.60	1.200	先端部が変化・上端は三面を山形に切り落とす・ほぼ完形と思われる
129	KAWA2	S-25	直串	12.40	1.85	0.700	先端部が変化・上端欠損・三角柱状・残存部上端3分の1ほどでやや曲がっている
130	KAWA2	S-25	板状木製品	11.70	3.30	0.687	上下端欠損・左右も欠損か? 板状
131	KAWA2	S-25	板状木製品	6.10	2.50	0.400	上端欠損・両側端上端3分の2がそれぞれ欠損・薄板状
132	KAWA2	S-25	棒状木製品	13.95	0.80	0.639	正面・裏面とも削って整形・上端は削離か? 上下端をほぼ垂直に切る・扁平な棒状
133	KAWA2	S-25	棒状木製品	36.10	1.70	1.600	上端が斜めに欠損・正面欠損
134	KAWA2	S-25	棒状木製品	8.65	0.85	0.600	上端欠損・不整な五角柱状?
135	KAWA2	S-25	棒状木製品	13.90	0.40	0.500	三角柱状・先端へ向けて細くなる・ほぼ完形
136	KAWA2	T-25	直串	5.60	1.50	0.950	先端部から側面にかけて広範囲に変化・上端欠損・三角柱状
137	KAKU	-	棒状木製品	26.10	4.50	2.200	上下端欠損・角材状・上端から10cmほどの所、左側面に10cmほどの長さで斜めに上方に向かってはそ穴らしき穿孔あり
138	KAKU	O-14	棒状木製品	4.90	2.10	1.500	上端大根
139	-	-	直串	17.00	1.40	1.000	先端部が変化・もう片方は短く削り取られている・角材状・先端が曲がっている
140	-	K-21	直串	11.50	1.25	0.800	上端が斜ける・先端部が斜めに切り落とされ変化・上端欠損・先端4cmほどでやや細く先端へ向けて薄くなる・三角柱状
141	-	O-23	直串	23.10	1.30	0.750	先端部が変化・先端部を斜めに切り落とす・上端欠損・先端4cmほどでやや細く、先端へ向けて薄くなる三角柱状。一部
142	-	P-24	木製品	3.90	1.10	0.814	全周にわたり変化・先端を丸くする・角材状・上端欠損・カヤ
143	-	Q-14	棒状木製品	12.00	3.25	3.100	上下端欠損・表面上端2分の1と表面前端4分の1から上下端斜め欠損・円柱状に加工
144	-	Q-25	板状木製品	11.00	1.20	0.237	上下端欠損
145	-	Q-25	板状木製品	10.70	0.95	0.339	上下端右欠損
146	-	Q-25	棒状木製品	12.60	1.10	0.501	下端欠損・上端は斜めに切り落とす
147	-	Q-25	板状木製品	8.10	1.30	0.189	下端欠損
148	-	R-25	板状木製品	2.90	1.70	0.500	薄板状・上端欠損・全面に変化
149	-	R-25	板状木製品	4.30	1.65	0.460	薄板状・上端欠損
150	-	S-23	板状木製品	13.40	1.90	1.150	上下端欠損・下端へ向かって下3分の1ほどからやや太くなる角材状・先端は斜めに切り落とす・左側面下部切れ込み

第6節 石製品（第57図）

山梨県内の弥生の石器は、この時代に特徴的な柱状片刃磨製石斧、大型蛤刃磨製石斧、片刃磨製石斧の出土がまったく認められないという特徴がある。敷島町金の尾遺跡に大型磨製石斧があるが、縄文的な色彩が濃いものである。

打製石鋸

縄文時代の打製石斧と石鋸の明確な区分は難しいが、6号方形周溝墓から1点、7号溝から1点出土している。7号溝出土第57図2は石鋸の頭部に二つの突起が認められる。6号方形周溝墓出土の1は、縄文時代のものと判別が困難である。

石包丁

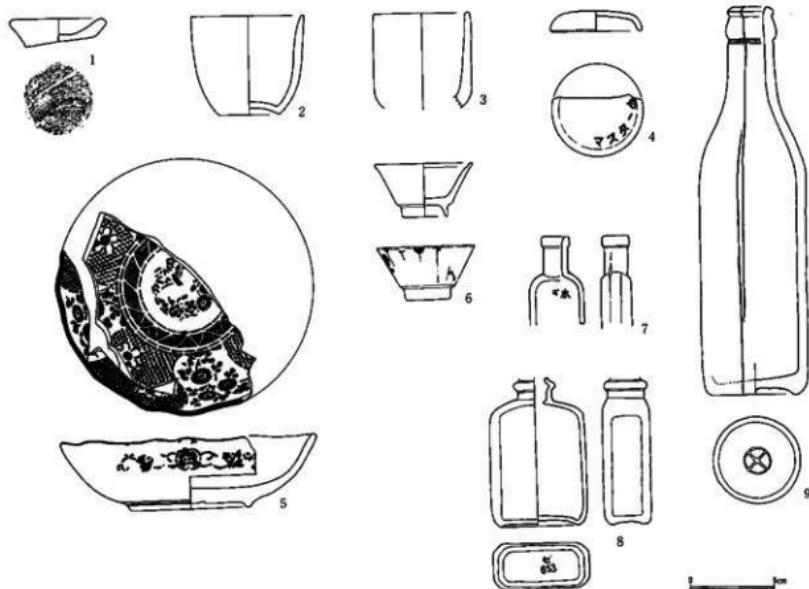
S Y06（6号方形周溝墓）から1点（第57図7）は剥片の一片に刃部をつけたもので、縄文時代の剥片石器とほとんど変わらないものである。SD16（6号方形周溝墓）から1点（第57図8）出土しているものは、横刃の側面に抉り込みがあり、打製の刃部を研磨してしている。なお、県内では敷島町金の尾遺跡、韮崎市上遺跡7号住居址、同市堂の前遺跡20号住居址、同市坂井南遺跡7号住居址、塩山市西田遺跡C区3号住居址、中道町東山北遺跡2号方形周溝墓3点の出土がある。金の尾遺跡、西田遺跡を除いてすべて古墳時代と考えられる。鉄石英について

塩部遺跡では鉄石英の小礫が比較的多く検出されている。鉄石英の級密な部分は貝殻状剥離面を示し、縄文時代から石器の材料として利用してきた。古墳時代の初頭においては、中道町米倉山遺跡の事例からは赤色顔料として利用された形跡がある。確かに鉄石英の部分によっては鉄分のみが凝固しており、ベンガラの原料のような状態をなしている。鉄石英を粉碎して鉄分のみを抽出してベンガラを生成したと考えられる。因みに鉄石英の産出地は御坂町達岡山、甲府市黒平などがある。

塙部遺跡石器

No	名 称	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	出土地点	その 他
1	石鋤	17.2	6.0	290	石・重量	凝灰岩	SY06	
2	石鋤	9.8	6.2	106	石・重量	粘板岩	SD07	
3	打製石斧		6.4	91	石・重量	粘板岩	KAKU	
4	打製石斧		5.2	61	石・重量	粘板岩	KAKU	
5	打製石斧		5.8	1.7	石・重量	粘板岩	NUMA	
6	打製石斧	13.8	7.5	103	石・重量	泥 岩		ホルンフェルス化
7	石包丁	7.6	9.3	241	石・重量	粘板岩	SY05	
8	石包丁	7.6	7.3	171	石・重量	粘板岩	SD16	
9	砥石	8.0	7.3	49	石・重量	砂 岩	NUMA	
10	砥石	4.5	2.0	217	石・重量	滑 石	SD01	
11	たたき石	18.0	5.1	561	石・重量	安山岩	TANBO	被熱、スス

No	名 称	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	出土地点	その 他
1	凹基三角錐	1.9	1.4	0.62	石・重量	黒曜石	SD01	
2	凹基三角錐	2.5	1.9	0.67	石・重量	黒曜石	SB03	
3	凹基三角錐	2.3	1.3	0.46	石・重量	黒曜石		
4	凹基三角錐		1.3	0.43	石・重量	黒曜石		
5	凹基三角錐	1.9	1.3	0.54	石・重量	黒曜石	SB07	



第5図 SD01出土遺物実測図

第5章 考 察

第1節 塩部遺跡の歴史的景観

1. 弥生時代から古墳時代

我々は、発掘当初はSD07、08、09、SB01は弥生時代の遺構と遺物であり、SY01をはじめとする方形周溝墓群は古墳時代初頭のものであると考えて、発掘調査および整理作業を実施してきたが、県内外の類例を調べる中で、塩部遺跡の方形周溝墓群は両者の微妙な位置にあることが判明してきた。そこで弥生から古墳時代に至る流れを概略的に追いながら、塩部遺跡の位置を明らかにしたいと思う。

山梨県における弥生土器の編年研究は沖積平地部の開発の遅れも起因してか資料が少なくななか進展しなかったが、昭和53年（1978）敷島町金の尾遺跡の発掘調査以来徐々にではあるが、資料の充足が図られ、漸く大方の見通しができるようになってきたと言える。

少ない資料の段階でも、前駆的な研究があったことも事実ではあるが、平成4年（1996）中山誠二氏が山梨県における弥生土器の総体的な編年案を提示した。これによって県内の弥生土器を全国的な組上に挙げて検討する基盤ができると言えよう。

塩部遺跡SD07、08、09は中山96編年によれば6期に比定される。氏は5、6期に2つの様相が見受けられるとした。まず5期A相は中部高地系土器が主体となる地域相であり、5期B相は東海系土器を主体とする地域相である。6期になるとA相B相の分類基準も変化していく。6期A相は東部東海地方から西相模地域に広がる結節縄文系土器を主体として、盆地北部以北の地域では中部高地型櫛描波状文を伴う。B相はS字口縁台付壺を特徴とする東海地方西部の尾張地域の土器群を主体としてわずかに北陸系の土器を含むものである。

この6期B相の系統が塩部遺跡ではSY03、04、06、11に見られる。これに反してS字口縁台付壺を含まないSY01、02、10などがあるが、SY01の中には疑問のある資料（第36図9）もある。

塩部遺跡で問題となるのは、SB01とSY02の関係である。SB01の出土土器は中山氏の言う6期に位置するものではないかと思われる。SY02は古墳時代でも古い位置にあるので、両者の関係は時間差がほとんど認められない。またSY03とSD07の関係も微妙な位置にある。遺跡全体の形状から言えば、SY03を避けるようにSD07が南流するが、遺物からはSY07の埋没後、SY03が構築されたと思われる。なお、SY03には6世紀代の遺物もあるが、SY04の堆積土の觀察からは、周溝が埋没したのは平安時代の洪水と思われる。SD07の出土遺物の中には結節縄文を有する壺（第47図7）と櫛描波状文を持つ壺（第50図6）があり、中山氏の言う6期のA相が見られる地域であり、SY03では6期B相を示すS字口縁台付壺の中でもっとも古い部分に属するもの（第38図7）の出土が見られるが、他の高杯、装飾器台などはやや新しい時期のものである。

またSY03の形状は南側の周溝部分が張り出しており、通常の方形周溝墓とはやや形状を異なる。前方後方形方形周溝墓を意識して構築されたのではないかと、南側の墳丘部分を丹念に調査したが、墳丘部に意識的な変化は認められなかった。中山氏は三珠町上野遺跡の昭和63年調査の1号方形周溝墓の墳丘にやや張り出した部分があるのをもって、県内における前方後方形方形周溝墓の萌芽的なものとしたが、この塩部遺跡SY03はそうした意識のもとに周溝部を張り出したのではなかろうか。出土遺物も豊富で高杯、装飾器台、丸底壺をはじめ、勾玉、馬齒などの出土がある。県内では該期の馬齒の出土は中道町東山遺跡の第2号方形周溝墓に例があり、馬の出土例としては全国的に見ても古い部分に属する。出土状況から送葬儀礼に伴うものと考えられる。

2. 奈良・平安時代

KAWA2（川）はNUMA（沼）と連続しており、流路がある部分（砂の堆積が主である）を川、水がよどんでいたと思われる部分（砂や泥の互層があり、木製品や自然遺体が豊富）を沼とした。NUMA（沼）からは、奈良時代から平安時代（9から10世紀）にかけての土器や木製品の出土があり、沼はこの時期に、下流の水田の灌漑用溜め池として、あるいは斎場から雨乞いなどの祭祀場として利用されていたと思われる。SD16

はこの沼より取水し、下流に灌漑する取り入れ口をもつ溝で、堆積土から弥生時代まで遡る可能性がある。弥生時代の水田經營が灌漑用水路を掘削、取水、灌漑といった完成されたシステムによって成り立っていたことを示す構造である。なお、SD07、08は扇状地の扇端の涌水から取水したと思われる。

SD16と重複するSD14は沼を回って取水していたようであり、SD16とはまったく違った砂層の堆積が認められ中世の出土遺物もあることから、中世には埋没したものと思われる。

川岸の一部では、小規模な畦が見られ、水田が営まれていたと思われる。ただこの水田址（TANBO）は砂層の中に砂で畦を構築したもので、その上の堆積土も砂層であり、検出が困難であった。また、SY06東側の川の部分では焼けた人頭大の石と平安時代の壺や骨の出土があり、何らかの祭祀および送葬が行われた可能性が認められた。なお、木製人形は川の砂層の中に、2体とも近接して検出された。よって人形祭祀のあと川に投げ込まれたものと推定されるが、検出地点で祭祀が行われた様相は検出できなかった。

方形周溝墓群の周溝はおそらく水田などとともに平安時代に埋没したと思われることは再三述べた。この時期方形周溝墓群は盛土の部分は残存しており、平安時代（8～9世紀）の開拓者たちは、新たな土地として沼の縁の扇状地上を選定したのである。この地盤はやや高台にあることで強固であったらしく、川の侵食も少なく、安定していたらしい。住居はSB02以外すべて重複しており、覆土が数cmと浅かったため、出土遺物も少なく、個々の住居址の年代決定は困難で、一時期に何軒の住居が営まれていたかは不明であるが、立地条件から最大3軒であろう。また、この集落が水田を經營していたと考えられるが、それは、対岸の水田（TANBO）より、SD16が灌漑する下流域の水田であったろう。

なお、こうした重複住居址を一集落において時期の近接したものが多い点や集落内における選地上の規制を想定して、血縁的な居住者を想定できる。

参考文献

- 中山誠二 1987 「弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器様相」『山梨考古学論集』Ⅱ 山梨県考古学協会
中山誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小林健二 1993 「外来系から在地系へ」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
山梨県考古学協会編 1992 『甲斐型土器』

第2節 塩部遺跡の律令期祭祀具

1. 律令期の祭祀

遣隋使、遣唐使によって大陸から律令国家制度に関する知識がもたらされ、我が国でも7世紀後半～8世紀前半にかけて、律令による「法式備定」の国家体制がつくられていった。このように大陸の大きな影響を受けて成立した律令国家は、祭祀においても大陸の文化を多分に取り入れたと考えられ、中国的な祭祀や道教にその起源を発する¹⁰陰陽道の思想が息づいている。陰陽道は7世紀の推古朝において百濟から伝わったことによって知られるようになった中国古来の陰陽五行説¹¹にその端を発し、9世紀以降律令国家の祭祀において大きな位置を占めるようになった¹²。

具体的な律令期祭祀の内容は10世紀にまとめられた『延喜式』に詳しいが、の中でも重要なものとされているのが大祓である。大祓は毎年6月と12月の晦日に年中行事として行われた罪や穢を祓う祭祀であるが、天変地異や妖異に際しても臨時に行われた。この大祓を始めとして律令期の祭祀では罪穢を祓や禊という行為によって解除する祭りが多く行われた。このような祓や禊の原型は『日本書紀』に伊邪那岐命が黄泉の國から生還した直後の記述として「ここをもちて伊邪那岐大神詔りたまひしく、「吾はいなしこめしこめき穢き國に到りてありけり。故、吾は御身の禊為む。」とのりたまひて、竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原に到りまして、禊ぎ祓ひたまひき。」という記載が見られる¹³。また個人レベルの祈祷としては人形木製品や髑髏を用いた呪いもみられ¹⁴、ここには古代中国に見られる厭魅、巫蠱の影響が見られる。

このように律令期の祭祀は日本古来の神祇祭祀と中国的な陰陽道祭祀がミックスされて成立したものである

といえよう。

2. ^{りじがく}人形木製品

塙部遺跡出土の祭祀用具の中で、律令期の祭祀形態を最もよく残しているのは2体の人形木製品である。2体の人形は調査時にKAWA2と名付けられた相川の旧河道の砂層から検出され、頭部を向かい合わせるような位置で出土した。いずれも正面全身を象り、頭頂部はやや丸みを帯びた平頭につくる。頸部は頭部の下部5分の3ほどの部分から徐々に内側へ切れ込むような形で、それに連なりほぼ直交して若干下がり気味につくらされている。遺物No77の個体はやや丸みを帯びた作りであり、遺物No78は直線的に切り込みをつくる。なおNo78の左肩部は円周上に炭化・欠損しており、形状は不明である。手の切り込みはほぼ水平に胸に近い部分でつくり、そこから下半身へ向けて太くして腰部を表現している。脚部は写実的に足先に向けて細くつくり、特徴的な作り方として、明確に足首を表現しているが、No77の個体は右足首から先を欠損している。爪先はいずれも鋭く三角形に切り込み、明確に表現されている。赤外線ビデオで確認したところ、No78の頭部左半分に髪・目・鼻・口等が墨書きにより表現されていた。No77の裏面には鋭い刃物による切り傷が無数観察される。またNo78にも若干見られる。

人形木製品の用途として考えられているのは、祓や病氣平癒に用いる場合と呪いに用いる場合が考えられるが、呪いに用いられたと考えられる事例は全国的に見ても、平城宮において胸や目の部分に釘を打ち込んだものが2例⁽⁶⁾、人形木製品に考えられるかどうかは即断できないが、島根県タテヨウ遺跡で出土した墨書きの女性全身像の胸の部分に木釘を打ったもの（報告者は呪詛札としている）⁽⁷⁾が知られているにすぎず、いずれも体の急所に釘が打たれるという特徴によって呪詛目的と考えられている。従って本遺跡出土の人形木製品は、いずれも祓いを目的としたものと考えられよう。祓いに用いる場合、「一撫で一吹き」といわれる様に人形木製品を撫で、息を吹きかけることによって、自らの罪や穢、災厄を人形に託して水に流すやり方が知られている⁽⁸⁾。2点が若干の大きさの差はあるが、きわめて相似的な形態であることから見て同工の作によるものか、少なくとも同種の祭祀に用いられたと見てよいであろう。

本遺跡出土の人形木製品で注目されるのはNo78にみられる肩部の炭化欠損痕である。この炭化痕は、人形の肩部だけが火に炙られたように円周状に炭化していることから、故意に肩部を焼いたとも考えられる。あるいは肩に何らかの病を持った人物の病氣平癒のためのものであったとも考えられる。

次に本遺跡出土の人形木製品の使用年代であるが、律令期人形木製品の編年については奈良国立文化財研究所の金子裕之氏に大きな業績⁽⁹⁾がある。金子氏はその論文の中で律令期の木製人形をA～Dの四期（A・Bはそれぞれ1・2に細分）に分類し、それぞれの特徴について述べておられるが、それによるとそれぞれの部位が、

A型…肩部：頭部側面を上下から同角度で切り欠いて「撫で肩」につくる。

手部：側面下方から浅く切り込みを入れる。

足部：下端部を三角形に切り欠くか、平行に切り込み腰の位置で折る。

腰部：A1型は表現せず、A2型は腰の部位を左右に切り欠く。

B型…肩部：頸の部分は水平に切り込み、肩の下方から大きく切り欠く。

手部：側面下方から浅く切り込みを入れる。

足部：下端部を三角形に切り欠くか、平行に切り込み腰の位置で折る。

腰部：B1型は表現せず、B2型は腰の部位を左右に切り欠く。

C型…肩部：頸の上方から大きく切り欠き、肩の線を水平に切り欠いて「怒り肩」につくる。

手部：側面下方から浅く切り込みを入れる。

足部：下端部を三角形に切り欠くか、平行に切り込み腰の位置で折る。

腰部：表現する例はない。

D型…肩部：頸の上方から大きく切り欠き、肩の線を水平に切り欠いて「怒り肩」につくる。

手部：手の切り込みを胸に近い部分で切り欠き、後世の立ち籠に近い形にする

足部：下端部を三角形に切り欠く。

という特徴を有し、A 1（7世紀後半～）→C（8世紀末～）→D（9世紀～）と変遷するとされ、B 2型は静岡県の伊場遺跡のみに分布が限られていることから、これを地域差としてとらえている。

後述するように、山梨県内における律令期の人形木製品は出土例が非常に少なく、地域差という観点から出土した人形木製品を類型化するのは非常に困難であるが、本遺跡出土の人形の特徴を金子分類に当てはめてみると、肩部はやや下がり気味ながらもほぼ水平につくられる「怒り肩」であり、手部は胸付近よりやや下で水平に切り込む、足部は爪先をはっきりと三角形につくっていることからD型に分類される。出土遺構である相川の旧河道と同時期と思われる平安時代住居址の年代と考えあわせても金子氏のいう9世紀代という年代が妥当なものであろう。

また、大平茂氏も近年の研究において、編年を行う基準として有効なのは首部から肩部の切り欠きの変化、手の表現の有無、腰部の切り込みの有無の3点であるとした。また、従来の研究は首部から肩部の切り欠きの変化を重視しすぎるとして、手の表現を重視してI～IV類（手を切り込みで表現するI類、手を切り欠きで表現するIII類、I・III類どちらの手の表現も持つII類、手を表現しないIV類）に分類し、首から肩への切り欠き形態の変化によってa～dの4種（撫で肩のa種、下がり肩のb種、怒り肩のc種、首なしのd種）に区分する分類を示した¹⁰。さらに大平氏は続く章¹¹で9世紀中葉頃に手を持たない、あるいは持っても切り欠きで表現する型式（大平分類のIII・IV類）のものが出現するとし、この類型の盛行期は10世紀代であり以後衰退するが、一部のものは中世へと続いていると指摘されている。またIII・IV類のなかでも「撫で肩」のものより「怒り肩」のものの方がより新しくなるとしており、本遺跡出土のような人形木製品（大平分類ではIII類c型）の時期を9世紀中葉以降に位置づけている。大平氏が例示された各地から出土した人形木製品の内、本遺跡出土の人形木製品との形式上の類似性が認められる平城京左京一条三坊大路東側溝出土人形¹²や頭頂部の形状が若干異なるが和歌山県野田地区遺跡溝（SD 7）出土人形¹³がいずれも9世紀代後半に位置づけられていることからも塙部遺跡出土の人形木製品の年代は9世紀後半以降と位置づけるのが妥当と思われる。

山梨県内においては、先に述べたように人形木製品自体の出土例は極めて少ないため、類型化が懸案であることを考慮し、現在までの山梨県内における人形木製品の出土例を列挙するにとどめ、今後の事例の増加と研究を待ちたい。

a. 甲西町 大師東丹保遺跡 II・III区¹⁴

中世の確認面（第1面）からII区で2点、III区で1点の側面全身人形が出土している。同遺跡からは斎串、桃核、獸骨など水辺の祭祀を伺わせる遺物も多数出土している。共伴する土器類は13世紀中葉～後半を中心としたもので、遺跡の第1面の年代もこの時期と考えられる。

b. 萩崎市 宮ノ前遺跡¹⁵

2号溝状遺構とよばれる8～9世紀代の遺構から1点出土している。長さ153mm、幅29mm、厚さ10mm。同遺構から斎串、獸骨、桃、人面墨書き器片など祭祀を伺わせる遺物も出土している。なお、報告者は観察表の文中で人形かどうか定かではないとしている。

c. 甲府市 朝氣遺跡¹⁶

第5次調査の際に溝状遺構から正面全身人形が1点出土している。長さ22cm、幅4cm。この溝状遺構からは古墳時代後期の鬼高式土器が共伴しており、人形木製品もこの時代のものと考えられる。

d. 若草町 二本柳遺跡¹⁷

4区の下層水田より側面全身人形が1点出土している。長さ187mm、幅11mm、厚さ12mm。この遺構からは10~13世紀の遺物が共存しているが、水田面の直上より出土していることから、最も新しい時代である13世紀代のものと考えられる。また同一面から鎌形木製品1点も出土している。

なおこれ以外にも律令期の人形模造品としては一宮町釈迦堂遺跡より奈良時代の金属製人形8例が出土している²⁸。

3. その他の祭祀関連遺物

人形木製品以外の律令祭祀期遺物として斎串が36点出土している。斎串の用例や性格については黒崎直氏の研究²⁹に詳しいが、黒崎氏は万葉集に見える「斎串」の例を引きながら、聖域を画するものか、あるいは神への供物を表示する役割を持ち、本来的には神の依るという「神聖な木」としての役割を持つと説いている³⁰。

斎串は祓いなどの祭祀に際して地面に刺し、結界を構成するという用法が指摘されており³¹、近年の発掘調査でも山形県俵田遺跡の第2次調査に際してSM60祭祀遺構より、人形、刀形などと直接地面に差し立てられ、原位置をとどめた姿で検出されたと考えられている例が知られている³²。

斎串の形態による分類編年は黒崎氏³³や金子裕之氏³⁴によって多大な成果があげられており、また近年奈良国立文化財研究所においても分類編年が示されている³⁵が、本遺跡出土の斎串の場合、斎串の最大の特徴とされている「削りかけ」が見られない。したがって本遺跡出土の36点は「斎串」状木製品とするのが妥当であるとも考えられる。

本遺跡出土の斎串の特徴としては、そのほとんどが三角柱状もしくは角材状の形態を持ち、下部が欠損している8例を除くと36例中24例という高い割合で、先端部（突き刺すために細くつくる端）が炭化している。これは自然炭化とは考えにくく、「聖なる木」を火で焼き清めたという可能性も考えられる³⁶。

本遺跡での斎串の出土地点をグリッド別に見てみると、人形木製品2体が出土したN-23グリッドに近接するM-22およびO-23グリッドから合計9点が出土したのを始め、N-22~T-25グリッドにかけてのKAWA2北東部分に23点が集中している。この部分からは後述するように桃の種子（以下桃核）も集中して出土しており、興味深い事例となっているといえよう。なお、斎串と桃核が共存して出土した例としては、時代は下るが甲西町の大師東丹保遺跡II区の22号溝で100点を超える桃の種子が出土した地点において地面に突き刺さったままの状態の斎串が出土した例があり³⁷、本遺跡における律令期祭祀の形態と後世への影響を考える上で興味深い事例といえる。

このほかR-25グリッドからは祭祀遺物かどうか判断できないが、鎌形木製品もしくは刀子形木製品とも思われる遺物が出土している。このような武器の形代は、武器としての機能によって祓の場の罪悪・悪気を「打ち斷ち立った」³⁸とされており、付近には斎串、桃核も比較的集中して出土している。

遺物の形態は刃部に当たる部分はほぼ三角形につくり、上端から約5cmより下の部分は最大長のほぼ半分ほどの太さで柄のようにつくられているが、柄に当たる部分の断面は右側が薄くつくられており、箇状の工具である可能性も否定できない。

最後に人工的な製品ではないが、祭祀関連の遺物として着目されるものとして桃核があげられる。桃は古代中国では仙果とされ、『西遊記』でも孫悟空が蟠桃園の桃を食べ、太上老君（道教の神の一人）の仙丹を噴らい八卦炉で焼されたために不老不死で鋼のような体を持つに到ったとされているのは周知のことである³⁹。

我が国の神話でも『古事記』の上巻に、伊邪那岐命が黄泉の国に伊邪那美命を迎えて行き、禁忌を破って黄泉醜女や黄泉軍に追われるくだりで「ここに御佩せる十拳鏡を抜きて、後手に振きつつ逃げ来るを、なほ追ひて、黄泉比良坂の坂本に到りし時、その坂本にある桃子三箇を取りて、待ち擊てば、悉に逃げ返りき。」という記述が見られ⁴⁰、悪鬼・邪氣を祓う「聖なる果実」としての桃が描かれている。さらに続くくだりでは「ここに伊邪那岐命、その桃子に告りたまひしく、「汝、吾を助けしが如く、葦原の中國にあらゆる現しき 人草の、

苦しき瀬に落ちて患ひ惚む時、助くべし。」と告りて、名を賜ひて意富加牟豆美命と號ひき。」⁽⁴⁾として、伊邪那岐命が「桃子」を人々が困ったときに助けるべき神としたという記述が見られる。

本遺跡での桃核の出土数は面積に比して少ない（完個体が264点、半個体が194点、ほか細片155）が、比較的集中して出土しているのは相川の旧河川であるKAWA 2の北西部Q-22～23グリッド付近である。既述のようにこのグリッドに近接するグリッドでは斎串、桃核が比較的集中していることから、この河川の付近で何らかの祭祀が行われていたと考えられる。また、Q-22～23グリッドほどではないが、平安時代の水利遺構と考えられる沼の南側岸に斎串、桃核が比較的多く出土しており、旧河川の祭祀に用いられたものが増水によって流れ着いたと考えられる。

4.まとめ

以上見てきたように、塩部遺跡出土の律令期木製祭祀用具はそのほとんどが相川の旧河川と沼の南側縁辺部から比較的まとまって出土している。また本考察では触れられなかったがKAWA 2地区からは獸と思われる骨片も数十点出土しており、この旧河川の流域で何らかの祭祀が行われたことはほぼ間違いないといえる。出土した人形は出土点数が単数ではなく同形態のものが近接して2点出土していることから、祓のためのものであり⁽⁵⁾、罪や穢を文字通り「水に流した」ものであると考えられる。また、斎串、桃核を含めすべての遺物が水に流されたような出土状況であったことから、祭祀を終えた後、一括投棄された可能性が大きい⁽⁶⁾。

塩部遺跡は今次調査で発掘した部分だけでなく、その南北に大きく広がっており、将来的に今回調査した範囲より北（旧河川の上流）に本格的な祭祀遺構が眠っていることも考えられる。

律令期の祭祀遺跡はこれまで中央官制の遺構（宮、城など）や国府・郡家の比定地で多く発見されているが、本遺跡が所在する山梨郡は東部の一宮町、御坂町、春日居町付近に国府があったと思われ、遺跡周辺にも郡家を推定させるような遺跡が見られないことから、本遺跡出土の人形木製品は律令官制組織による祭祀ではなく、むしろ律令的な祭祀が平安中期から末期には個人レベルにも漫透していたことの一例になると考えられよう⁽⁷⁾。

註

- (1) 水野正好 「招福・除災－その考古学－」 『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』 国立歴史民俗博物館1985年
金子裕之編 『律令期祭祀遺物集成』 律令祭祀研究会 1988年
- (2) 藤沢一夫 「古代の祝詞とその遺物」 『帝塚山考古学』 別刊号 1968年
- (3) 泉 武 「人形祭祀の基礎的研究」 『考古學論叢』 横原考古学研究所紀要 第8冊 1982年
など特に人形木製品を中心として中国に起源を求める研究が多数見られる。
- (4) 陰陽説とはすべての事象を動的な「陽」と静的な「陰」に分けて説明する考え方である。また五行説とは万物は必ず木・火・土・金・水の5つのいずれかの性質を持つという思想である。五行説には木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木と考える五行相勝説（五行相剋説）と木生火、火生土、土生金、金生水、水生木と考える五行相生説がある。
- (5) 岡田莊司 「陰陽道祭祀の成立と展開」 『陰陽道叢書』 1古代 1991年
- (6) 倉野憲司校注 『古事記』（岩波文庫） 岩波書店 1963年
- (7) 『続日本紀』 光仁天皇寶亀3年7月25日條に皇太子他戸親王が母である井上内親王が「厭懃大逆之事」を一度ならず行ったことが発覚したことにより連座して庶人に落とされたという記載が見られる。また『続日本紀』称德天皇神護景雲3年5月29日條に称徳帝を睨い殺そうとして、天皇の頭髪を盗み集め、佐保川から拾ってきた髑髏に入れて宮中に隠すという睨いの形態が見られる。後者の事例について藤沢一夫氏は後の仏教祝詞との関連を示唆しておられる（藤沢「古代の祝詞とその遺物」『帝塚山考古学』 別刊号 1968年）。このことは平安初期に現世利益の仏教である密教が流行したこととも関連があろう。また「きたなき河」から髑髏を拾ってきたという記述は、後述する祭祀終了後に罪や穢を託した人形を川に流すという観点からも興味深い記述である。
- (8) 奈良国立文化財研究所 史料第27冊 『木器集成図録 近畿古代篇』 1975年
- (9) 『タテショウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 島根県教育委員会 1990年
- (10) このような人形を水に流すという事例は、島根県用瀬町の流し椎など現在も各地で民俗行事として行われている。なお各地の人形を用いる民俗事例と祓いの関係については、中山正典 「祓いと人形－考古資料と民俗資料との接点－」 『大谷川IV（遺物・考察編）本文編』

- (9) 金子裕之 「古代の木製模造品」 奈良国立文化財研究所学報 第38冊「研究論集VI」 1980年
- (10) 大平 茂 「木製人形年代考（上）」「古文化談叢」第30集(中) 九州古文化研究会 1993年
- (11) 大平 茂 「木製人形年代考（下）」「古文化談叢」第35集 九州古文化研究会 1995年
- (12) 大平 注(11)所引文献 第17図 26
- (13) 大平 注(11)所引文献 第17図 28
- (14) 山梨県教育委員会 「大師東丹保遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第86集 1994年 および 山梨県教育委員会 「大師東丹保遺跡2」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第102集 1995年
- (15) 宮ノ前遺跡発掘調査団 「宮ノ前遺跡」 茂崎市遺跡調査会 1992年
- (16) 1985年に市道新設工事に伴い、甲府市教育委員会により発掘調査された。未報告の遺跡であるが、甲府市教育委員会信藤祐仁氏に多大なるご教示をいただいた。
- (17) 1992年に一般国道52号（甲西道路）改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴い、当センターが発掘調査を行った。未報告の遺跡であるが、当センターの中山誠二氏に多大なるご教示をいただいた。
- (18) 山梨県教育委員会 「駿遊堂I」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集 1986年
- (19) 黒崎直 「駿串考」「古代研究」10 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室 1976年
- (20) 黒崎 注(19)所引文献 5
- (21) 金子裕之編 「律令期祭祀遺物集成」 律令祭祀研究会 1988年
- (22) 山形県教育委員会 「後田遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書 第77集 1984年
- (23) 黒崎 注(19)所引文献 2
- (24) 金子裕之 「古代の木製模造品」「研究論集VI」 奈良国立文化財研究所学報 第38冊 1980年
- (25) 注(6)所引文献同じ
- (26) 民俗事例として各地の神社に残る紙製の人形を神社で焼く行為とも関連性が考えられる。
- (27) 山梨県教育委員会 「大師東丹保遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第86集 1994年
- (28) 金子裕之 「平城京と祭場」「國立歴史民俗博物館研究報告」第7集 国立歴史民俗博物館 1985年
- (29) 「西遊記」第五回に蟠桃園の土地神の言葉として「手前の千二百株は、花も実も小さく、三千年に一度熟しますが、これを食べると仙人となって、からだはすこやかに身は軽くなります。中の千二百株は、花は八重に咲いて実は甘く、六千年に一度みのりますが、これを食べますと、かすみに乗って飛昇し、不老長生することができます。奥の千二百株は、紫色の斑点があつて核が小さく、九千年に一度熟して、人がこれを食べますと、天地日月と寿を同じくいたします。」というくだりが見られる。また、第七回には太上老君がとらえられた孫悟空が殺せないことについて「かの猿め、蟠桃を食らい、御酒を飲み、そのうえ仙丹をも盜み出しました。悟空が五つのつぼに詰めておきました仙丹は、すでに燃りあがったものも半燃りのものもありましたが、すべてかやつの腹の中に入ってしまったのです。そこへ三昧火が作用し、ひとつに練り上げられましたので、金鉄のからだとなってしまった」のだとしている。なお太上老君とは道教でいう老子の尊称であり、「西遊記」に道教色が色濃く見える証左といえよう。
- (30) 田村辰夫・鳥居久精訳 「西遊記（上）」 第五回および第七回 中国古典文学大系第31巻 平凡社 1971年
- (31) 舟倉憲司校注 「古事記」（岩波文庫） 岩波書店 1963年
- 注(30)所引文献と同じ
- (32) 金子裕之氏は平城宮壬生門跡の発掘区から的人形の検討を元に「報において複数の人形を使う」とし、「大きさを共にする組み合わせや、顔の表現のあるものの組み合わせなどがあり、こうした形をいくつか組み合わせた。」としている。さらに史料検討も加えた結論として「8世紀の中葉以降、裁人形の用法は大きさの異なる人形を組み合わせる場合と、同じ大きさの人形を組み合わせる場合とに分化していった可能性がある。」との見方を示している。
金子 注(28)所引文献
- (33) 本遺跡のように祭祀用具と考えられる木製品の出土例は圧倒的に河内跡や溝からのものが多い。これは水泥に浸かっていない場合、木製品の遺存状態が極めて悪いか全く残らないといった理由もあるが、黒崎直氏が述べておられるように「臨解除而去」として、祭礼の終わりにあたり、そこに投入された結果と考えるべきであろう。
黒崎直 注(19)所引文献
- (34) 金子裕之氏は木製模造品が官民双方の祭祀で用いられた理由として、材料入手、加工の容易さと白木の清浄さ、一度限りの使用という祭祀具の持つ性質に着目しておられる。
金子 「木製模造品」「神道考古学講座第3巻 原始神道期II」 雄山閣 1981年

第3節 塩部遺跡SY03（3号方形周溝墓）出土のウマ

西本 豊弘

SY03（3号方形周溝墓）から出土したウマは、4世紀の第3四半期であり、これまで日本で知られている家畜のウマでは最古である。ウマの内容は、左右の上・下臼歯計24点と切歯3点である。切歯3点のうち採集されたのは1点だけであり、他の2点は破損した。これらの歯は、遺跡出土資料で通常見られるように、象牙質部分は分解しエナメル質部分のみ残っていた。上下臼歯ともに左右と歯列が乱れずに一括しているので、歯だけでなく上・下顎骨を伴っていたことは確実である。また、上顎臼歯は摩耗面を下に、下顎臼歯は摩耗面を上にして発見されたので、上顎臼歯と下顎臼歯ともに噛み合った正常の位置でおかれていたと推定される。ただし、全身が埋葬されたが骨がすべて消滅し、歯のエナメル質だけが辛うじて残った可能性が高い。その場合は、上顎骨と下顎骨が自然の営力で移動したのであろう。

SY04（4号方形周溝墓）出土の歯の断片は、ウマのものと思われる。

さて、SY03のウマの形質については、ウマの歯の大きさを表に示した。また、比較のために、いくつかの遺跡のウマの歯の大きさも示した。この表でも明らかなように、塩部遺跡のウマは、かなり大きいと言える。歯のみで体高は復元できないが、これまでに歯と体高が知られているウマから推測すると、約125cm程度であろう。年齢は、歯がすべて萌出しているので成獣であるが、歯根が長く、あまり摩耗が進んでいないので老獣ではない。働き盛りの大きな「良馬」が犠牲として殺された可能性が高い。雌雄については、犬歯の有無が確認されないので、不明とせざるを得ない。

このウマの遺体は、共伴した土器から古墳時代の4世紀の第3四半期とされており、日本でこれまで確認されたウマとしては最も古い例である。ウマは古墳時代のはじめから日本に持ち込まれた可能性が強く、おそらく九州で最も早く飼育されたであろう。しかし、古墳時代のかなり早い時期に山梨に持ち込まれ、しかも大きなウマであったことは注目される。

表1 塩部遺跡とその他の遺跡のウマの歯の磨合面の最大長（単位mm）

歯種	塩部遺跡SY03 (4世紀第3四半期)	下總町不光寺遺跡 (平安?)		八王子市館町遺跡 (中世)		千葉市生実城 (16c末)
		No 9	No 12	No 1	No 3	
上顎左第2前臼歯	—	37.2	37.4	37.0	34.2	35.6
上顎左第3前臼歯	28.6	26.2	37.4	29.7	25.2	29.9
上顎左第4前臼歯	28.0	24.4	25.9	26.2	25.2	27.6
上顎左第1後臼歯	23.4	21.6	22.4	22.7	23.4	25.5
上顎左第2後臼歯	23.3	22.3	23.5	23.4	22.5	26.6
上顎左第3後臼歯	24.3	27.2	26.0	—	23.1	24.9
		No 8	No 13	No 1	No 3	No 9
下顎左第2前臼歯	—	31.1	30.7	—	28.4	30.0
下顎左第3前臼歯	29.0	27.1	28.4	(27.2)	27.0	28.5
下顎左第4前臼歯	28.5	26.4	25.8	(27.5)	25.2	26.7
下顎左第1後臼歯	25.9	22.4	23.5	24.2	23.4	25.6
下顎左第2後臼歯	—	23.7	25.1	(25.4)	23.5	25.4
下顎左第3後臼歯	—	30.9	30.6	31.3	26.5	28.4

注 館町遺跡の下顎骨のNo 1の計測値で、()に入れたものは、右側の歯の計測値である。

千葉市生実城遺跡の資料は未報告。

第4節 塩部遺跡出土の焼夷弾からみた甲府空襲

1. 焼夷弾の出土

調査を開始して早々の表土剥ぎの段階に、赤錆びた鉄製の筒状のものが地中に垂直に突き刺さって多く出土した。出土する際に変形したものは、中からベンキなどの溶剤のような悪臭を放つドロドロの液体が流れ出すものもあった。数名の年配の調査参加者から、それぞれの体験談を含めて、甲府空襲で投下された焼夷弾であることを聞く。早速、甲府空襲を考古学的に実証するものとして、出土地点を記録することとする。

出土地点を記録したものが第7図である。KAWA2などに集中し、方形周溝墓や住居址がある微高地に少ない。微高地は地盤が比較的硬いために地中深く突き刺さらずに、その後に除去されたものが多かったためと考えられる。出土点数は焼夷弾38点、弾頭が3点である。

焼夷弾の出土地点を線で結んだ結果、北側の4本は北（方眼北）から西へ61度39分、南側の2本が50度34分の角度が得られた。この50~60度の角度が、焼夷弾投下時のB29爆撃機の飛行コースを示しているものと推定できる。

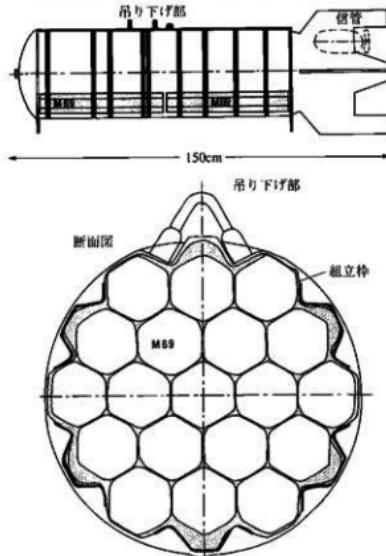
2. 焼夷弾

実測した焼夷弾は、地中深く埋没していたため保存状態がよく、表面に浮いた錆を取り除くと濃緑色の塗装がほぼ残っていた。第8図「M69焼夷弾」1・2は、六角形の筒状で一方のみ底が付いている。落下方向は底面を下にした状態であり、底面付近の側面に信管が取り付けられている。側面中央部には紫色の塗料で「帯」と「N P 6 9」などの記号が読み取れる。また底面には「A N - M69」の刻印と中央部に黒色の塗料による不明瞭な記号が認められる。また固化したものと別個体で、袋状の粗いガーゼの様な布（幅約10cm、長さ約50cm）が、底部と反対側に付いているものもあった。後述の麻製のリボンとされるものである。

低いドーム状の鉄塊は、「E46集束焼夷弾」の先端の部分であり、投下後に頭を下に向け落下姿勢を安定させるためのものである。「弾頭本体」は31kgにもなる鉄の鋳造品である。本体にボルトで留められていた周間に切り欠きのある「裏板」は、M69焼夷弾を束ねるための「組立枠」を固定させる部品である（平塚1995）。

この「E46集束焼夷弾」は「M69焼夷弾」が19発づつ2段で計38発を束ねたものである（第6図）。原（1995）によれば、B29爆撃機からは、「E46集束焼夷弾」が横向きに投下され、目標上空で尾部に付けられたプロペラ式の信管により破裂し、頭部、尾部、そして外板6枚の計8パーツに分解され、中のM69焼夷弾が一斉に散開する。M69焼夷弾の尾部には麻製のリボンが折り畳まれた形についており、これが落下的際の風圧で飛び出し、焼夷弾の姿勢を安定させ、落下速度も制御した。落下したM69焼夷弾は屋根などを突き破り床などに着地、頭部の信管が作動し、その2~3秒後に頭部が爆発、その勢いで中に詰められた油脂が燃えながら尾部から飛散し、壁などに付着して家屋を燃え尽くすという。

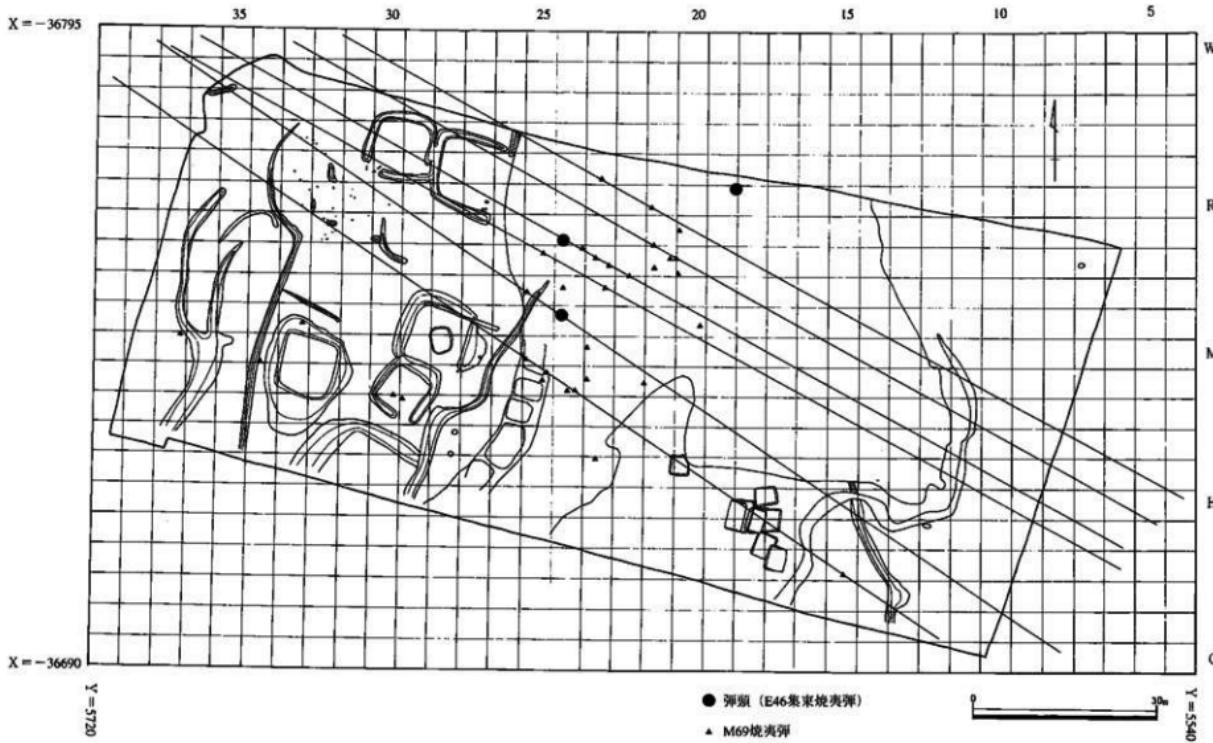
遺跡内から出土した集束焼夷弾の弾頭が3点あることから、少なくともこの範囲に38発×3の計114発が投下されたことが判る。さらに、これらの弾頭がいずれも旧

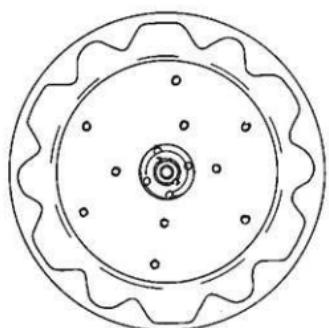


第6図 E46集束焼夷弾

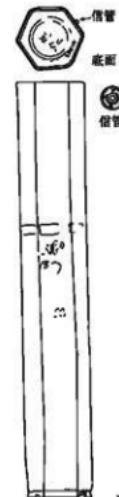
第7図 残弾跡分布図

-32-

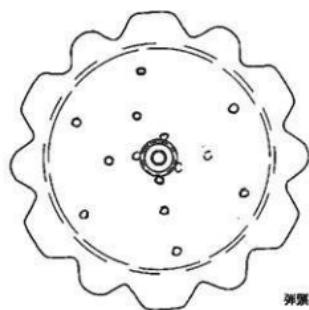




E46集束焼夷弾(弾頭)



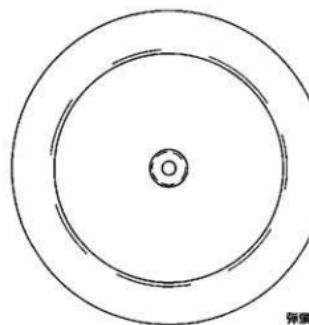
M69焼夷弾 1



弾頭底板



M69焼夷弾 2



弾頭本体



第8図 焼夷弾・弾頭実測図

河道部の地盤の軟弱な地点からの出土であり、これ以外の部分にも弾頭が投下されていたが、その後回収されている可能性がある。これらを加味して考えると、調査範囲内には5m×5mのグリッドに対して、数発が投下されたと推測される。おおまかに想像すると、1グリッドは約15畳の広さであり、普通の小さな家屋でも約3～5発の着弾と概算される。大変な密度と言えよう。

3. 日本側の記録

甲府空襲は、甲府防空本部の発表によれば、昭和20年7月6日午後11時23分警戒警報発令、午後11時54分空襲警報発令となっているが、これより早く空襲ははじまっていたと『甲府空襲の記録』には記されている。

先の記録に収録された複数の回想によれば、目標誘導機による市の北部愛宕山上空への照明弾の投下から空襲は始まり、先ず市北部塙原町方面、続いて愛宕山から愛宕町及び市東部より東南部にかけて攻撃が続けられたという。また、日本軍からは1機の戦闘機も、1発の高射砲の応戦もなかったという。最初に周辺部を囲むように攻撃し、後続機へ目標を与えてかつ市民の退路を遮断してから、市の中心部を攻撃するという総合爆撃が、全く無防備の甲府へ行われたことがうかがえる。

このため多くの人々が死傷し、多くの家屋が焼失している。『山梨県政70年誌』によれば、面積4,164,300平方メートル（全市の74%）、人口78,952人（全人口の63%）が罹災。戸数では、17,920戸（全市の68%）。死傷者は、死者826人、行方不明42人、重傷者345人、軽傷者899人、一般戦災者76,840人で計78,952人とされている（松浦1974）。また、『甲府空襲の記録』編さん委員会の調査（昭和49年7月）では、甲府空襲の犠牲者は1127名で、塙部遺跡に近い朝日地区でも40名の犠牲者が出ているとされている。

『甲府空襲の記録』には当時の発掘調査範囲付近の様子をうかがえる回想がある。「まずは安全なところへと塙部田園へ一目散に駆け出し、湯川に腰までつかりながら爆撃の終わるのを待つ。（中略）甲府工業校庭に突き刺っていた焼夷弾の空薬きょうは、正に足の踏み場もないとはこの事、よく自分に当たらなかつと首すじをなで、何よりも先ず弟妹を探す（後略）」（渡辺1974）。

空襲からほど30年後にまとめられた『甲府空襲の記録』には、非常に多くの体験者の回想が収録されている。この回想からは、想像を越えた空襲の様子をうかがい知ることができた。しかし、妻子や肉親を亡くされた方々の回想が極めて少ないことが印象に残った。30年後にしても語り得ないものが多くあることが偲ばれる。

4. 米軍側の記録

The United States Strategic Bombing Survey(Pacific War)

合衆国戦略爆撃調査報告（太平洋戦争）

1945年8月15日にトルーマン大統領により命令された調査で、日本に対するすべての航空攻撃とその効果を研究し、将来にわたる航空兵力の開発や国家防衛のあり方を策定するためのものである。この中には、「AIR OBJECTIVE FOLDER No.90-16 Kofu（航空目標フォルダ No.90-16の甲府）」、7／6の甲府空襲に関するTactical Mission Report（戦術作戦報告）などが含まれている。

1945年7月6日の甲府空襲は、第21爆撃司令部により、一連に遂行された次の5の作戦のひとつである。以下に、戦術作戦報告の一部を抜粋した。

Report of Attacks Against 4 Urban Areas and Precision Target, 6 July 1945

Mission	Target	Wing	Force Assigned
251	千葉市街	58th	4 Groups
252	明石市街	73rd	4 Groups
253	清水市街	313th	4 Groups
254	甲府市街	314th	4 Groups

Target Information Sheet (目標情報票)

甲府 要約

甲府は本州中部の盆地に位置する最大の都市である。耕地は狭く、製糸・紡績・織物などの綿産業の中心として発展している。県庁所在であり、市の庁舎や国の倉庫などが集中している。

甲府には番号を付けられた目標は存在しないが、中心部への効果的な焼夷弾攻撃は、県庁所在地であり本州内陸部の最大都市の破壊という精神的衝撃が期待できる。また、補充歩兵養成のための練兵場への損害、鉄道中央本線への妨害、深刻な住宅問題などを引き起こすことも期待される。

飛行コース

マリアナ基地（グアム・サイパン・テニアン島に所在）—硫黄島—御前崎—甲府上空—小田原—硫黄島—マリアナ基地

レーダーにて捕捉しやすい御前崎を目標に本土に接近し、つぎは富士山を目標に、甲府を捕らえることが指示されている。

航空・海上救助

飛行コースの各地点に、潜水艦10隻、船舶4隻、飛行艇10機を待機させ、その位置を図示している。

基地離陸 16:30~18:12 (日本時間)

甲府空襲 23:47~02:35 (日本時間)

13機の目標誘導機によるM47曳光焼夷弾の投下により、種火をつくり、後続に目標を与えた。次に後続の3群に分かれた125機の主力爆撃機によりM69焼夷弾が投下されている。

これは、攻撃対象の甲府市街が、非常に燃えやすいが、充分な防火帯が設けられると評価されていることに対するものとされている。

投下方法

最初の一部が目視照準、その他はレーダー照準

投下した焼夷弾

M47A2 231.9トン

M17A1 7.6トン

E46 731トン (M69の拡散を目標上空1500mに設定)

計 970.4トン

投下高度

3400~5200m

投下速度

330km/h

損害調査報告

- ・甲府市街の1.3平方マイル（市街の65%）を破壊
- ・住宅地区と商業地区の主要な部分に損害、市の南半はほとんど完全に破壊、北部は分散的な損害
- ・鉄道操車場は損害なし、ただし、操車場すぐ南の建物の50%を破壊

5. 甲府空襲のまとめ

日本側の記録により、予想外の大きな被害を受けたことがわかった。また、米軍側の記録により、とくに軍事的に重要な目標はなく、住宅地区や商業地区などからなる市街を焼き払うことが目的であったことがはっきり

りした。そして、飛行艇・潜水艦・船舶などを待機させ、搭乗員の救助態勢が完備していたこともはっきりした。東京都の例ではあるが、仲村（1994）によると、もし墜落した機があれば、戦後に墜落地点に調査に入り、生存者の有無や生存者への虐待の有無などを調査し、遺体を回収するなどのことが徹底的に実行されたことが判る。これら当初、機密扱いであったが、その後に公開されていたことも注目される。日本では、戦災による消失や敗戦の混乱によるとは言え、充分な記録は残されていない。甲府空襲の犠牲者の数にしても、30年後の調査によりかなりの追加をみているなどかなりの違いである。

最後に付け加えれば、甲府空襲に関わる一部の資料を見たに過ぎないが、日米の戦争に対する文化の違いを感じた。アメリカ側には、たった1日の甲府爆撃に関する100ページに及ぶ写真・図・文書が系統的に保存公開されている。また搭乗員への徹底的な救援体制など計画的に進められている。戦勝国であり、意義ある戦いとして国内でも支持されていたという点を考慮しても、事前の充分な調査と後方支援の充実など実に計画的に実行されている。アメリカは「普通」の業務として実行しているように感じられる。戦争中として無理をする要素はあるにしろ、基本的には彼らなりの論理において合法的に処理されていたように感じられる。戦争中の作戦についても、その妥当性がその国家・国民から問われる社会であったのではないだろうか。

引用文献

- 仲村明子（1994）『国立国会図書館蔵「GHQ調査部法律課による報告書」について』『足立区立郷土博物館紀要』第17号 P1-21
原 順監修（1995）「圧倒、焼死体をひたすら生み続けたM69焼夷弾の威力」『歴史群像』8月号 No.20 1995 P24-27
平塚征緒（1995）「焼夷弾とはどんな爆弾だったのか」草思社『米軍が記録した日本空襲』P78-79
松浦絶三（1974）「本土空襲のなかの甲府空襲」甲府市戦災誌編さん委員会『甲府空襲の記録』P20-29
渡辺 静（1974）「紅蓮の炎が、巨大な竜の舌のように」甲府市戦災誌編さん委員会『甲府空襲の記録』P59-62
Tactical Mission Report, MISSION NO.251-255, FLOWN 6 JULY 1945, Tactical Mission Reports of the 20th and 21st Bomber Commands, Records of the United States Strategic Bombing Survey, Compiled by Marilla B. Guptil and John Mendelsohn, National Archives and Records Service, General Service Administration Washington 1975, 国立図書館憲政資料室所蔵
AIR OBJECTIVE FOLDER No90-16 Kofu, No90-18 Shizuoka, No90-21 Hamamatsu JAPAN, Aerial Photographs of Japanese Targets 1944-45, Records of the United States Strategic Bombing Survey, Compiled by Marilla B. Guptil and John Mendelsohn, National Archives and Records Service, General Service Administration Washington 1975, 国立図書館憲政資料室所蔵

付編 塩部遺跡における古環境復元および木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塩部遺跡は甲府盆地北西部の相川により形成された扇状地扇端部西側に位置し、発掘調査区のはば中央で南北に流下する扇状地形成に關係したとみられる旧河道路（KAWA 2）が確認されている。河道東岸の微高地には奈良・平安時代の住居跡、西岸の微高地には弥生時代後期の堅穴住居跡や古墳時代初頭の方形周溝墓や奈良・平安時代に屬する可能性がある水田（TANBO）が検出されている。また、河道の攻撃斜面側である東岸には淀みのような水域（NUMA）が拡がっており、東側微高地に構築されている奈良・平安時代の溝と連っていることから、当時の水利施設の一部であった可能性が考えられている。

このように本遺跡では、弥生時代以降の人間の土地利用状況に関する情報が蓄積されつつあり、当時の河道域の水域環境や周辺植生など自然環境に関する情報を得ることが重要な課題と考えられた。そこで、今回の調査では、河道から淀みにかけての水域の環境および周辺植生の変遷、低地域における稻作の消長や様態に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・種実同定を実施する。また、平安時代の遺構から出土した、畜糞を中心とする木製品の樹種を明らかにし、用材選択に関する資料を得る。なお、本報告では紙面の都合で微化石分析の結果表を割愛しているが、各結果表は山梨県埋蔵文化財センターに保管されている。

I. 古環境復元

1. 層序

(1) 調査区の層序概要

調査地点は、上記の目的を考慮して調査区内に1地点～5地点の5ヶ所の地点を設定した（図1）。1地点は奈良・平安時代の水田面（TANBO）、2・3地点が旧河道（KAWA 2）、4・5地点が淀み（NUMA）の堆積断面が観察された地点である。これら河道を埋積する堆積物は、その切り合い関係から、大きく5つの地層に層序区分される（図2）。下位よりA・B・C・D・E層と便宜的に呼び、各層の概要を以下に述べる。

A層：本層は東側微高地の構成堆積物であり、5地点23層の下位の地層が相当する。シルト混じりの砂からなり、最下部に砂砾が認められる。西側微高地の堆積物との層位関係は今回の調査では確認できなかったことから不明である。

B層：調査区中央部を流下する河道堆積物であり、2地点の45層～37層が相当する。地形的および堆積構造から蛇行川の堆積物である可能性が強い。最上部は水田耕作の擾乱の影響を受けている。

C層：下記するD層の氾濫層に覆われるまでの河道域に堆積した堆積物であり、3地点の18・20層、4地点の11～6層と5地点の23～24層が相当する。河道の流路部は砂あるいは砂混じりシルトからなり、下部で斜行ラミナが発達する。淀みの部分の堆積物は、淀みの口でシルト混じりの砂、淀み奥部で砂混じりシルトからなる。なお、今回の調査では河道部と淀み部分の連続する堆積断面が観察できなかったため、両者の詳細な層位関係は確認できなかった。

D層：河道から淀みの部分の全域を覆う氾濫堆積物であり、2地点の36層、3地点の5b層、4地点の5層、5地点の③層が相当する。比較的淘汰の良い砂から成り、側方級化する。本層からは奈良・平安時代の遺物が出土する。

(2) 各調査地点の層相および試料

1) 1 地点

奈良・平安時代の水田面は5面確認されており、各水田区画のはば中央部の耕土に相当する部分から1ないし2点の試料を採取した（試料番号1～6）。分析は、試料番号2・3・4・6について花粉分析、全試料につ

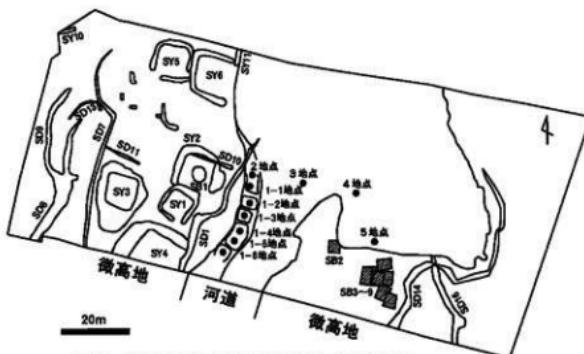


図1 遺構平面図および試料番号採取地点

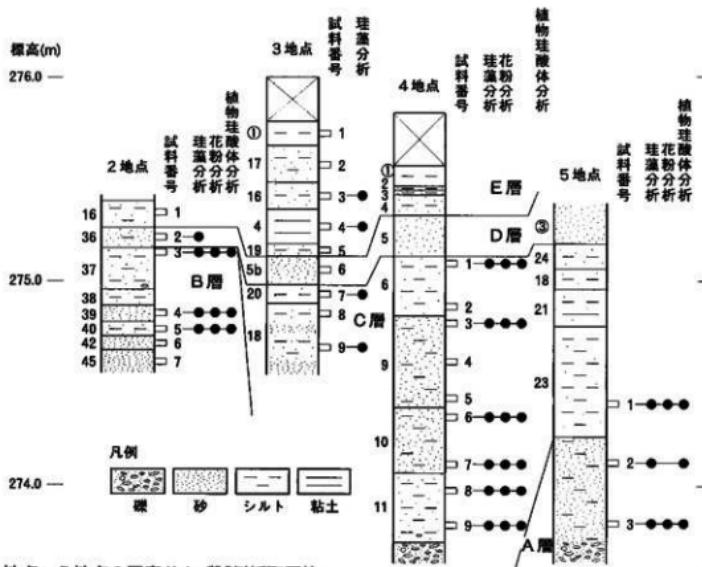


図2 2地点～5地点の層序および試料採取層位

いて植物珪酸体分析を実施する。

2) 2地点

堆積層は、45層～12層に区分されている。45層・42層が暗灰～青灰色砂、40層が暗褐色砂質シルト、39層がオリーブ褐色砂、38層が暗褐色砂質シルト、37層が暗褐色砂質シルト、36層が褐灰色シルト混じり砂、16層が暗褐色砂質シルトからなる。37層上面が1地点の水田確認面に相当する。試料は、45・42・40・39・37・36・16層から採取し、40・39・37・36層について珪藻分析、40・39・37層について花粉・植物珪酸体分析を実施する。

3) 3地点

本地点の堆積層は、下位より18層が砂とシルトの互層、20層が暗褐色砂混じりシルト、5b層がラミナが発達

する黄褐色～暗褐色砂、19層が暗褐色砂質シルト、4層が黒褐色粘土、16層・17層が暗褐色砂質シルト、①層が黒褐色シルトからなり、グランドの盛土に覆われる。試料は、各層より1ないし2点の試料を層位試料として採取し、18・20・4・16層の4層準について珪藻分析を実施する。

4) 4 地点

堆積層の層相は、下位より砂疊層、11層が暗灰色砂質シルト、10層が上部でラミナを形成する暗灰色シルト混じり砂、9層が暗褐色シルト混じり砂、6層が暗褐色砂混じりシルト、5層が褐色砂、4～2層が黄灰色砂質シルト、①層が黒褐色シルトからなり、上位を現在のグランド盛土が覆う。試料は、11層～6層の9層準より採取した。分析は、11～9層の6層準について各微化石分析を実施する。

5) 5 地点

本地点の層相は、下位より砂疊層、暗灰色シルト質砂層、23層が暗灰色砂質シルト、21層が暗灰色砂混じりシルト質粘土、18・24層が暗褐色砂混じりシルト、③層が褐色砂となる。試料は23層とその下位の暗灰色シルト質砂層の3層準から採取し、全試料について珪藻・植物珪酸体分析、試料番号1・3について花粉分析を実施する。

2. 分析方法

分析方法を以下に示す。

各分析方法

(1) 硅藻分析

湿重約6gの試料について過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法、傾斜法の順に化学・物理的な処理を施して珪藻化石を分離・濃集する。処理後の残渣を適量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥させた後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。

結果は主要珪藻化石の層位分布図として示す。各種群の出現率は、総数を基数として百分率で算出してある。また、産出した化石が現地性か異地性の化石かを判断する目安として完形殻の出現率を求めてある。

(2) 花粉分析

湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、篩別(250μm)、重液分離(奥化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトトリリス処理(無水酢酸：濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は主要花粉化石の層位分布図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数により不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

2・4・5地点の試料については、湿重7g前後の試料を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W,250kHz,1分間)、沈定法、重液分離法(ボリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葦部(葦身と葦鞘)の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を、近藤・佐浦(1986)の分類に基づいて同定・計数した。なお、1地点の試料については、単位体積当たりの個数も調査した。秤量時に一定量(1cc)を採取し、前述の物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。濃集した部分から一定量(50μl)を採取し、その中に含まれる植物珪酸体を同定・計数した。

結果は植物珪酸体群集の層位分布図として表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。また、1地点は単位体積当たりの個体数(絶対量)も示す。

(4) 種実同定

出土種実を肉眼および実体顕微鏡下で観察しながら、種類の同定を行う。結果は一覧表として示す。

3. 結果

3-1. 硅藻化石

珪藻分析の結果を図3～5に示す。珪藻化石は、2地点ではほとんど検出されず、層位的な変化を捉えることができなかった。3・4地点の珪藻化石群集は、全般に真・好流水性種が多産する傾向を示す。5地点の淀

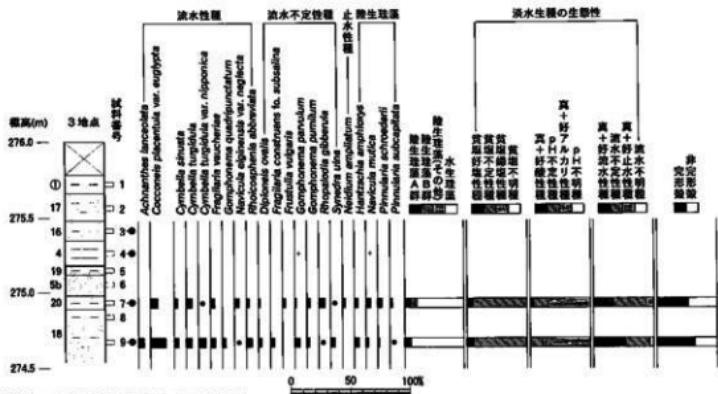


図3 3地点の主要珪藻化石の層位分布

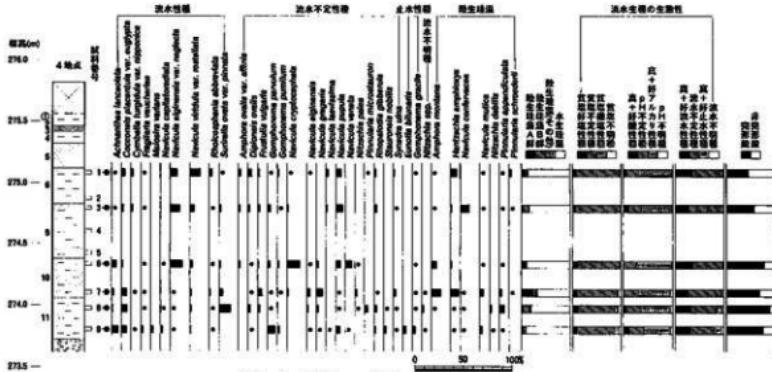


図4 4地点の主要珪藻化石の層位分布

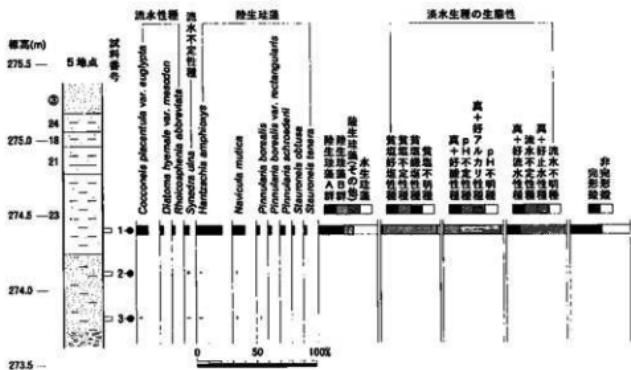


図5 主要珪藻化石の層位分布

み部分の珪藻化石群集は陸生珪藻が特徴的に出現することが特徴である。

3-2. 花粉化石

花粉分析の結果を図6~7に示す。花粉化石群集はいずれの地点も類似している。木本花粉では針葉樹のモミ属・ツガ属・マツ属・スギ属、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が多産する。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科・ヨモギ属や水生植物のガマ属・サジオモダカ属・ソバ属・サンショウモモなどが検出される。

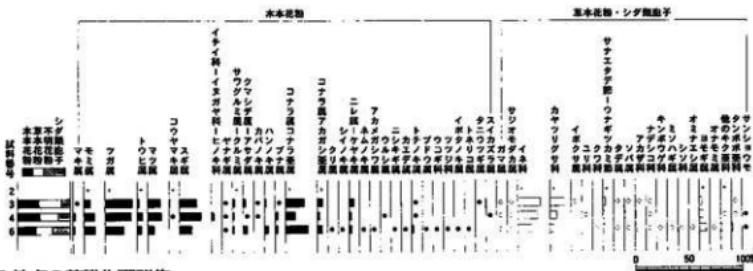


図6 1地点の花粉化石群集

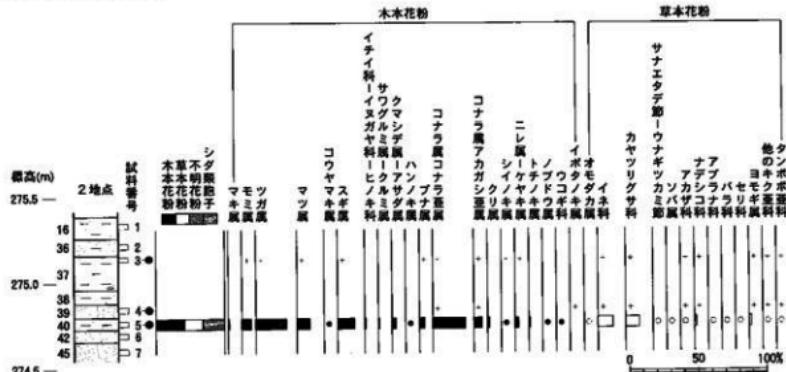


図7 2地点の主要花粉化石の層位分布

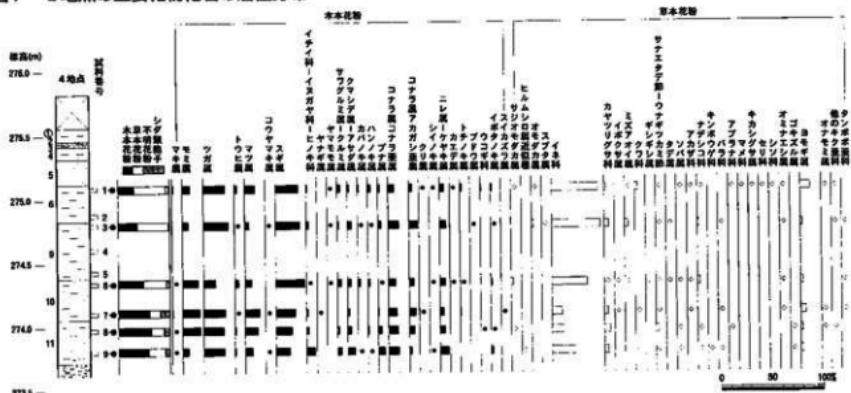


図8 4地点の主要花粉化石の層位分布

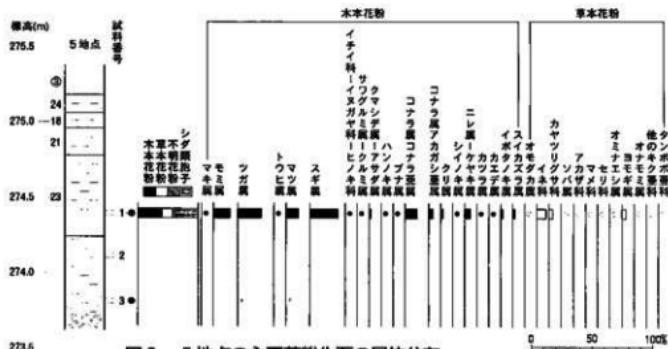


図9 5地点の主要花粉化石の層位分布

3-3. 植物珪酸体

植物珪酸体分析の結果を図10~14に示す。植物珪酸体は、調査地点のほぼ全試料から出現するが、短細胞珪酸体の検出個数が少ない試料がいくつか認められる。植物珪酸体群集は、層位によって多少の出現率の違いが認められるが、A層以外の層位では概して栽培種のイネ属、ウシクサ族（ススキ属を含む）の出現率が高く、ヨシ属、タケ亞科などを伴う。A層ではヨシ属が優占する。また、奈良・平安時代の水田面試料の栽培種のイネ属の出現率および個数は調査した水田面間で違いが認められる。

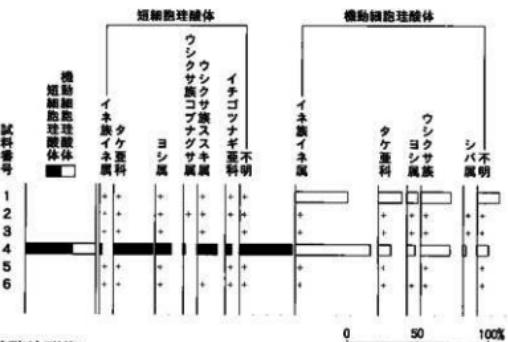


図10 1地点の植物珪酸体群集

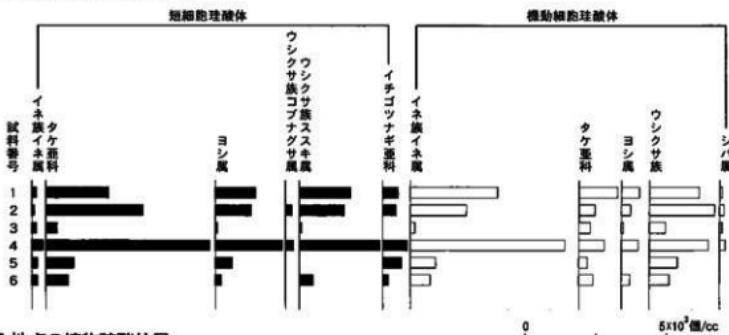


図11 1地点の植物珪酸体量

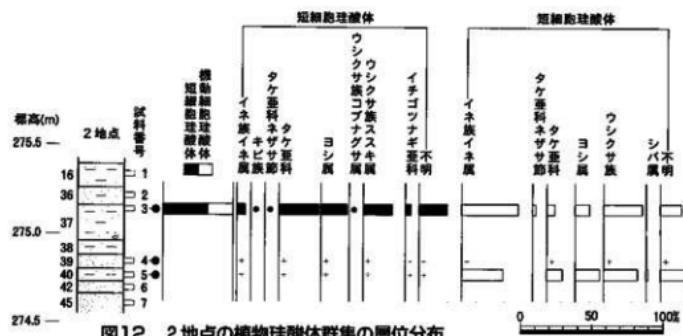


図12 2地点の植物珪酸体群集の層位分布

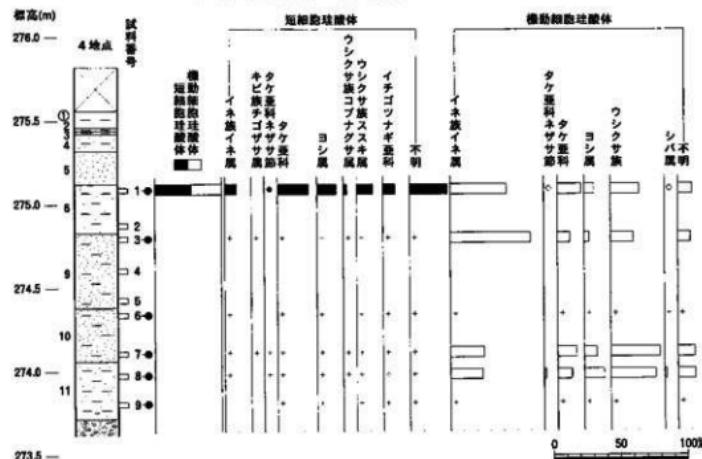


図13 4地点の植物珪酸体群集の層位分布

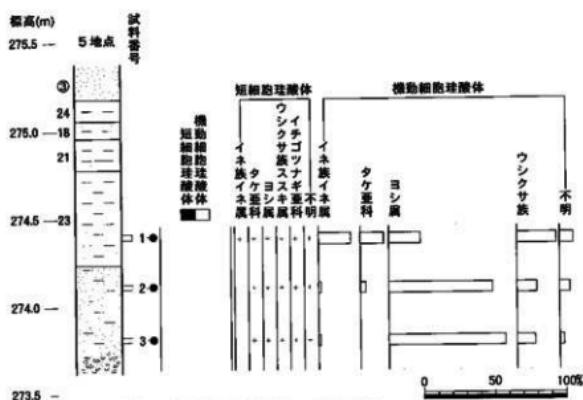


図14 5地点の植物珪酸体群集の層位分布

3-4. 種実

河道および沿部堆積物から出土した種実の同定結果を表1に示す。種実類のほとんどはモモに同定された。このほかにオニグルミ、コナラ属、サクラ属、エゴノキ属、トウガン、ヒヨウタン類が同定された。

表1 種実遺体の同定結果(1)

地点	試料名	核						地点	試料名	核						その他
		モモ 高麗安定期 高麗 核片	オニグルミ コナラ属 高麗安定期 高麗 核片	サクラ属 エゴノキ属 高麗安定期 高麗 核片	トウガン ヒヨウタン 類 高麗安定期 高麗 核片	不規 その他の 高麗安定期 高麗 核片				モモ 高麗安定期 高麗 核片	オニグルミ コナラ属 サクラ属 エゴノキ属 トウガン ヒヨウタン 類 高麗安定期 高麗 核片	不規 その他の 高麗安定期 高麗 核片				
KAWA 2	No. 3759	1						KAWA 2	No. 3544	1						
KAWA 2	No. 3606	1						KAWA 2	No. 3545	1						
KAWA 2	No. 4116	1						NUMA 1	J-1	2						
KAWA 2	No. 21-22	2	8					NUMA 1	No. 3187	1						
KAWA 2	No. 21	1						NUMA 1	No. 3189	1						
KAWA 2	No. 22	1						NUMA 1	No. 3280	2						
KAWA 2	No. 23	2	1	1				NUMA 1	No. 3792	3						
KAWA 2	No. 24	1						NUMA 1	No. 3902	2						
KAWA 2	No. 25	1						NUMA 1	I-1	1						
KAWA 2	No. 3120	1						NUMA 1	I-12	2	2					
KAWA 2	No. 3121	1						NUMA 1	I-13							
KAWA 2	No. 3122	1						NUMA 1	I-14	1	2	11				
KAWA 2	No. 3123	1						NUMA 1	I-15			2	2			
KAWA 2	No. 3124	1						NUMA 1	I-16	1	2	2				
KAWA 2	No. 3142	1						NUMA 1	I-17			1	3			
KAWA 2	No. 3143	1						NUMA 1	I-18	2	3					
KAWA 2	No. 3206	1						NUMA 1	I-19			2				
KAWA 2	No. 3215	1						NUMA 1	I-20			3				
KAWA 2	No. 3222	1						NUMA 1	J-1			3				
KAWA 2	No. 3228	1						NUMA 1	J-11			1				
KAWA 2	No. 3230	1						NUMA 1	J-12							
KAWA 2	No. 3231	1						NUMA 1	J-13			1	1			
KAWA 2	No. 3238	1						NUMA 1	J-14			2	2			
KAWA 2	No. 3240	1						NUMA 1	J-15			3	3			
KAWA 2	No. 3246	1						NUMA 1	J-16			3	3			
KAWA 2	No. 3308	1						NUMA 1	J-17			1	1			
KAWA 2	No. 3309	1						NUMA 1	J-18	2	1	12				
KAWA 2	No. 3310	1						NUMA 1	J-19	1	1	3				
KAWA 2	No. 3311	1						NUMA 1	J-20	2	3					
KAWA 2	No. 3698	1						NUMA 1	J-21	1	4	4				
KAWA 2	No. 3784	1						NUMA 1	K-17			3				
KAWA 2	No. 3785	1						NUMA 1	K-18			1				
KAWA 2	No. 3786	1						NUMA 1	K-19			1				
KAWA 2	No. 3850	1						NUMA 1	K-20			5				
KAWA 2	No. 3865	2						NUMA 1	K-21			5				
KAWA 2	No. 3867	1						NUMA 1	No. 2126			4				
KAWA 2	No. 3914	1						NUMA 1	No. 2185	1						
KAWA 2	No. 3915	1						NUMA 1	No. 2186	1						
KAWA 2	No. 3921	1						NUMA 1	No. 2223			1				
KAWA 2	No. 3928	1						NUMA 1	No. 2247							
KAWA 2	No. 3930	1						NUMA 1	No. 2256	1						
KAWA 2	No. 3931	1						NUMA 1	No. 2264							
KAWA 2	No. 3942	1						NUMA 1	No. 2273							
KAWA 2	No. 3944	1						NUMA 1	No. 2281	1						
KAWA 2	No. 3945	1						NUMA 1	No. 3310	1						
KAWA 2	No. 3952	1						NUMA 1	No. 3410	1						
KAWA 2	No. 3959	1						NUMA 1	No. 3419			1				
KAWA 2	No. 3970	1						NUMA 1	No. 3439			1				
KAWA 2	No. 3970	1						NUMA 1	No. 3440			1				
KAWA 2	No. 3981	1						NUMA 1	No. 3471	1						
KAWA 2	No. 3982	1						NUMA 1	No. 3498							
KAWA 2	No. 4018	1						NUMA 1	No. 3509							
KAWA 2	No. 4039	1						NUMA 1	No. 3512							
KAWA 2	No. 4042	1						NUMA 1	No. 3535	1						
KAWA 2	No. 4047	1						NUMA 1	No. 3565	1						
KAWA 2	No. 4051	1						NUMA 1	No. 3625	1						
KAWA 2	No. 4068	1						NUMA 1	No. 3627	1						
KAWA 2	No. 4082	1						NUMA 1	No. 3637	1						
KAWA 2	No. 4098	1						NUMA 1	No. 3638	1						
KAWA 2	No. 4105	1						NUMA 1	No. 3640	2						
KAWA 2	No. 4117	1						NUMA 1	No. 3652	1						
KAWA 2	No. 4125	1						NUMA 1	No. 3667	1						
KAWA 2	No. 4130	1						NUMA 1	No. 3672	1						
KAWA 2	No. 4135	1						NUMA 1	No. 3716	1						
KAWA 2	No. 4138	1						NUMA 1	No. 3757	1						
KAWA 2	No. 4140	1						NUMA 1	No. 3765	1						
KAWA 2	No. 4145	1						NUMA 1	No. 3820	1						
KAWA 2	No. 4155	1						NUMA 1	No. 3830							
KAWA 2	No. 4156	1						NUMA 1	No. 3845							
KAWA 2	No. 4157	1						NUMA 1	No. 3850							
KAWA 2	No. 4168	1						NUMA 1	No. 3859							
KAWA 2	No. 4169	1						NUMA 1	No. 3863	1						
KAWA 2	No. 4180	1						NUMA 1	No. 4401	1						
KAWA 2	No. 4201	1						NUMA 1	No. 4402	1						
KAWA 2	No. 4202	1						NUMA 1	No. 4404	1						
KAWA 2	No. 4203	1						NUMA 1	No. 4405	1						
KAWA 2	No. 4205	1						NUMA 1	No. 4405							
KAWA 2	No. 4206	1						NUMA 1	No. 4426							
KAWA 2	No. 4209	1						NUMA 1	No. 4524	1						
KAWA 2	No. 4271	1						NUMA 1	酒泡	1						
KAWA 2	No. 4319	1						TANBO	K-17	2						
KAWA 2	No. 4322	1						TANBO	K-21	2						
KAWA 2	No. 4361	1						TANBO	K-21-22	1						
KAWA 2	No. 4382	1						TANBO	No. 3003	1						
KAWA 2	No. 4417	1						TANBO	No. 3004	1						
KAWA 2	No. 4517	1						TANBO	No. 3006	1						
KAWA 2	No. 4542	1						TANBO	No. 3007	1						
KAWA 2	No. 4543	1						TANBO	No. 3002	1						

表2 種実遺体の同定結果（2）

4. 旧河道 (KAWA 2) および淀み部 (NUMA) の埋積過程

先述した層序区分に基づいて、調査域および周辺の古環境変遷について述べる。古い時期よりA～E期の5つの時期に区分される。

A期：東側の微高地形成期にあたる。本堆積物中からは珪藻化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、堆積速度が早く、取り込まれる化石数が少なかったことが考えられる。

B期：河道西部に堆積した地層である。2地点は、珪藻化石の産出が少なく、堆積環境については不明である。現地調査所見によれば、本地点は旧流路肩部に位置するが、砂を主とする堆積物からなる。のことと、珪藻化石がシルト粒子などの微細粒子と拳動を共にする（小杉、1989）とされていることを考慮すると、珪藻化石は、堆積物中に取り込まれる量が少なかった、あるいは堆積後に流失した可能性が考えられる。

C期：河道堆積物中（3地点20層・18層）の珪藻化石群集は、河川中～下流部・河川沿いの河成段丘・扇状地・自然堤防・後背湿地などに集中して出現するとされる中～下流性河川指標種群（安藤、1990）を含む流水指標種が卓越することが特徴であった。この特徴から、流水成の堆積物であることが推定される。

一方、淀み部の堆積物は、淀み部と河道が合流する付近（4地点）では、11層～6層の珪藻化石群集は層位的に多少変化するものの、中～下流性河川指標種群を含む流水指標種が多産するという特徴を示した。このことと、沼や池などに生育する止水性の珪藻化石が非常に少ないとから、本地点の堆積物もまた流水の影響下で堆積したと考えられる。また、淀み奥部（5地点）では、東側微高地構成堆積物直上の淀み堆積物（23層）の珪藻化石群集は陸生珪藻が優占し、中～下流性河川指標種群などの流水指標種が比較的多産するという特徴を示した。このような特徴から、堆積物は流水の影響下で堆積したものと推定されるが、陸生珪藻が多産するところからみて、微高地側からの流れ込みの影響が強かった、あるいは堆積後に好気的な場所となっていたことが推定される。

以上のように河道堆積物では、その性格を反映する結果が得られたが、淀み部堆積物では池や淀みを示唆するような状況は推定されなかった。これは、淀み部が流路の攻撃斜面に形成された淀みを利用しておらず、完全に流路と切り放されていないことに起因し、常に流水の影響を受けていたことが想定される。

D期：調査区の河道から淀みから微高地を覆う砂礫の堆積期に相当する。この砂礫の堆積による環境変化は捉えられていないが、その分布の規模からみれば調査域の環境は多少なりとも変化したことが想定される。

E期：珪藻化石がほとんど検出されなかつたことから、堆積環境については不明である。この原因としては、

堆積速度が早く取り込まれる化石数が少なかったことが上げられる。堆積物の粒径や構造からは氾濫性の堆積物とみなされる。

5. 古植生

河道・淀み部堆積物から得られた木本化石群集は、各層堆積期を通じて類似していた。すなわち、モミ属・ツガ属・マツ属・スギ属・コナラ亜属が多産し、サワグルミ属・クルミ属・クマシデ属・アサダ属・ブナ属・アカガシ亜属を伴っていた。このうち、モミ属・ツガ属は、照葉樹林の主要構成要素であるアカガシ亜属・シイノキ属の出現から、暖温帯から冷温帯にかけての移行帶の森林を形成する温帶性針葉樹のモミ・ツガに由来する可能性が高い。したがって、当時の周辺地域にはモミ・ツガ・スギなどの温帶性針葉樹とナラ類などの落葉広葉樹からなる植生が存在したことが推定される。また、サワグルミ属・クルミ属・クマシデ属・アサダ属・ニレ属・ケヤキ属・トチノキ属などの溪谷林や湿地林を形成する種類を含む分類群は、当時も谷沿いや河道周辺などの湿った場所に分布していた可能性がある。

以上の傾向は、甲府盆地西部に発達する扇状地末端部に位置する遺跡で行われた花粉分析結果（未公表資料）とも類似しており、同様な植生が盆地の山地域の広い範囲において成立していた可能性がある。なお、関東平野では古墳時代の頃に丘陵などを中心にモミ属・ツガ属が増加する現象が認められている（例えば、榆井、1990；パリノ・サーヴェイ株式会社、1993など）。この時期は、いわゆる「弥生の小海退」とよばれ、気候的には冷涼、多雨であったといわれている（郡須、1989）。これらのこと考慮すると、後背山地で温帶性針葉樹の分布には、このような気候的要因が関係していた可能性がある。また、盆地の縁辺部では扇状地が発達していることから、土地の条件が不安定な場所でも林分を形成することができるツガなどが分布域を広げた可能性もある。あるいは、気候条件と土地の条件の両者が複合した結果による可能性もある。これについては、扇状地の発達過程と花粉化石群集の変遷との関係を検討する必要があり、今後とも資料を蓄積していくことが重要である。

一方、周辺には、タケ亜科・ススキ属・イチゴツナギ亜科などのイネ科植物、カヤツリグサ科・サンエクデ節・ウナギツカミ節・ヨモギ属などの草本類が生育していたと考えられる。また、サジオモダカ属・オモダカ属・ヨシ属・ミズアオイ属など水生植物に由来する化石が検出されることから、これらの種類が河道・淀み縁辺部あるいはその集水域に分布する湿地に生育していたと推定される。特に、ヨシ属が5地点で多産することを考えると、淀み部縁辺部にはヨシ属が生育していた可能性がある。

6. 奈良・平安時代の水田の様態

奈良・平安時代の水田面では、イネ科花粉が比較的多く検出されたが、花粉化石の保存状態が不良であったため、栽培種のイネ属が含まれているか確認できなかった。一方、植物珪酸体では、イネ属の植物珪酸体が検出され、特に試料番号1・4では機動細胞珪酸体の出現率が高かった。この出現率は、現在のイナワラ堆肥適用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壤表層の出現率（近藤、1988：イネ属機動細胞珪酸体が16%を示している）よりも高率である。また、出現率を求めるに至らなかった試料でもイネ属の検出個数は他の種類と比較して多かった。これらの結果は、本地点で水田稻作が行われたことを裏づける。

各水田試料中のイネ属植物珪酸体の絶対量は、短細胞珪酸体では200個/cc前後、機動細胞珪酸体は区画によって違いがあり、試料番号1・2・4で3000～5000個/cc程度、試料番号3・5・6で100～900個/cc程度であった。このような各水田区画ごとに含有数が異なっていた原因としては、区画によって生育していたイネ属の量が異なっていた、あるいは洪水により水田耕土が部分的に削剥・流失したために植物珪酸体が残留したことなどが考えられる。

当時の水田の形態は、本水田耕土に相当する2地点の37層下部に明瞭な酸化鉄の沈着が認められたこと、この酸化鉄の沈着が水の下方移動によって生じたもので現在の表面水型水田（いわゆる乾田や半乾田）の土層断

面で認められる酸化鉄および酸化マンガンの集積層に類似するものであったことなどから、乾田あるいは半乾田の形態をとっていた可能性がある。水田内の水質は、珪藻化石がほとんど検出されなかつたため不明であるが、草本類の花粉化石の産状から、サジオモダカ属・サンショウウモなど小型の抽水植物が生育することができる水質であったことが推定される。これらの植物は当時の水田雑草として生育していた可能性もある。

奈良・平安時代水田層の下位の層位にあたる2地点39層でもイネ属機動細胞硅酸体が比較的多く検出された。このことは、奈良・平安時代以前の段階で、既に本流域の集水域およびその周囲では稻作が行われていたことを示唆する。また、奈良・平安時代以降の時期にも、河道や淀み部堆積物下部からイネ属が検出されたことから、本地点以外の場所で稻作が行われていたことが推定される。特に河道堆積物中からは低率ながらも栽培種のソバ属の花粉化石、トウガン・ヒヨウタン類などの有用植物の種実類が検出されたことから、周辺域でソバ栽培などの畑作も行われていた可能性がある。また、トウガン・ヒヨウタン類などの有用植物の種類は食用や容器として利用されていた可能性がある。

7.まとめ

今回調査を行った各地点の結果および推定される古環境の総括を図14に示す。調査区の環境変遷は大きくA～E層に区分された。A期は東側の微高地形成期に相当し、調査地点周辺にはヨシ属などが生育していたことが推定された。B～E期は河道および淀み部の埋積期に相当し、流水の影響下で堆積が進行したことが推定された。本堆積物中からは栽培植物などの有用植物に由来する植物化石が検出され、河道周辺で稻作や栽培などが行われていた可能性が推定された。また、水利施設として利用されていた可能性がある淀み部は河道から常に流水の影響を受けていたことが推定された。このことは、淀み部の水質がため池などのように富栄養化することなく、比較的清潔であったことを物語っており、当時の水の利用方法を検討する上で考慮する必要があろう。また、奈良・平安時代頃の水田の様態は、乾田や半乾田であった可能性が強く、サジオモダカ属などの水田雑草が生育していた可能性が指摘された。本時期の稻作の様態については、発掘調査で得られた農耕具の情報や、周辺地域での情報などを総合的に評価することが大切と考える。

標高(m)	淀跡周辺の地質構成								森林生息									
	微高地帯		河道中央部		河道・辺境部		沿岸部/微高地											
	珪藻化石の産状	環境	珪藻化石の産状	環境	珪藻化石の産状	環境	珪藻化石の産状	環境										
275.0	未分析	不明	黄土化化石 黄土化	不明	未分析	不明	未分析	不明										
洪水層（奈良・平安時代遺物包含）																		
274.5	耕作	不規則	流水性	河漫堆積物	未分析	未分析	不明		モミ・ラガ・ スギなど常緑樹 科などの樹木が廣 く分布する 樹木									
274.0																		
流水性層の多層 ウシクア属・イネ 属の多層																		
耕作土が混入する 河漫堆積物																		
微生物の多層 流水性層の細かい 砂の多層・イネ 属の多層																		
耕作土が混入する 多層																		
黄土化化石 ヨシ属の多層																		
氾濫の影響により 氾濫層が形成され る																		

図15 塩部遺跡における環境変遷概念図

II. 出土木製品の樹種

1. 試料

試料は、出土した木製品24点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

刺刀の刃を用いて木口（横断面）・粋目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表2に示す。試料番号110は切片を作製することができず、不明とした。その他の試料は全て針葉樹であったが、3点（試料番号70-2,79,99）は保存状態が良好でないために樹種の同定には至らなかった。他の試料は6種類（トウヒ属・ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・ヒノキ科・カヤ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・トウヒ属 (Picea) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞、エビセリウム細胞よりも柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。放射仮道管の有縁壁孔はトウヒ型を主とする。分野壁孔はトウヒ型で3～6個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ヒノキ (Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・サワラ (Chamaecyparis pisifera (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で1～3個。放射組織は

表2 樹種同定結果

番号	試料名	木器番号	用途など	時代・時期	樹種
12	KAWA2 光波 No 4426	117	木片	平安時代	ヒノキ
23	NUMA1 斎串B No 3505	11	斎串	平安時代	ヒノキ
25	NUMA1 No 3595	19	斎串	平安時代	サワラ
31	KAWA2 No 3685	64	斎串	平安時代	ヒノキ
42	KAWA2 光波 No 3983	95	斎串	平安時代	ヒノキ
52	KAWA2 光波 No 4322	99	木製品	平安時代	ヒノキ
54	KAWA2 No 4365	90	斎串B	平安時代	ヒノキ
55	KAWA2 木製品 No 4462	73	木製品	平安時代	ヒノキ
63	NUMA1 沼岬付 W-1524	55	木製品	平安時代	ヒノキ科
65	P-24	142	木製品	平安時代	カヤ
70-1	KAWA2 光波 No 3782-A	71	木製品	平安時代	ヒノキ
70-2	KAWA2 光波 No 3782-B	69	木製品	平安時代	針葉樹
74	NUMA1 光波 No 3849-A	39	斎串	平安時代	ヒノキ
	NUMA1 No 3849-B	40	木製品	平安時代	ヒノキ
	NUMA1 No 3849-C	38	木製品	平安時代	ヒノキ
	NUMA1 No 3849-D	41	木製品	平安時代	ヒノキ
	NUMA1 No 3849-E	42	木製品	平安時代	ヒノキ属
78	KAWA2 R-25 W-1	121	木製品	平安時代	ヒノキ
79	KAWA2 平坂 Q-25 W-3	124	平坂	平安時代	針葉樹
80	KAWA2 平坂 R-25 W-12	100	平坂	平安時代	サワラ
89	NUMA1 光波 No 3585	56	木製品	平安時代	トウヒ属
99	NUMA1 板状木製品B No 3845	53	板状木製品	平安時代	不明
110	KAWA2 木B No 3691 光波	101	木製品	平安時代	針葉樹
131	光波B No 4274	85	板状木製品	平安時代	ヒノキ属

単列、1~15細胞高。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型~スギ型で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。上記ヒノキまたはサワラであるが、充分な観察が行えず、種類の同定には至らなかった。

・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は薄い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はスギ型~ヒノキ型である。放射組織は単列、1~15細胞高。

上記ヒノキ属 (ヒノキ・サワラ) を除くヒノキ科 (アスナロ・ネズコ・ビャクシン) であるが、種類の同定には至らなかった。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

4. 考察

出土した木製品は、斎串・板状木製品・木片などがあるが、用途などの詳細が不明なものも多い。斎串については、西日本で樹種同定を行った例が知られているが、その多くはヒノキである(島地・伊東, 1988)。本地域では、御勅使木川扇状地に位置する二本柳遺跡で平安時代の斎串について樹種同定が行われている(未公表資料)。その結果では、スギとヒノキ属が多数認められている。今回の結果ではスギは認められなかつたが、ヒノキやサワラが多い点は二本柳遺跡の結果と調和的である。また、これらの結果は西日本の結果ともよく一致しており、本地域においてもヒノキ属が多数利用されていたことが推定される。斎串にヒノキ属などの針葉樹が多用されている背景には、これらの木材が木理が直通で板状の加工が施しやすいことがあったと考えられる。

本地域では、大師東丹保遺跡等で鎌倉時代の斎串も樹種が明らかにされている(未公表資料)。その結果でもヒノキ属が多く認められており、同様の用材選択が続いている様子がうかがえる。また本地域では、平安時代や鎌倉時代の杭などにもヒノキ属が多数確認されている。杭は、基本的には周辺で入手可能な木材を利用したと考えられることから、本地域ではヒノキ属(とくにヒノキ)の木材が比較的入手しやすい環境にあったと考えられる。

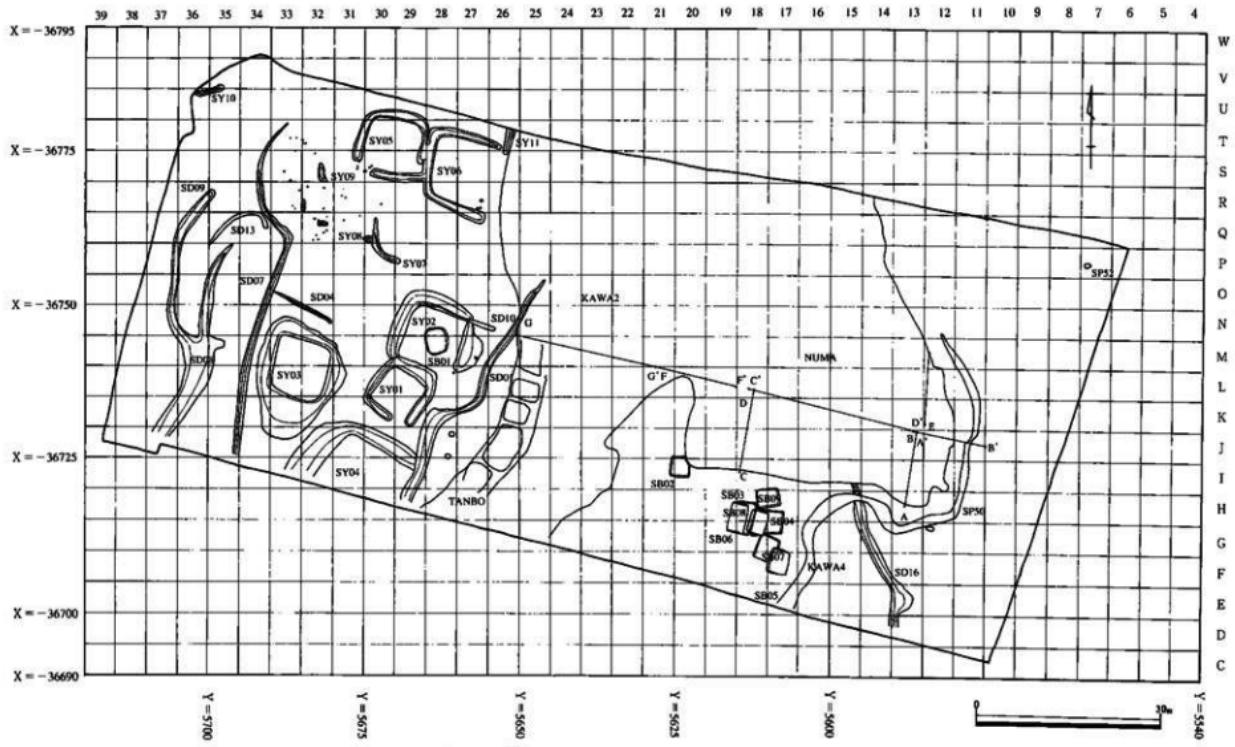
引用文献

- Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水藻類による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition. Teil I ~ III, Band.15, p.131-506; Band.16, p.1-155,274-394.
- Hustedt,F. (1959) Die Kieselalgen. Deutschlands, Oesterreich und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Landen Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. Teil. 2, Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz., Band. VI.
- 845p., OTTO KOELTZ SCIENCE PUBLISHERS.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 近藤錦三 (1988) 十二遺跡の植物珪藻体分析. 「鎌師屋遺跡群 十二遺跡 -長野県北佐久郡御代田町十二遺跡 発掘調査報告書-」, p.377-383, 御代田町教育委員会.
- 近藤錦三・佐藤 隆 (1986) 植物珪藻体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.

- 小杉正人 (1989) 硅藻化石群集の形成過程と古生態解析. 日本ベントス研究会誌, 35/36, p.17-28.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353, BERLIN-STUTTGART.
- Krammer,K. und Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3,Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot,H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4,Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms, 334p., In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 那須孝悌 (1989) 活動の舞台:概論. 水井昌文・那須孝悌・金間 悅・佐原 真緒, 「弥生文化の研究Ⅰ 弥生人とその環境」, p.119-130, 雄山閣.
- 水井 尊 (1990) 花粉化石が語る昔の森林. 「鶴ヶ島町史自然編Ⅰ 鶴ヶ島の地質」, p.34-46, 鶴ヶ島町史編さん室.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1993) 中耕遺跡出土遺物の自然科学分析報告. 「埼玉県埋蔵文化財調査事業団 告書第125集 中耕遺跡VI 本文編(第1分冊)」, p.320-365, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団.
- 高地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.

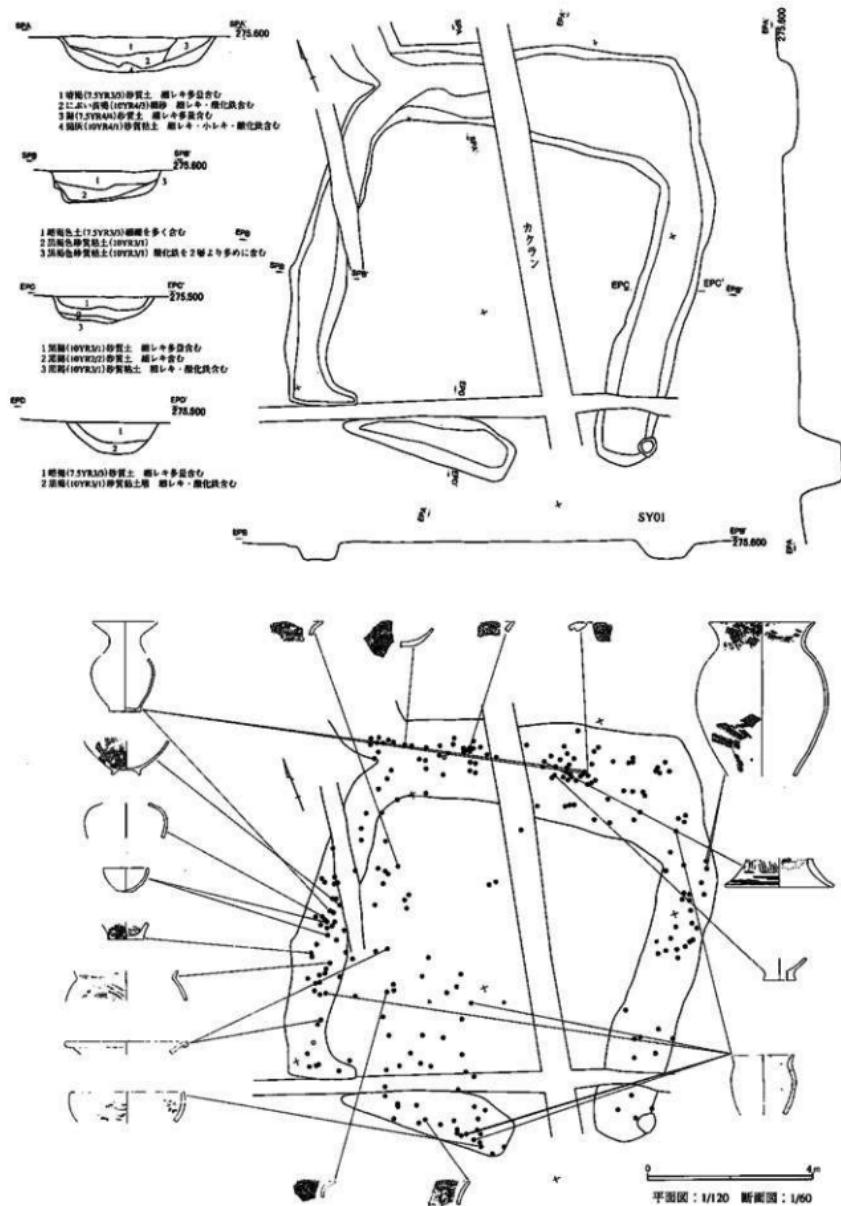
図 版

第9図 塗部遺跡全体図



XおよびYの数値は平面図直角座標系原点からの距離（メートル単位）

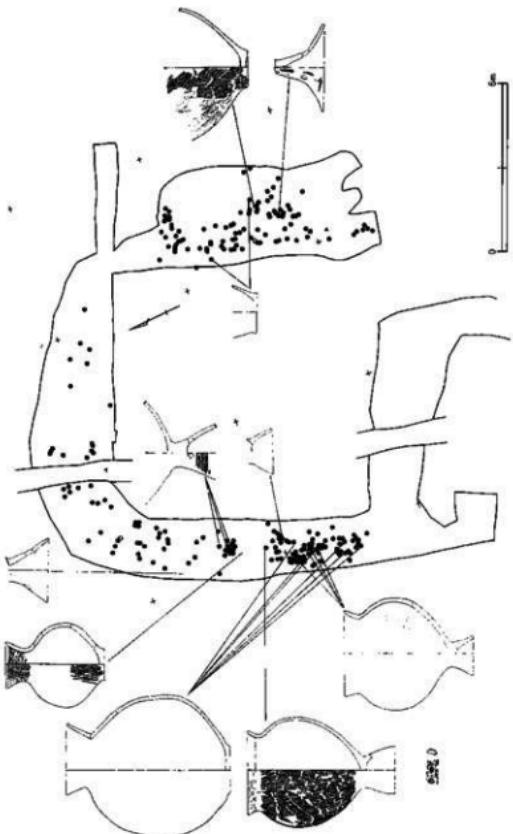
図版 第10図



第10図 SY01実測図・出土状況図

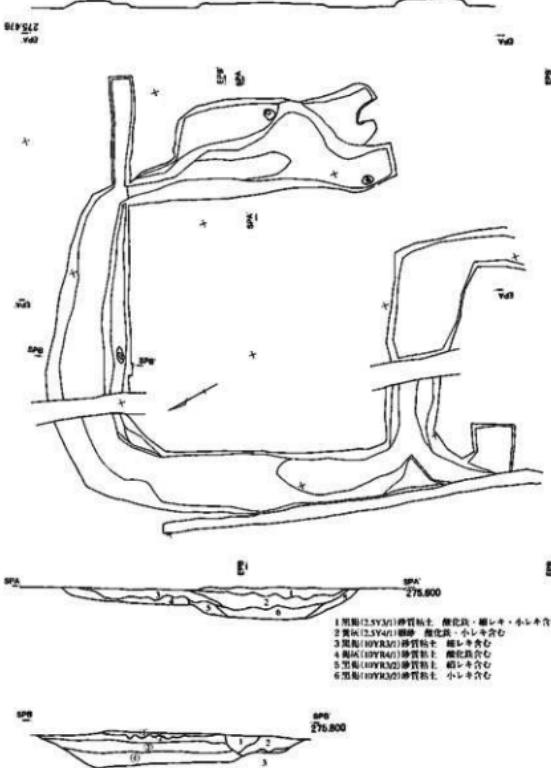
第11図 SY02実測図・出土状況図

平面図 : 1/180 新規図 : 1/60



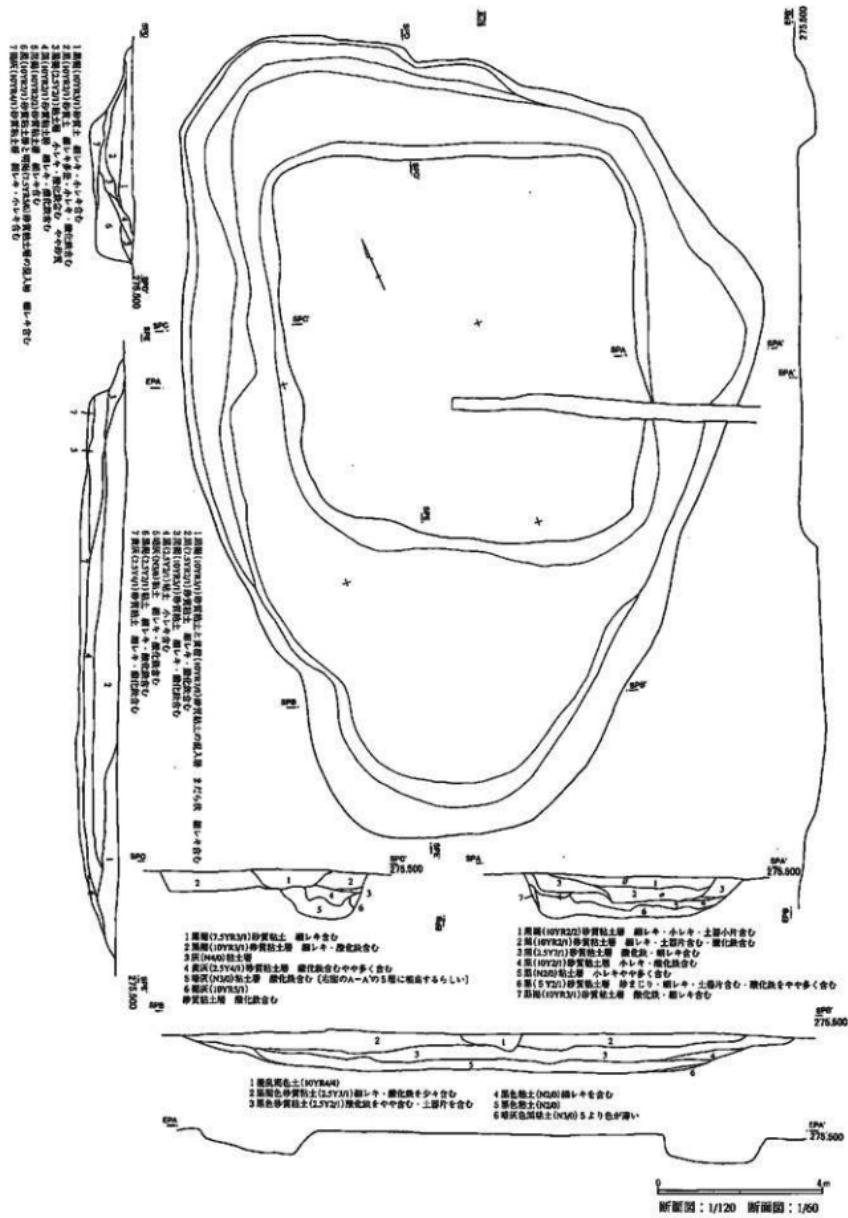
- 1 磨削器(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 2 磨灰(1SY02)砂質・酸化鉄・小リキ含む
- 3 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 4 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 5 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 6 磨灰(1SY02)砂質粘土・小リキ含む

- 1 磨削器(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 2 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 3 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む

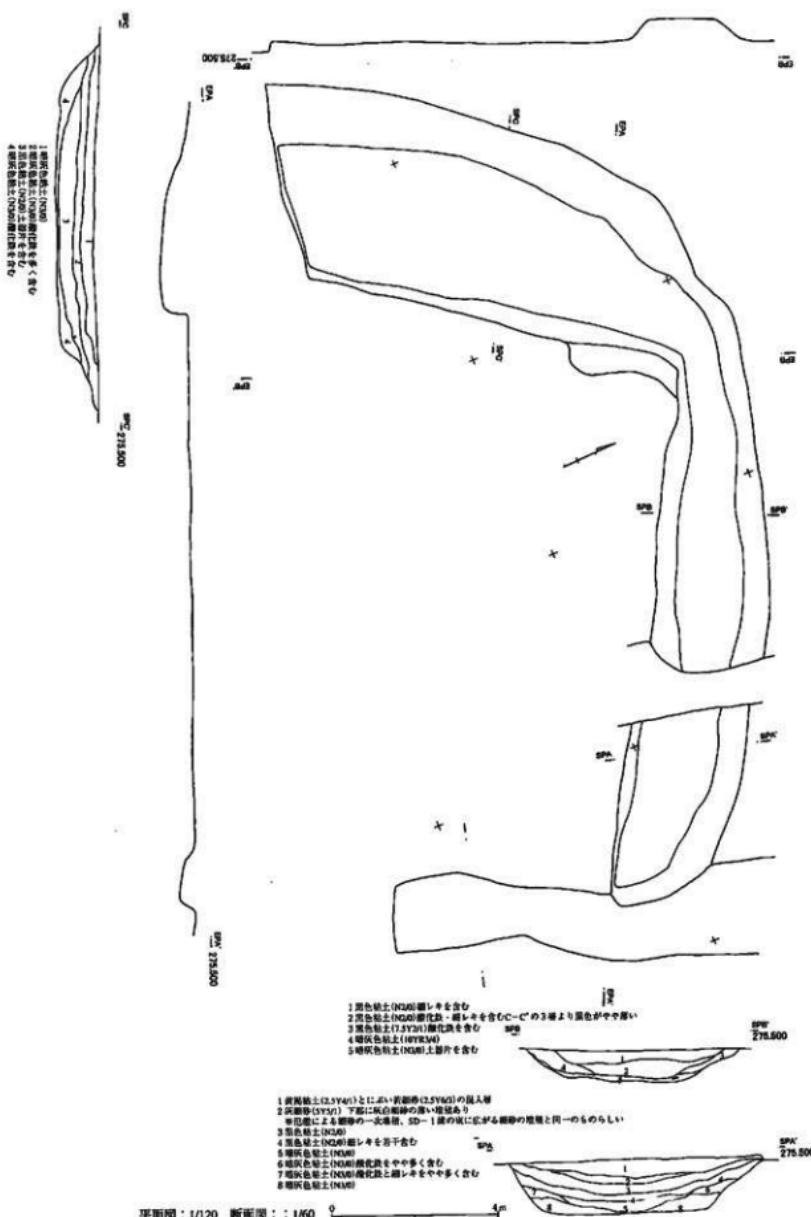


- 1 磨削器(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 2 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 3 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む
- 4 磨灰(1SY02)砂質粘土・酸化鉄含む

図版 第12図

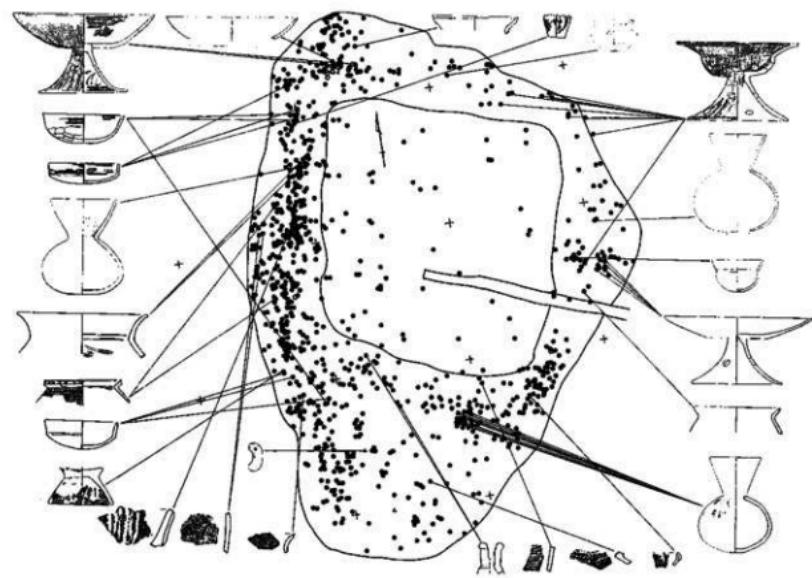


第12図 SY03 実測図

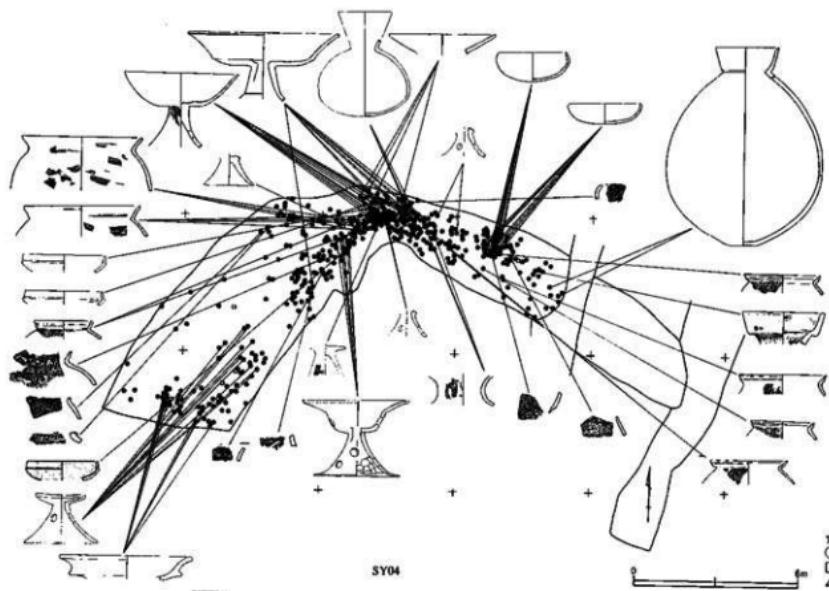


第13圖 SY04 實測圖

図版 第14図



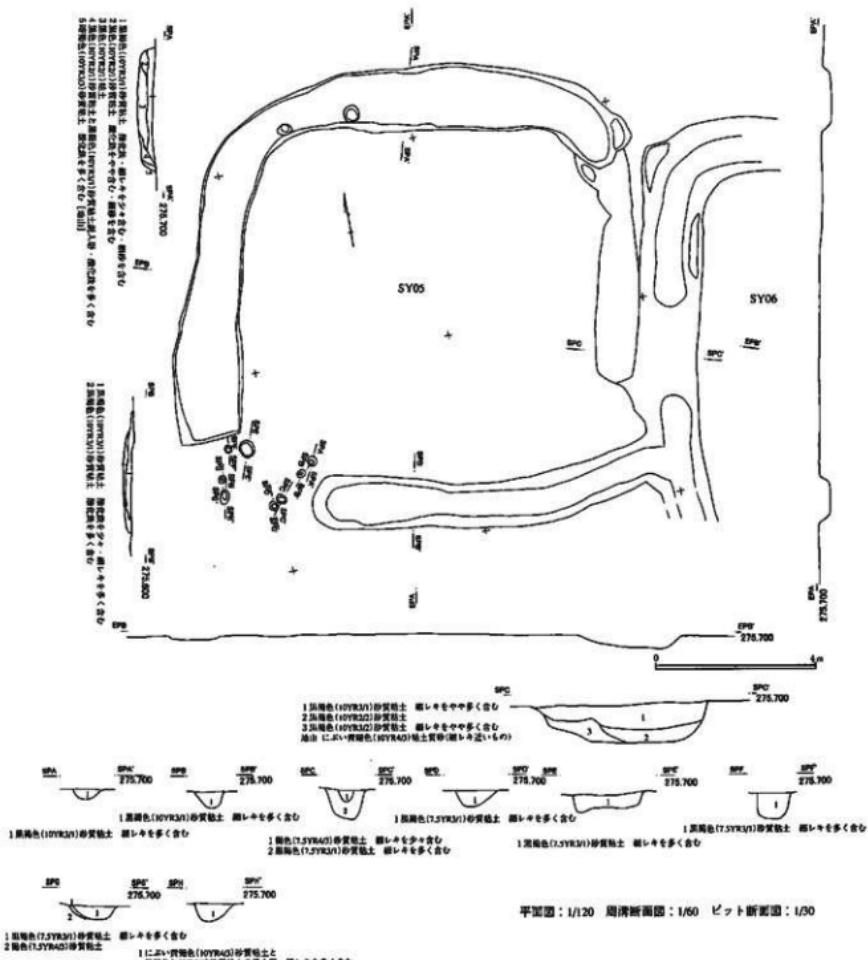
SY03



SY04

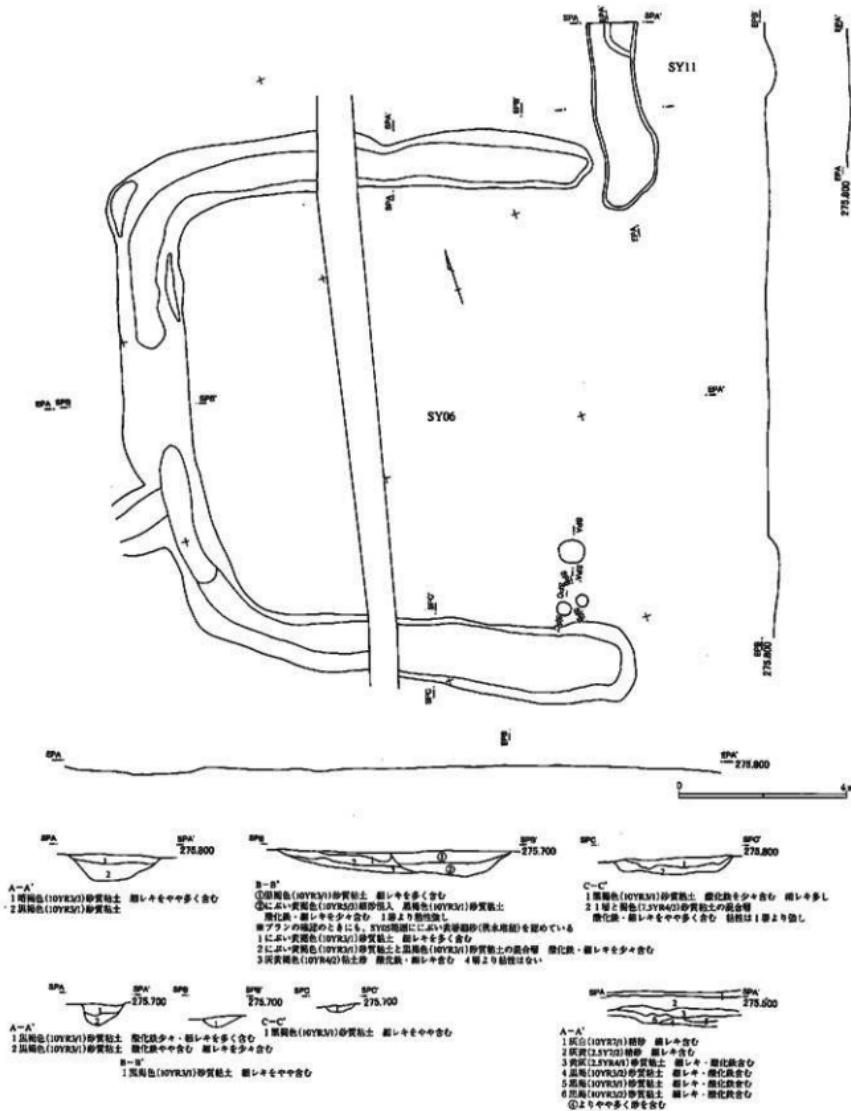
☆ウマ唐
○骨片
□石
△鉄

第14図 SY03・04出土状況図



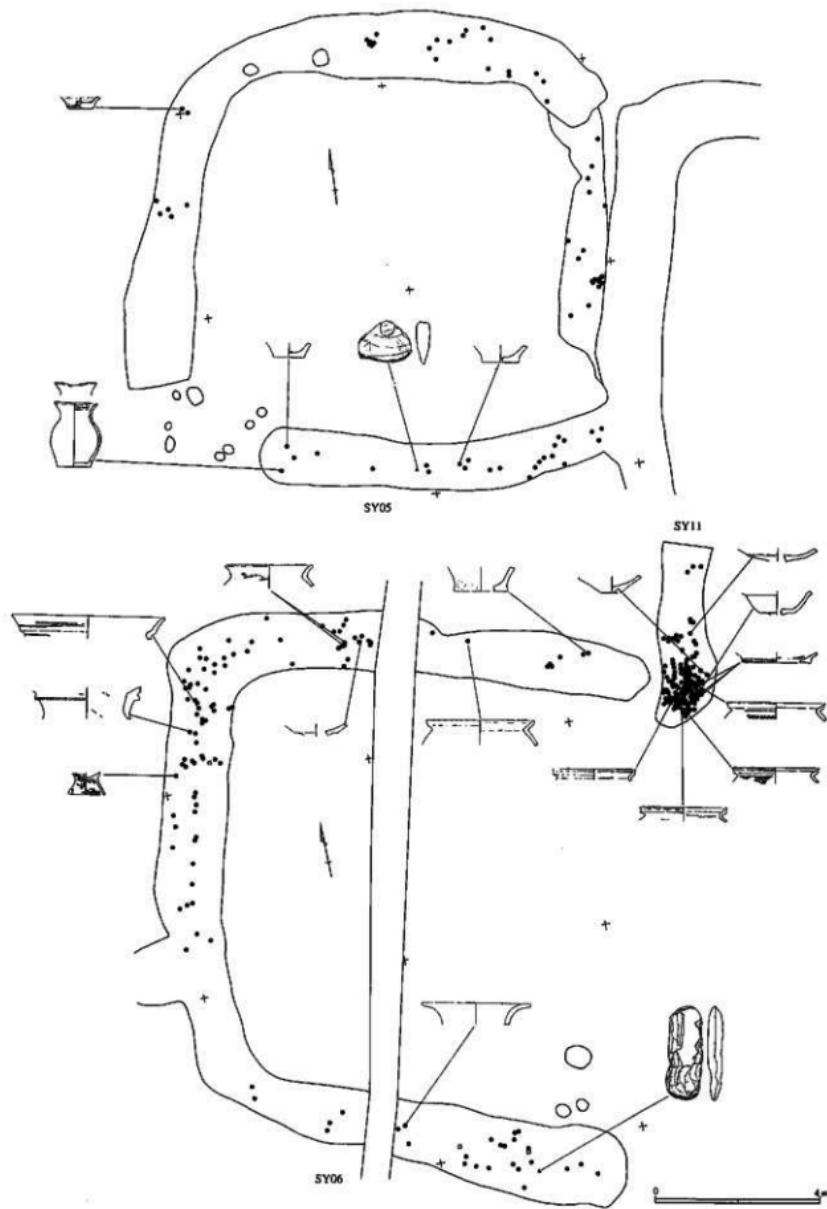
第15図 SY05 実測図

図版 第16図



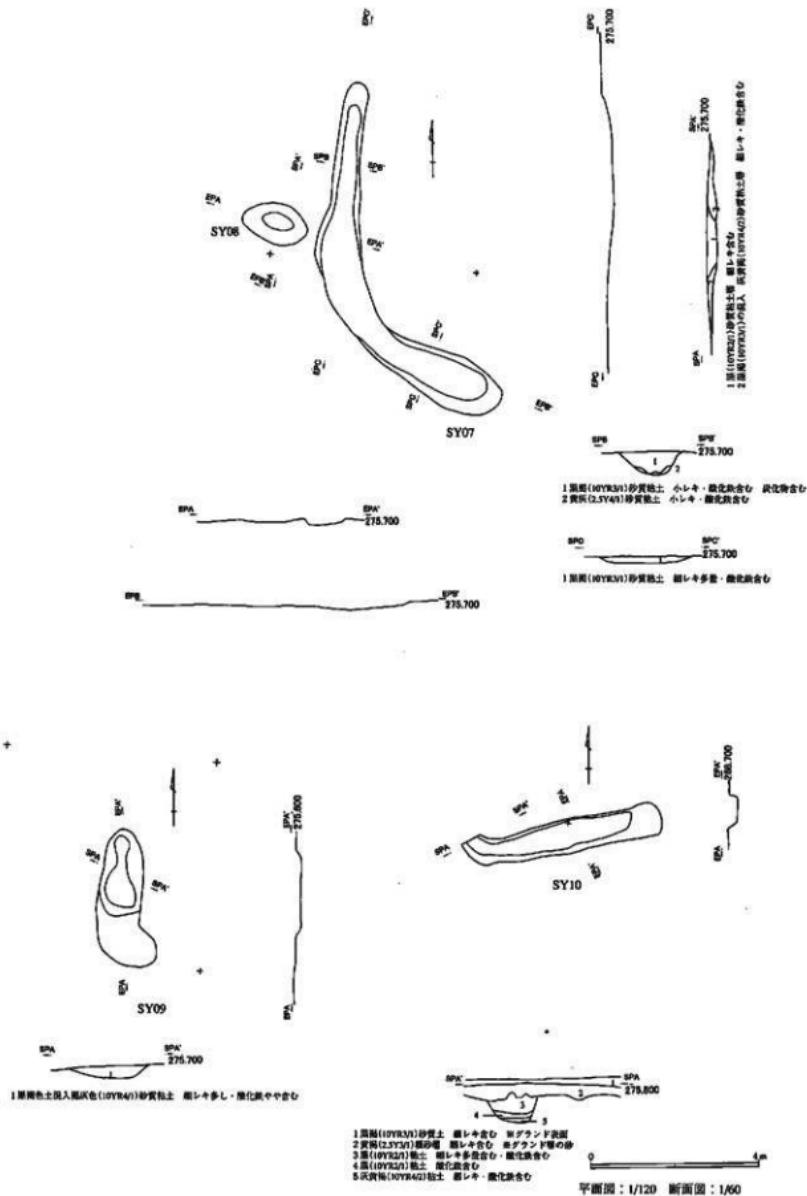
平面図: 1/120 周辺断面図: 1/60 ピット断面図: 1/30

第16図 SY06・11実測図

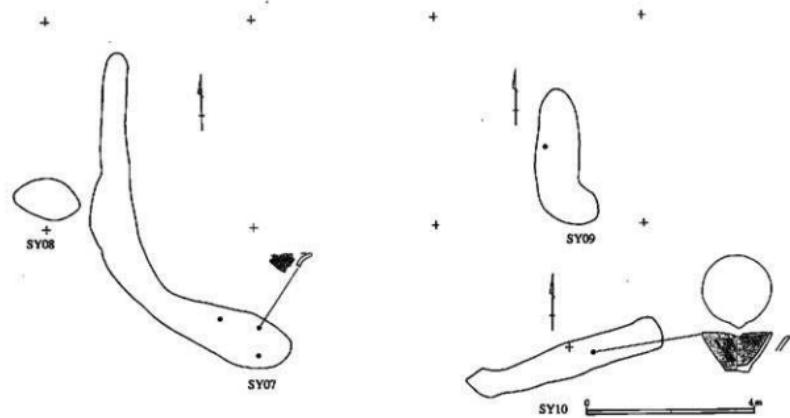


第17図 SY05・06・11出土状況図

図版 第18図

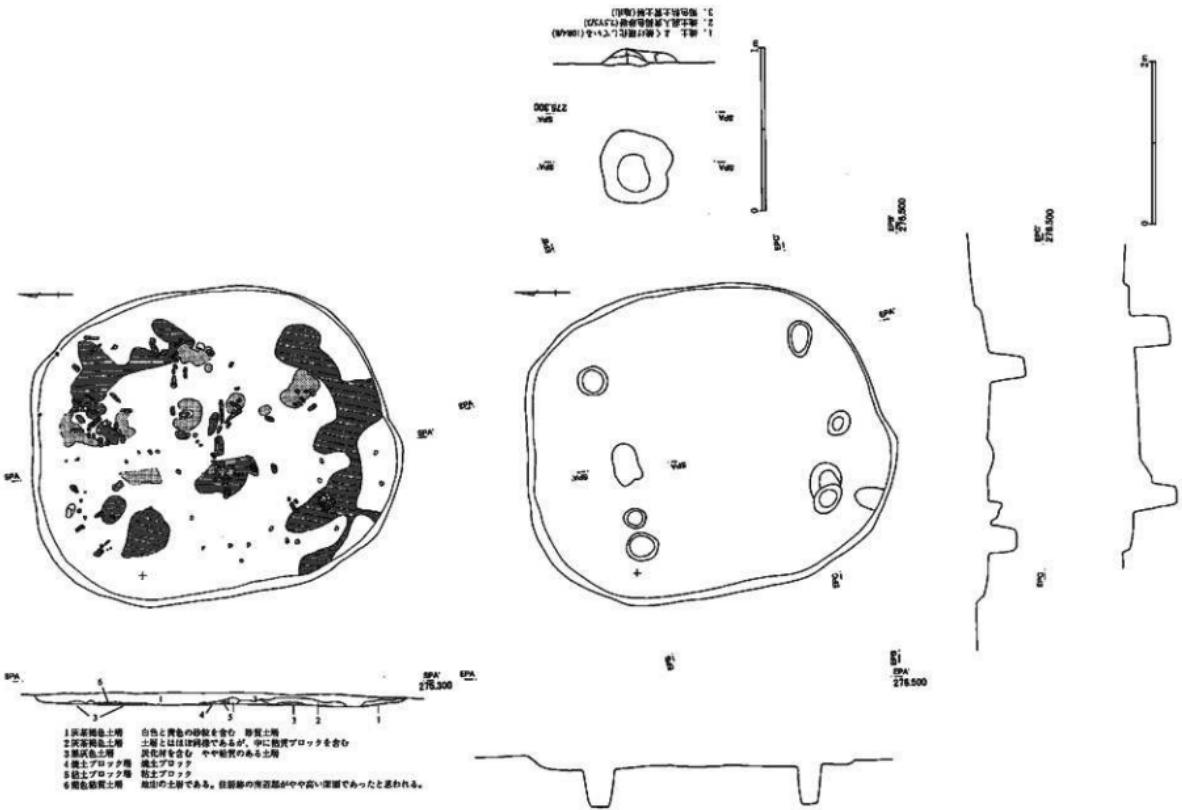


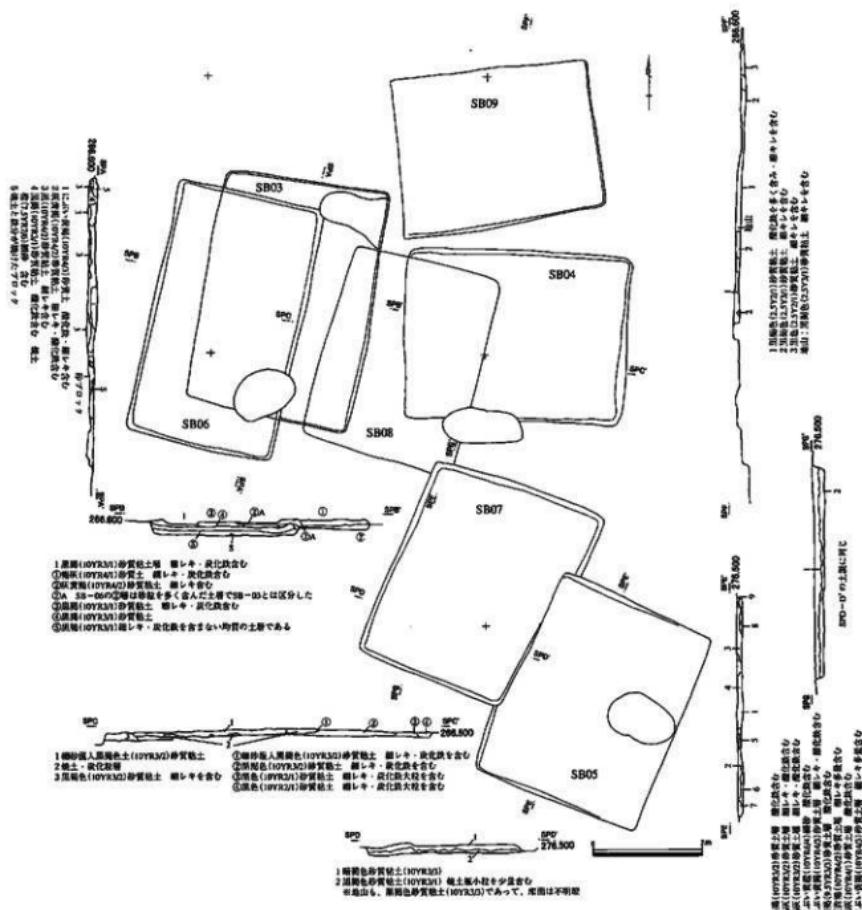
第18図 SY07・08・09・10実測図



第19図 SY07・08・09・10出土状況図

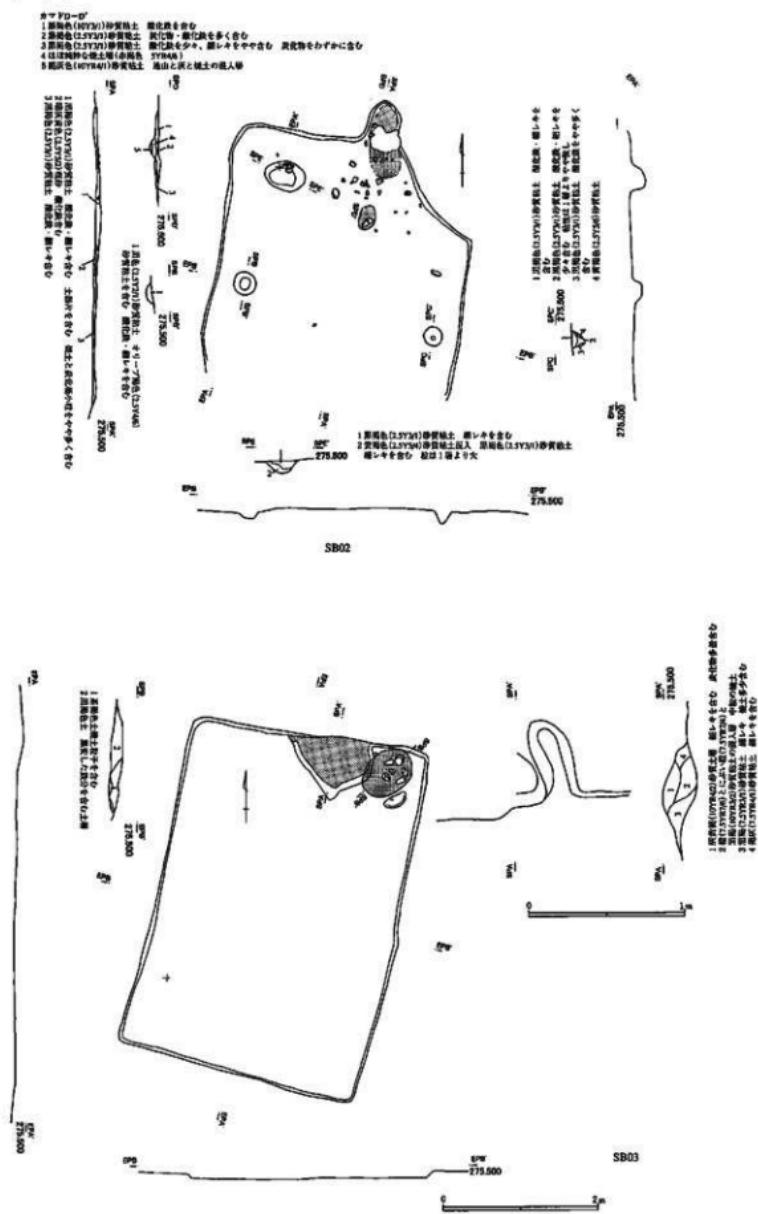
第20図 SB01実測図



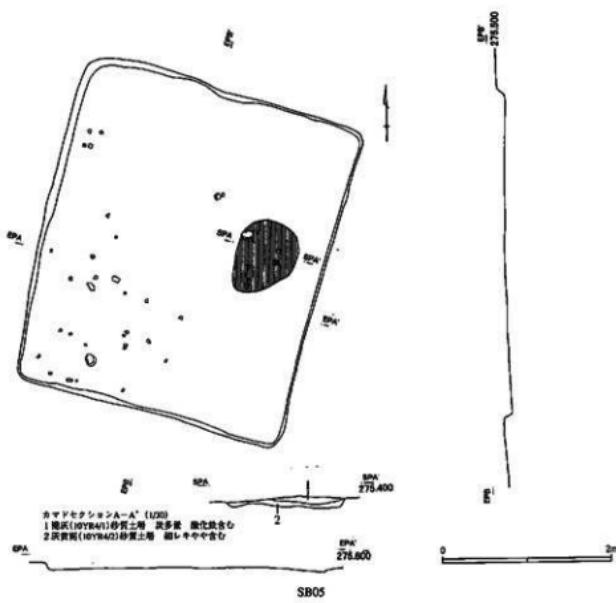
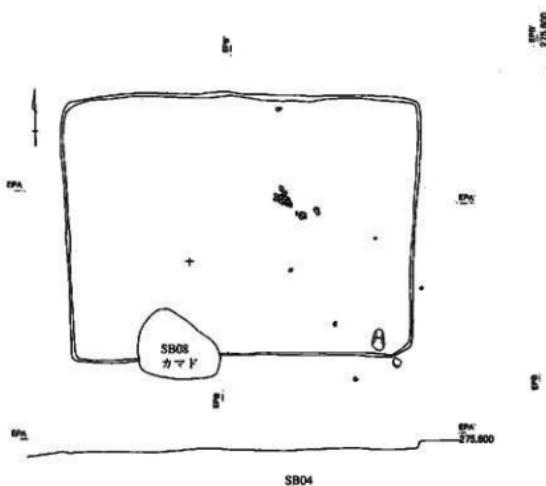


第21図 SB 03～09住居址全体図

図版 第22図

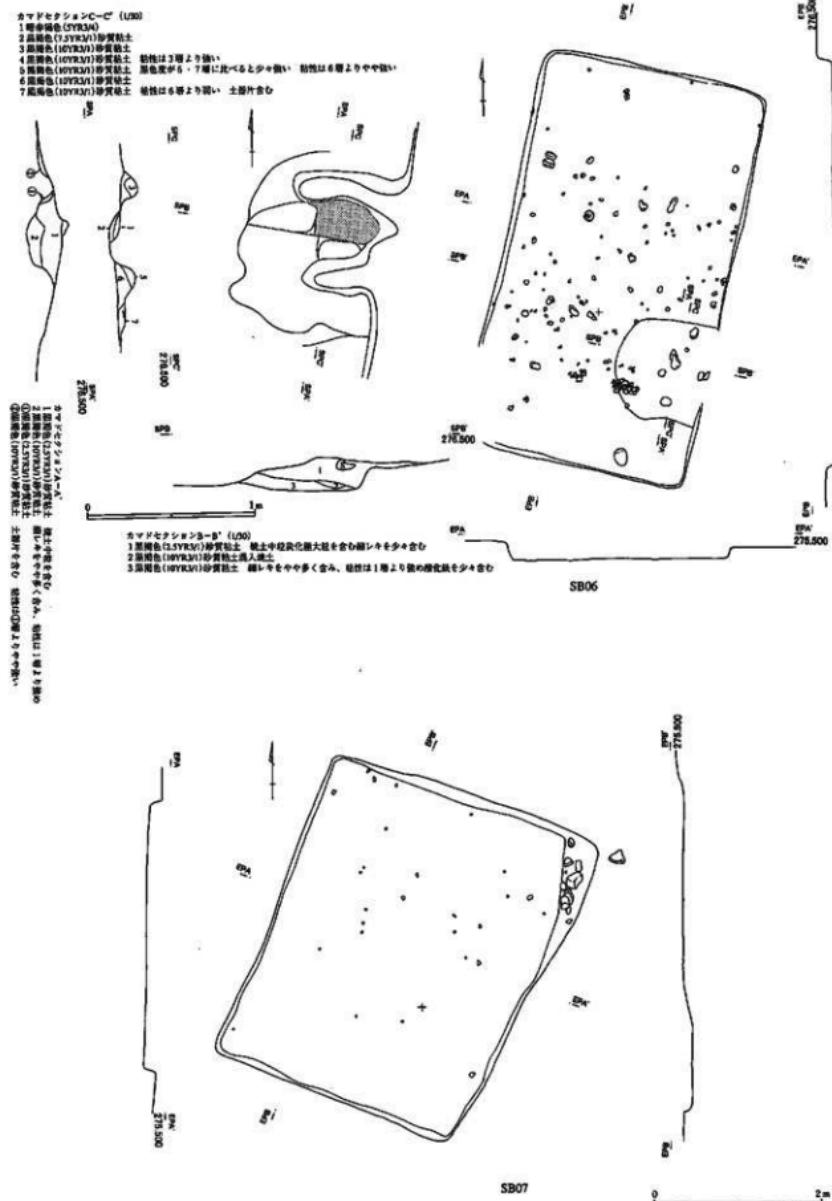


第22図 SB 02・03実測図

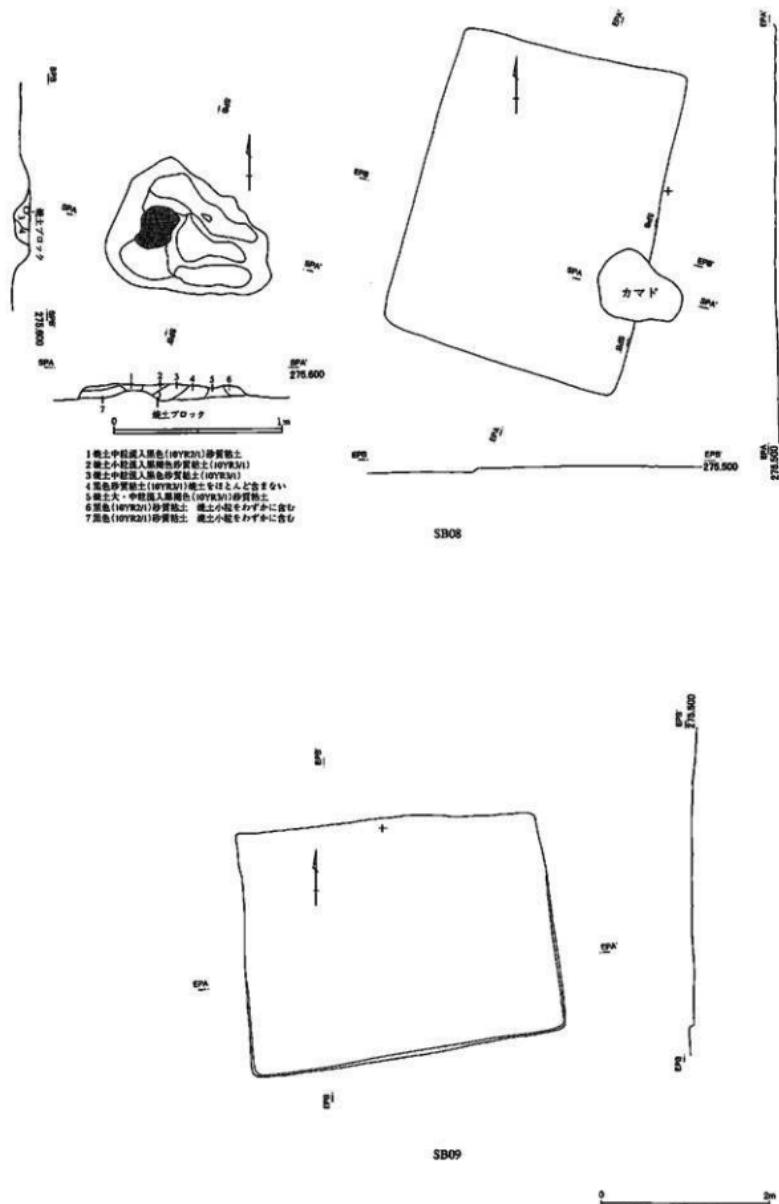


第23図 SB04・05実測図

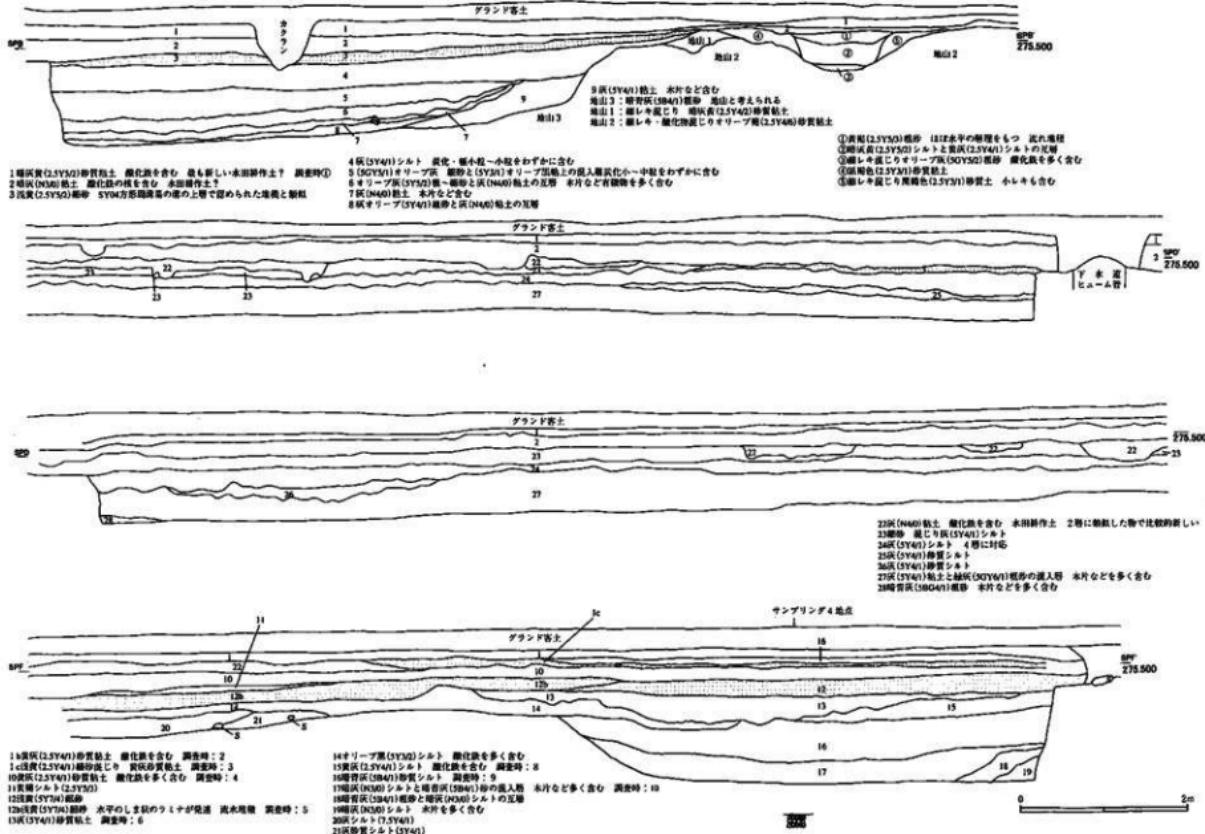
図版 第24図



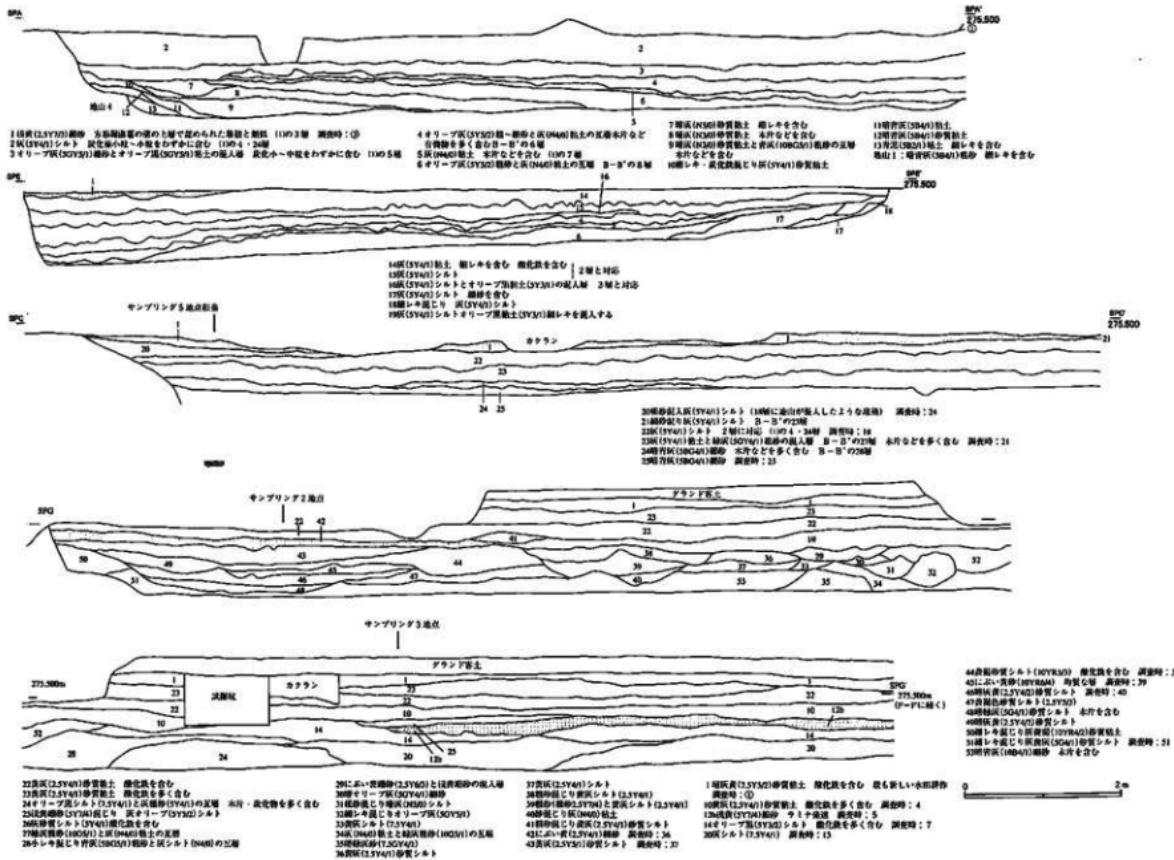
第24図 SB06・07実測図



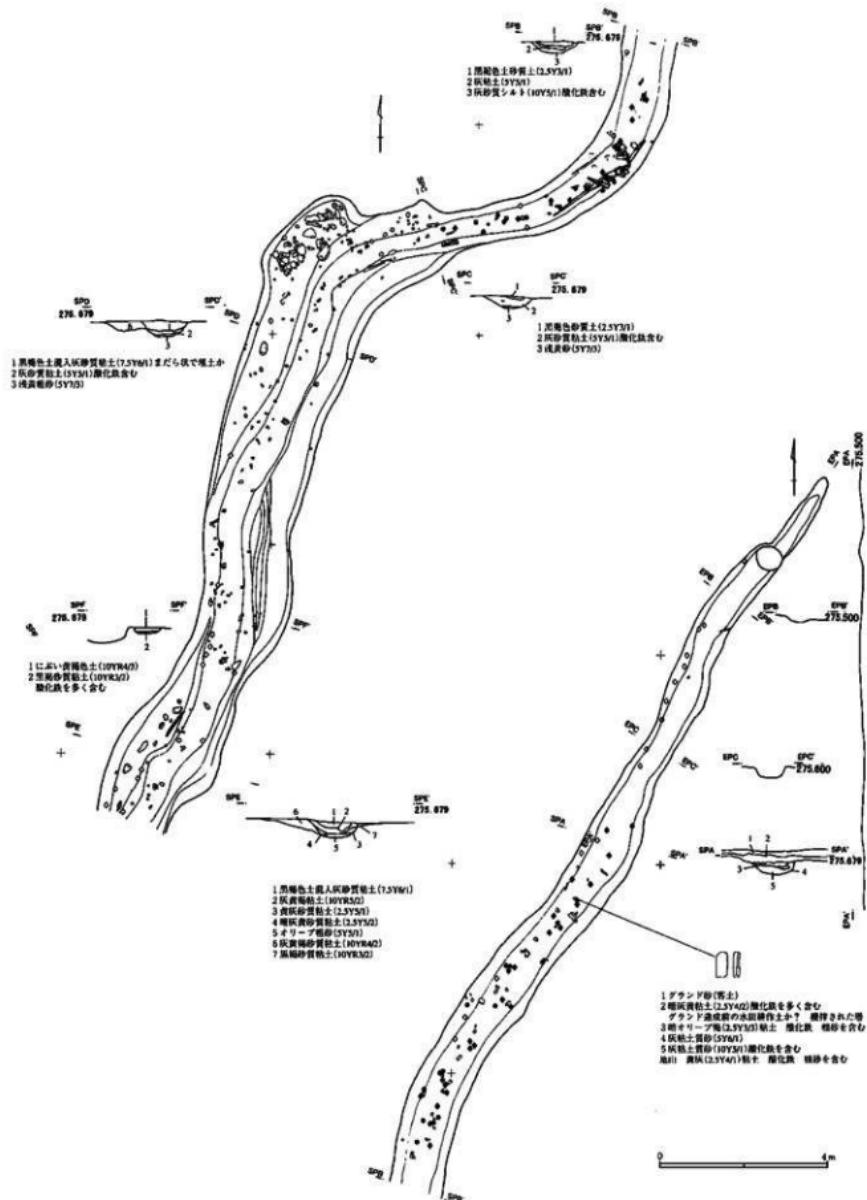
第25図 SB08・09実測図



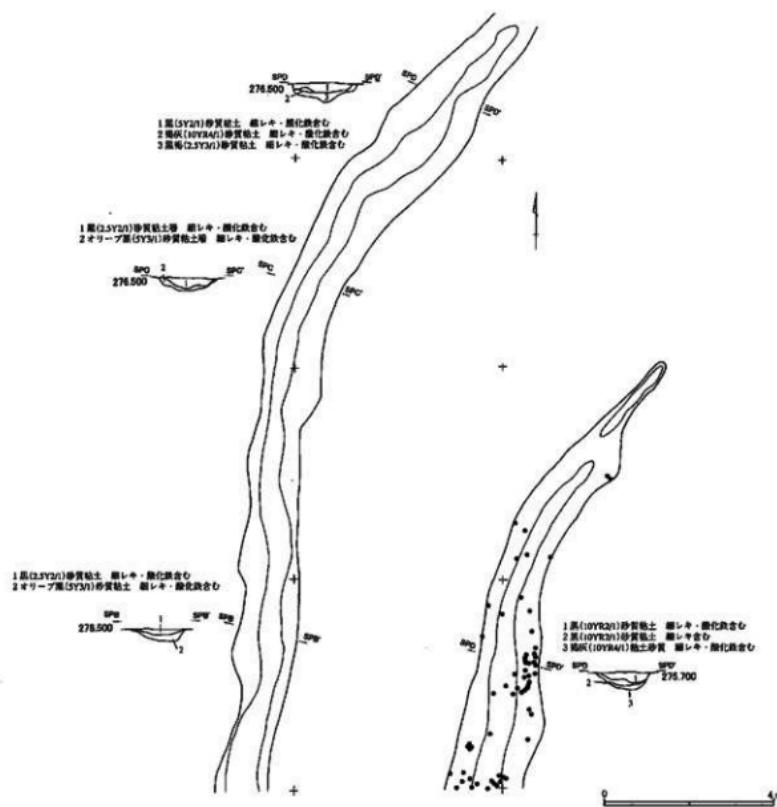
第27図 塩部遺跡セクション図(2)



図版 第28図

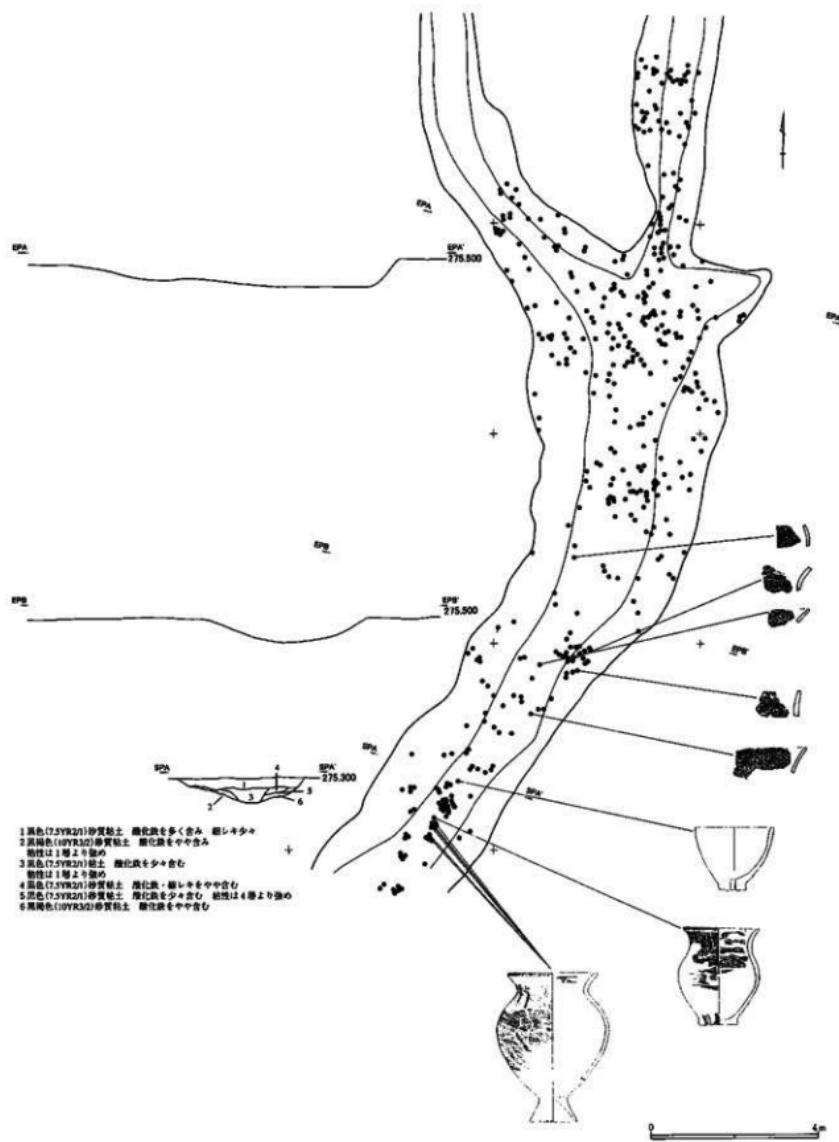


第28図 SD01実測図

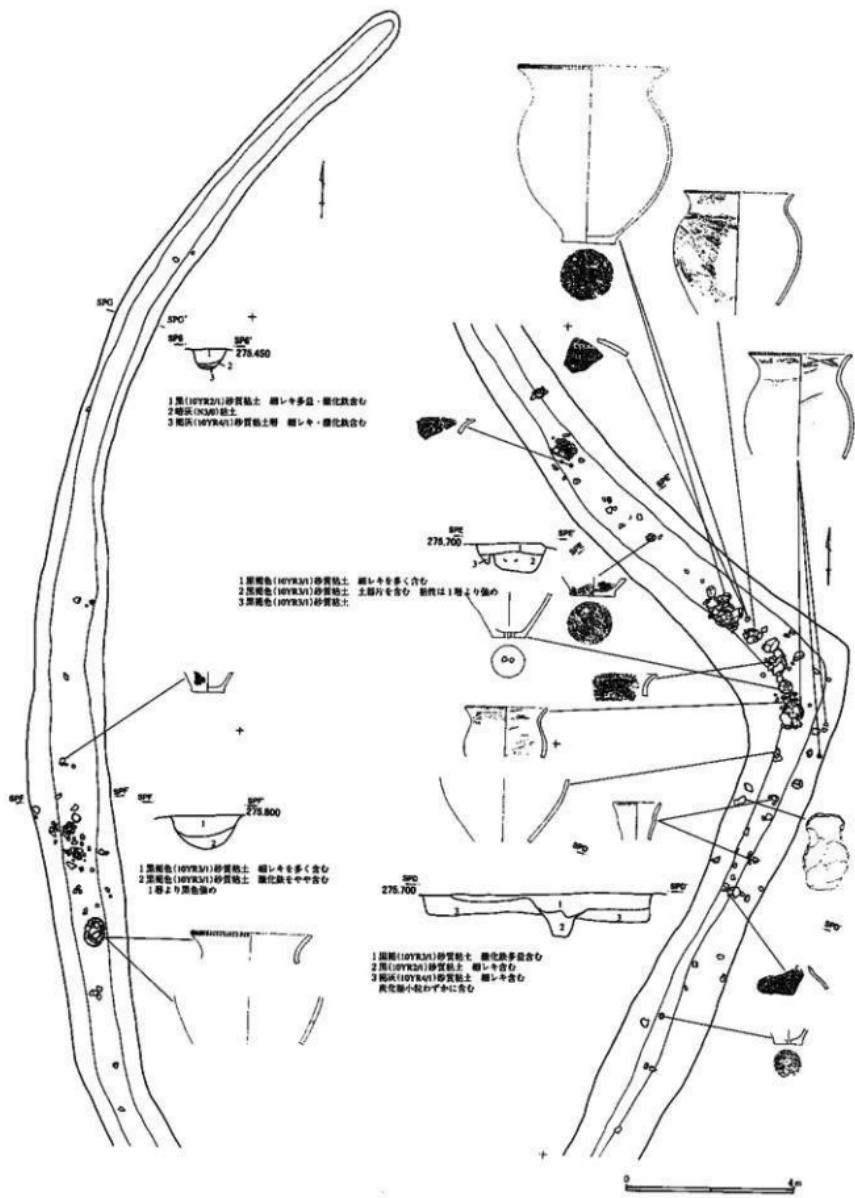


第29図 SD 08・09実測図(1)

図版 第30図

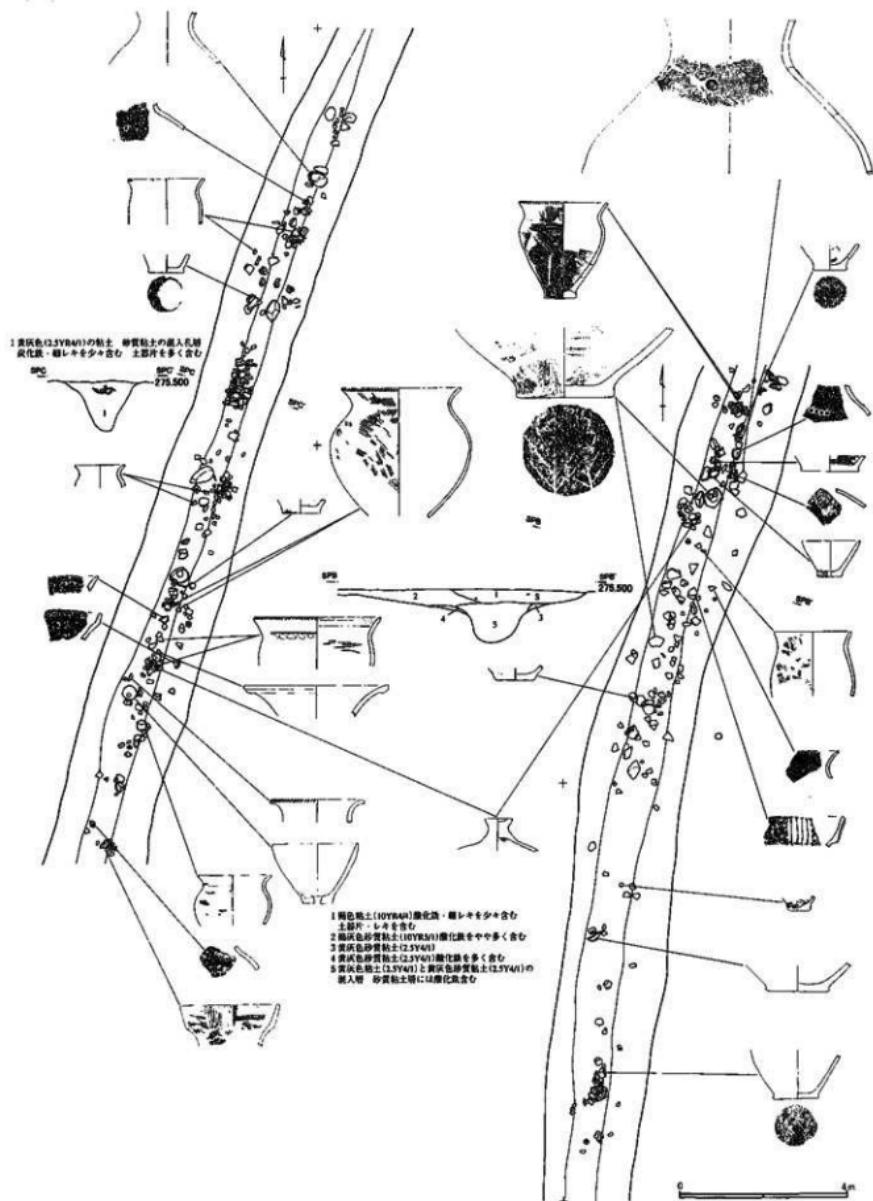


第30図 SD 08・09 出土状況図実測図 (2)

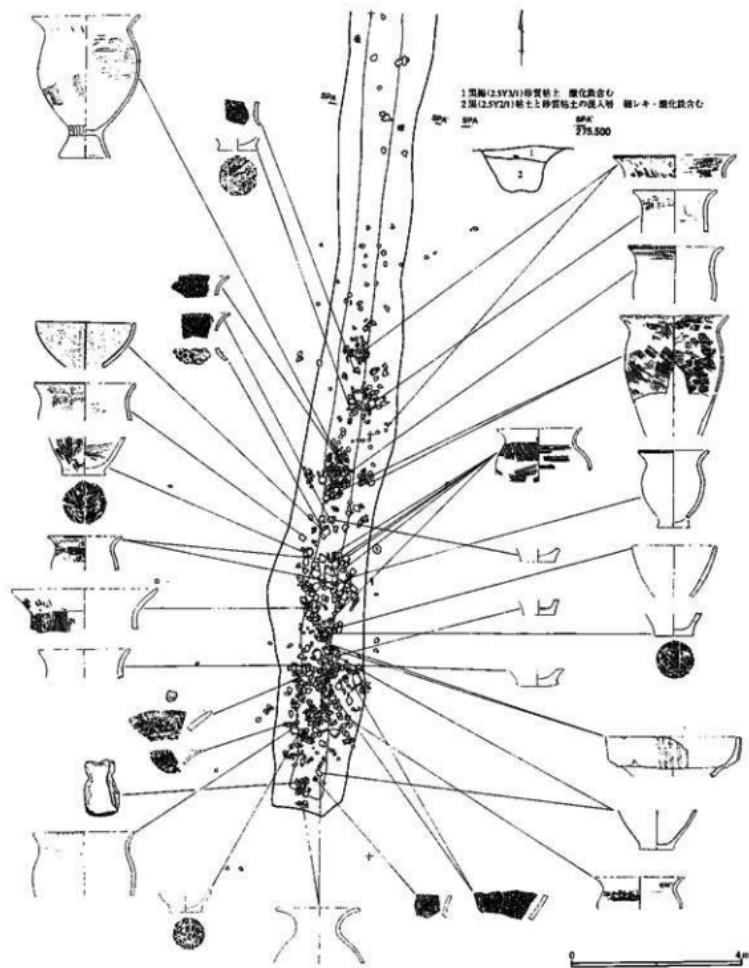


第31図 SD 07 実測図・出土状況図 (1)

図版 第32図

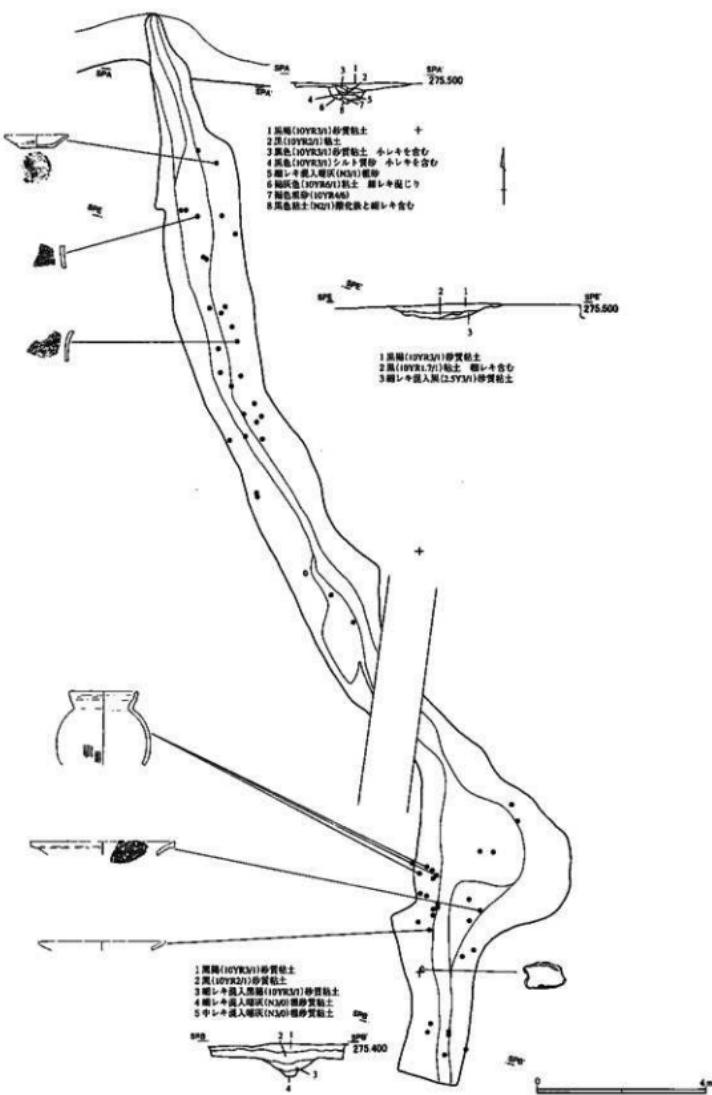


第32図 SD 07実測図・出土状況図 (2)

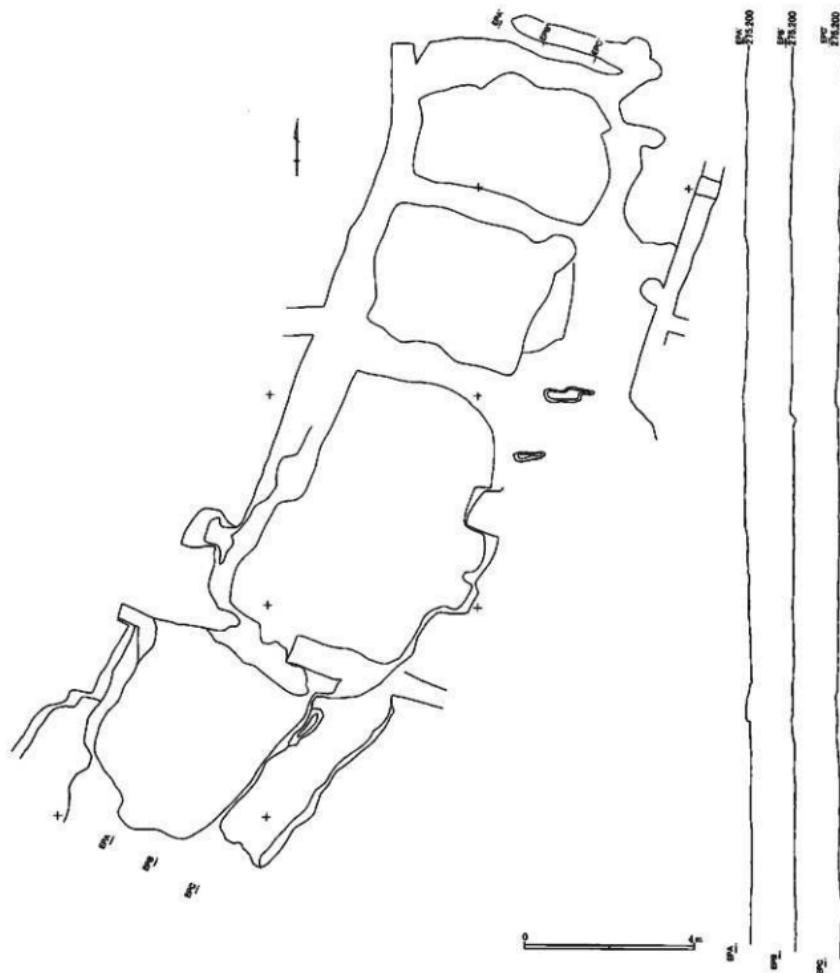


第33図 SD 07実測図・出土状況図（3）

図版 第34図

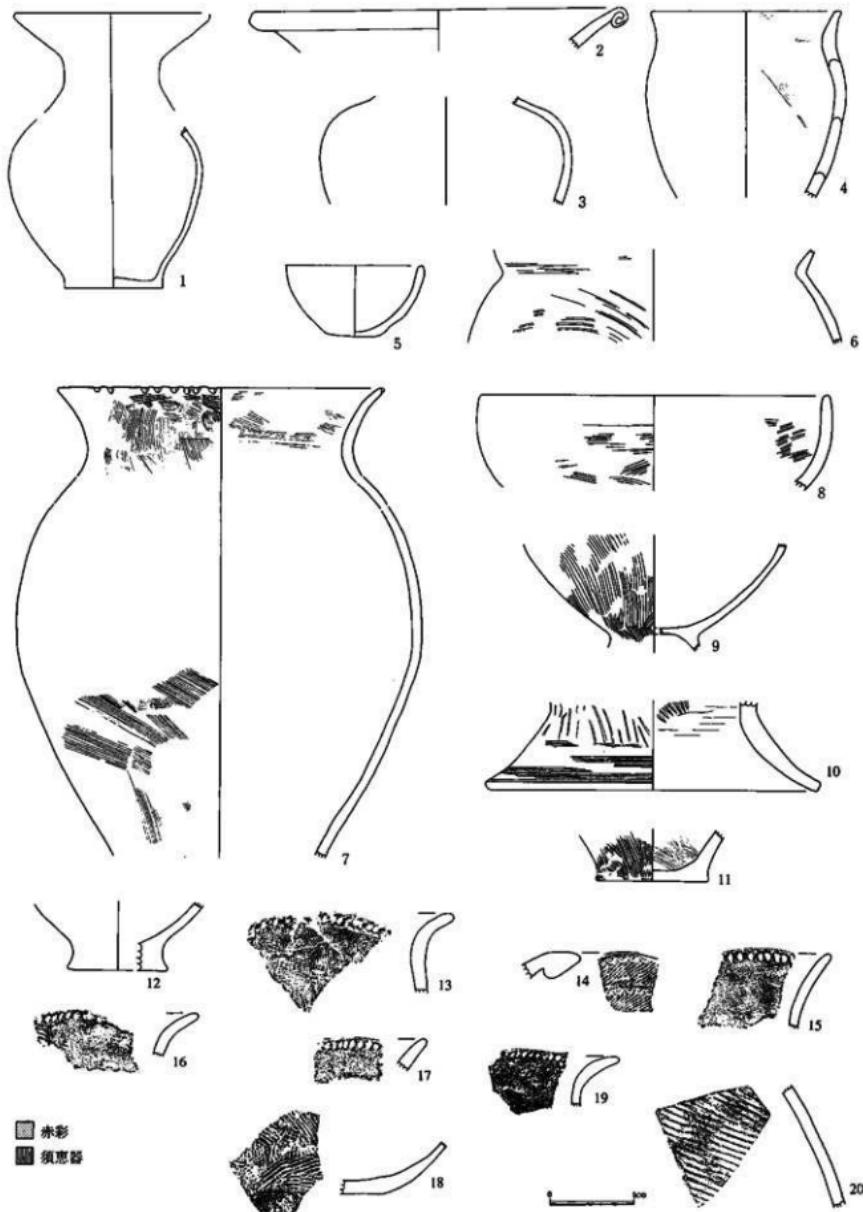


第34図 SD 16 実測図・出土状況図

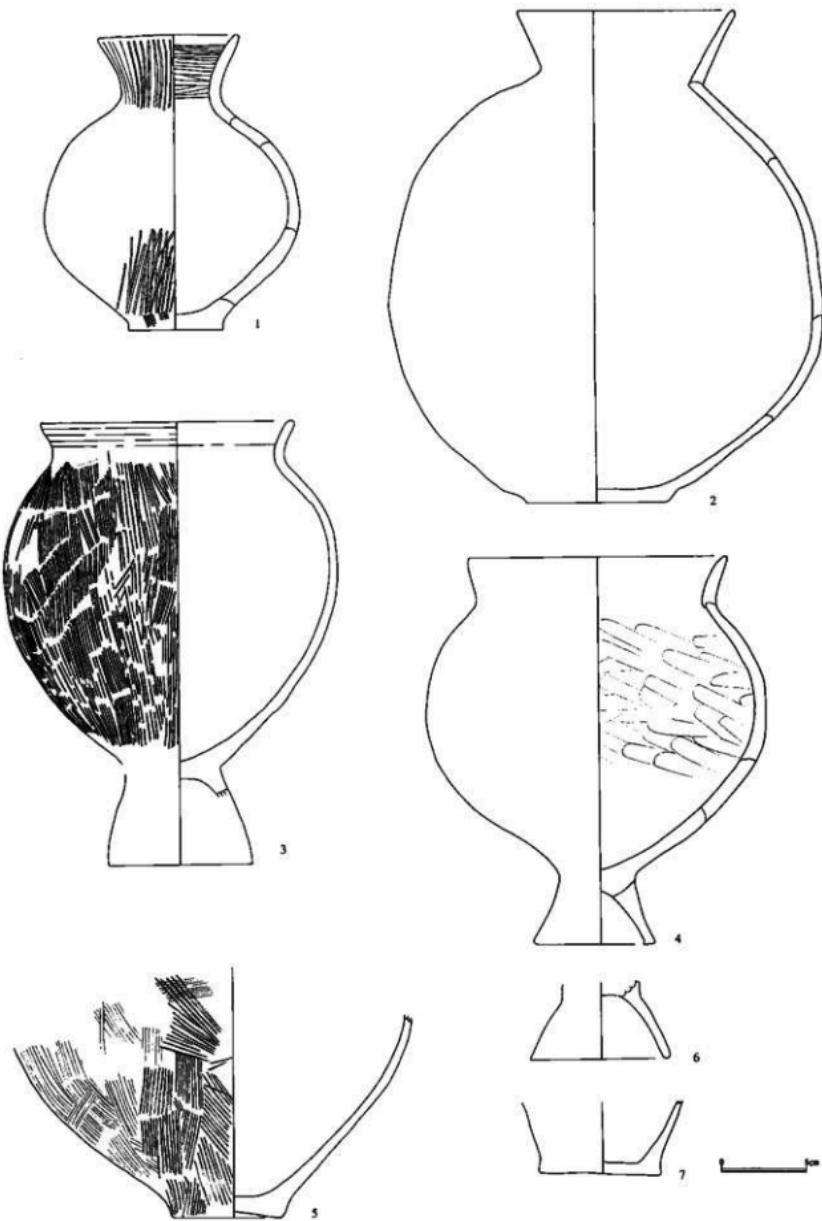


第35図 水田跡平面図

図版 第36図

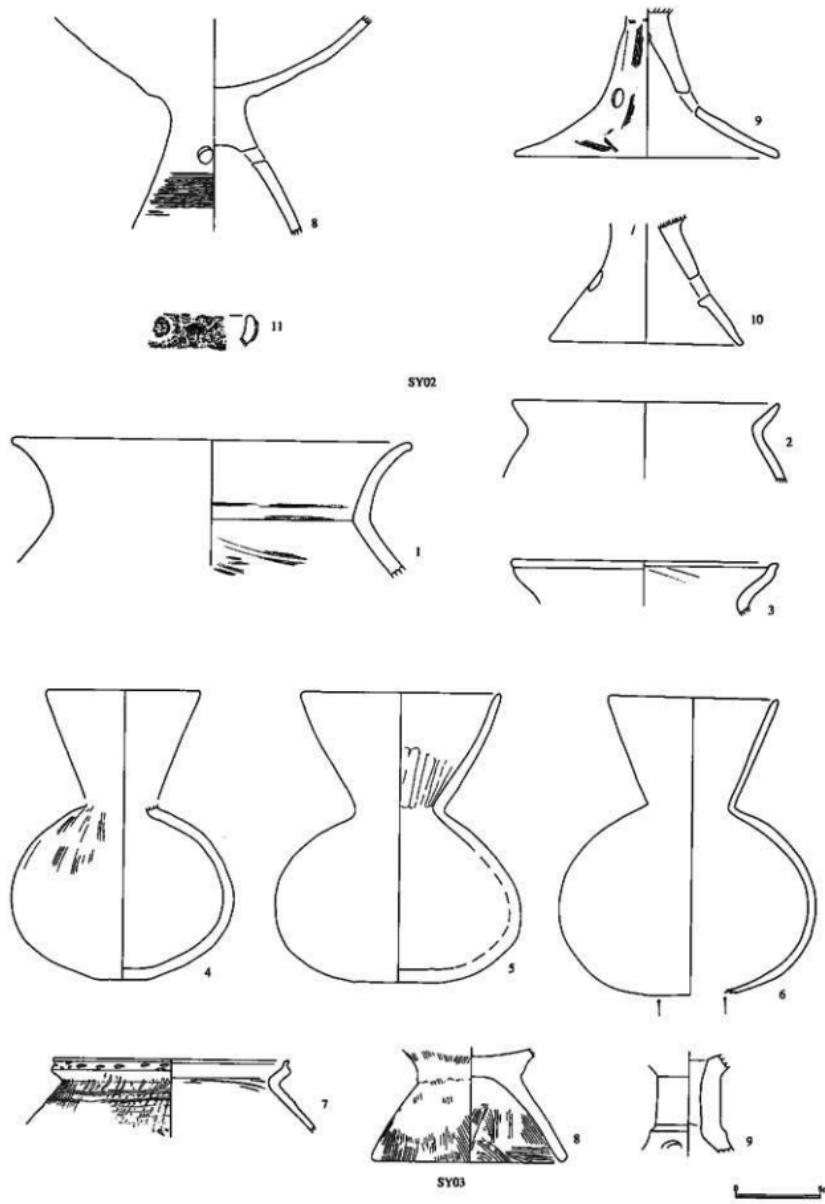


第36図 SY01 出土土器実測図

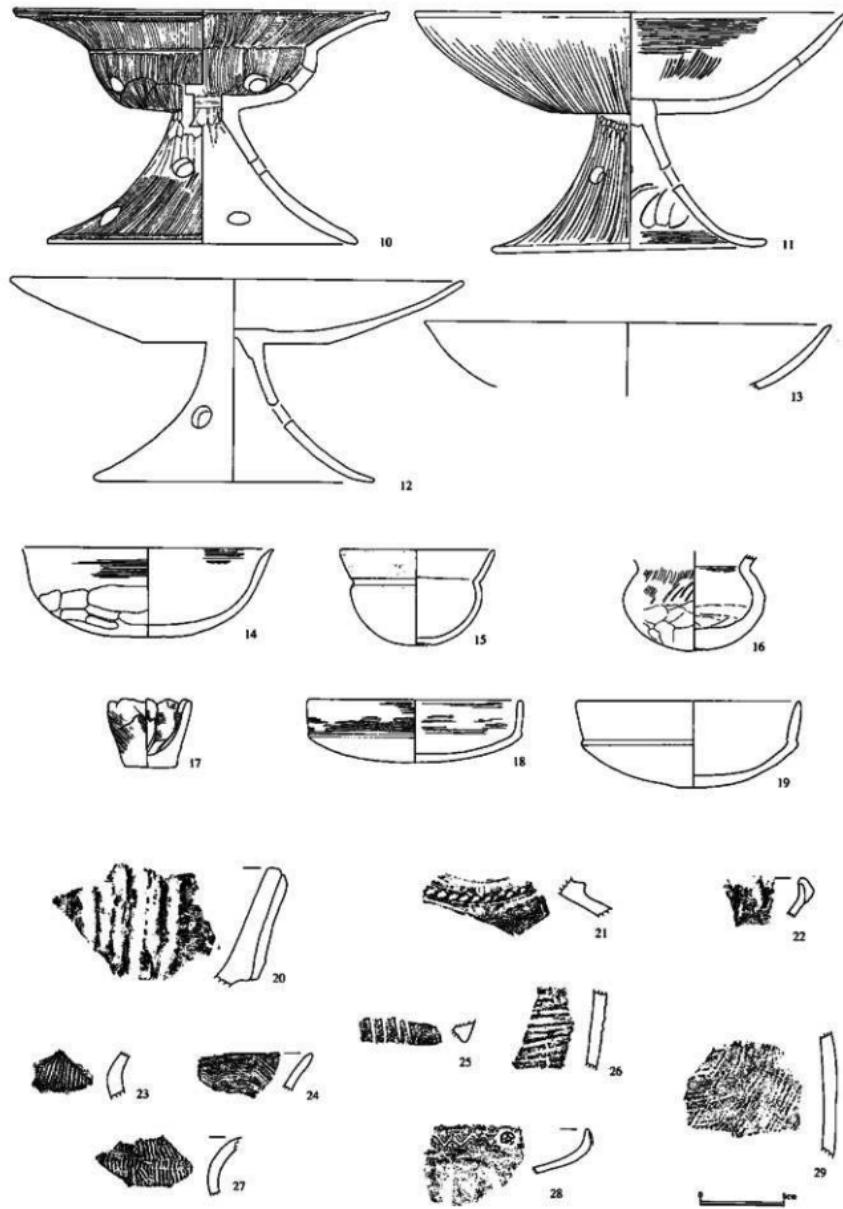


第37図 SYO2 出土土器実測図

圖版 第38圖

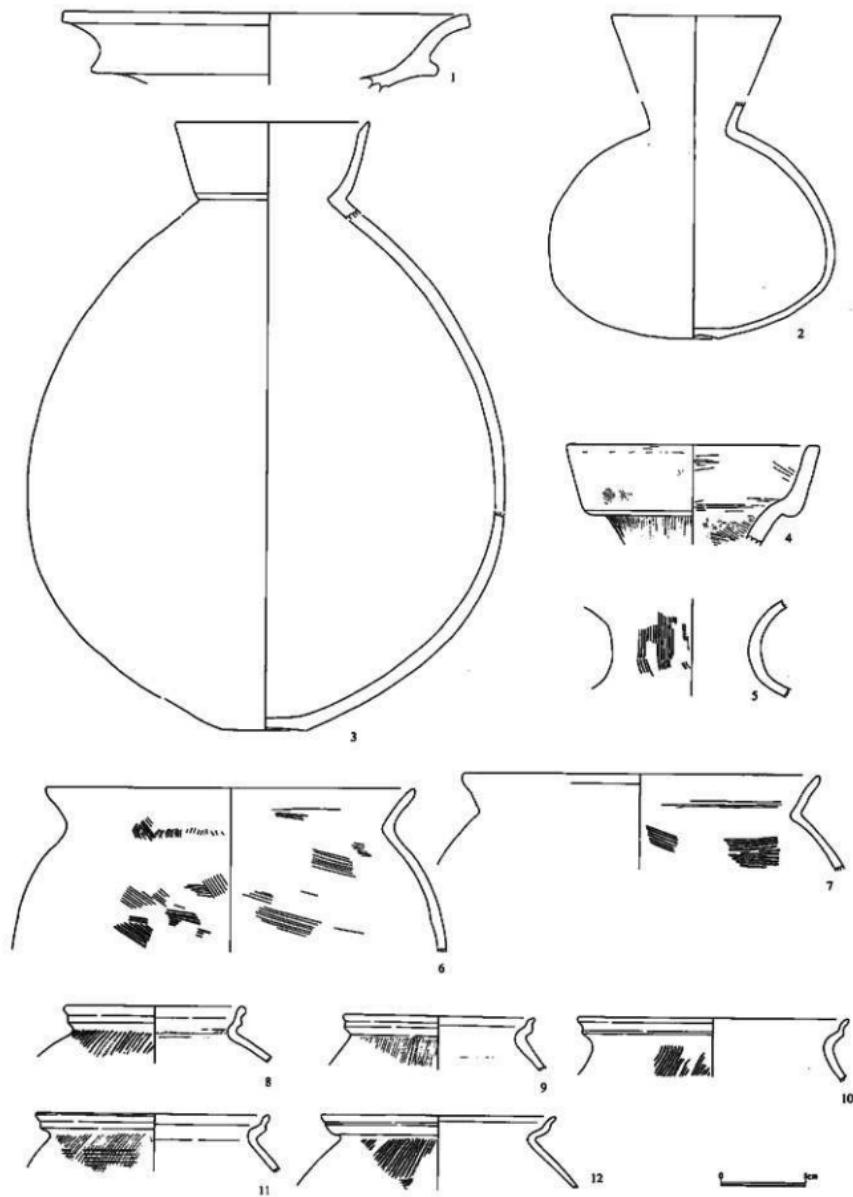


第38圖 SY02・03 出土土器実測図



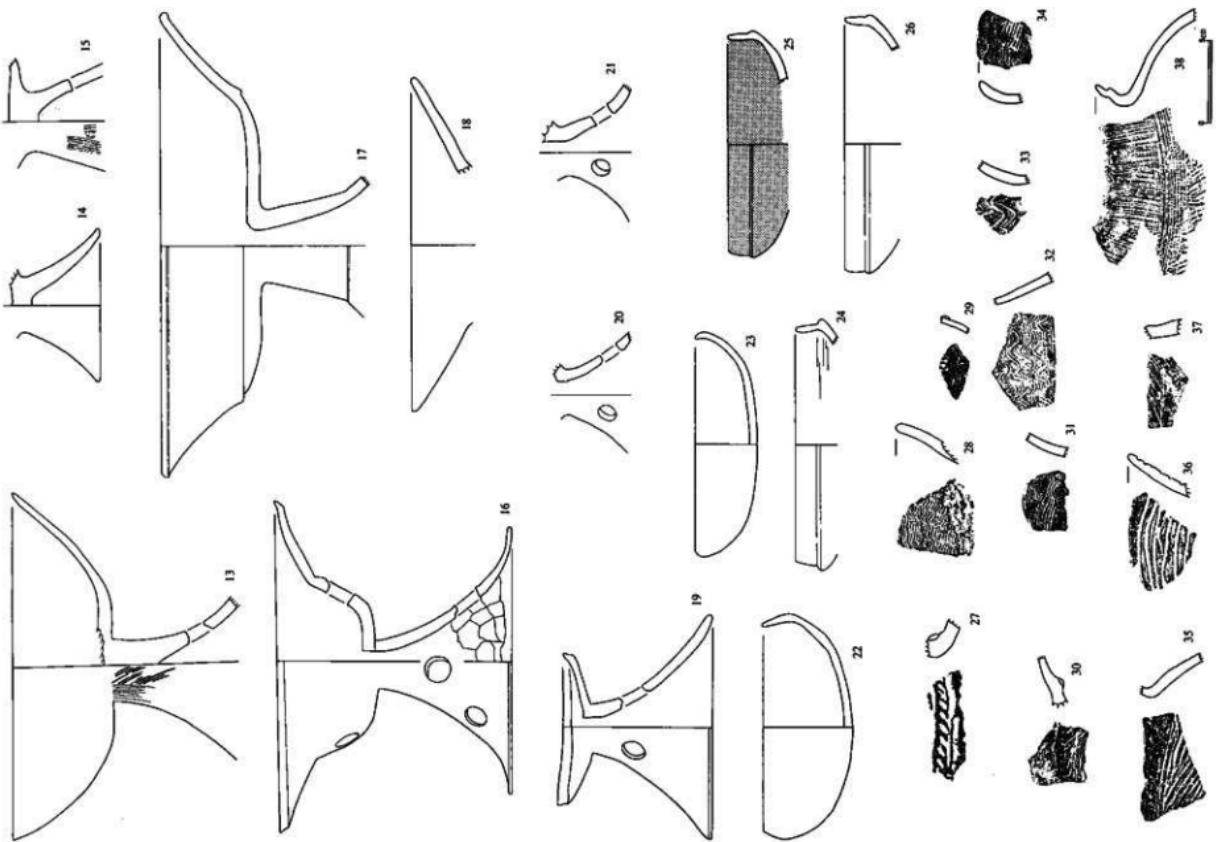
第39図 SY03 出土土器実測図

図版 第40図



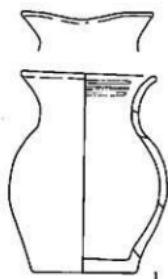
第40図 SYO4 出土土器実測図(1)

圖版 第41圖

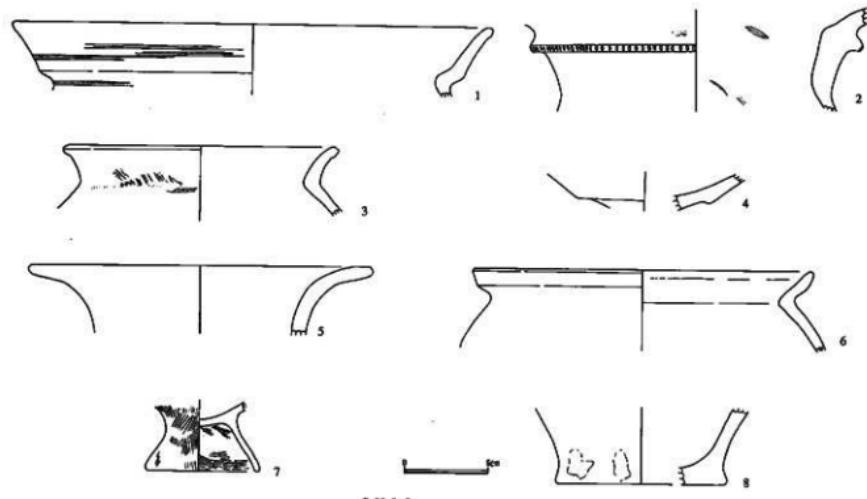


第41圖 SY04 出土器物形制圖(2)

圖版 第42圖

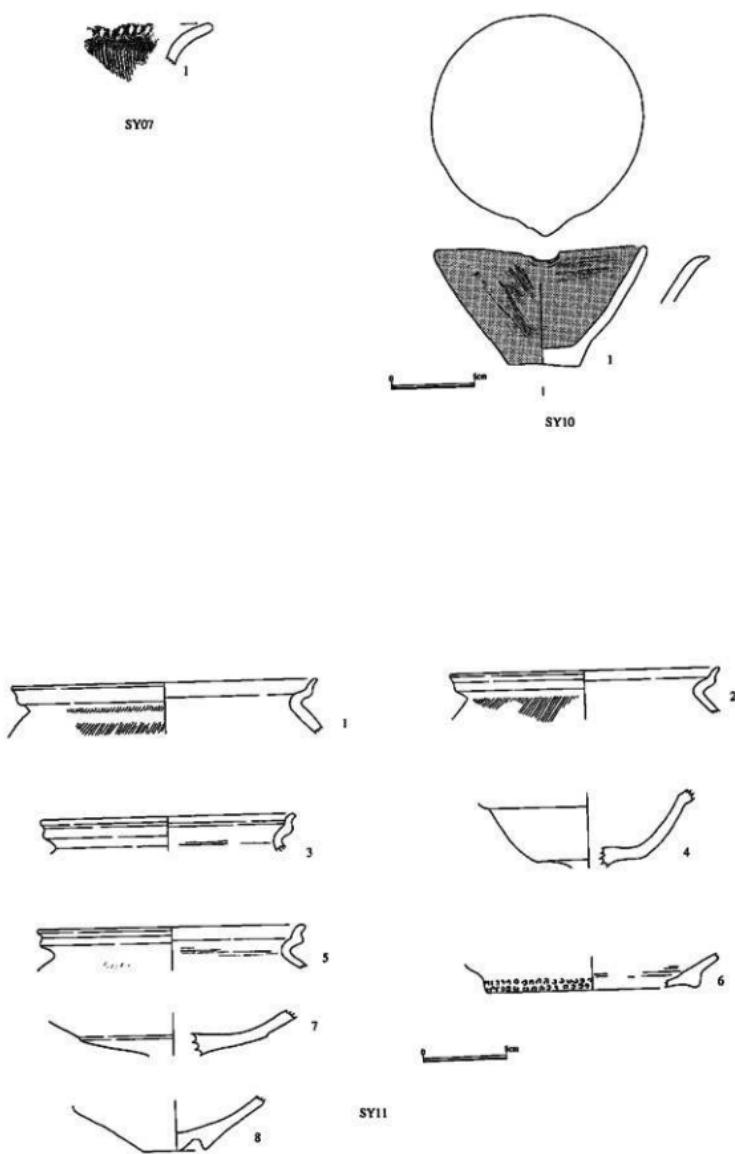


SY05



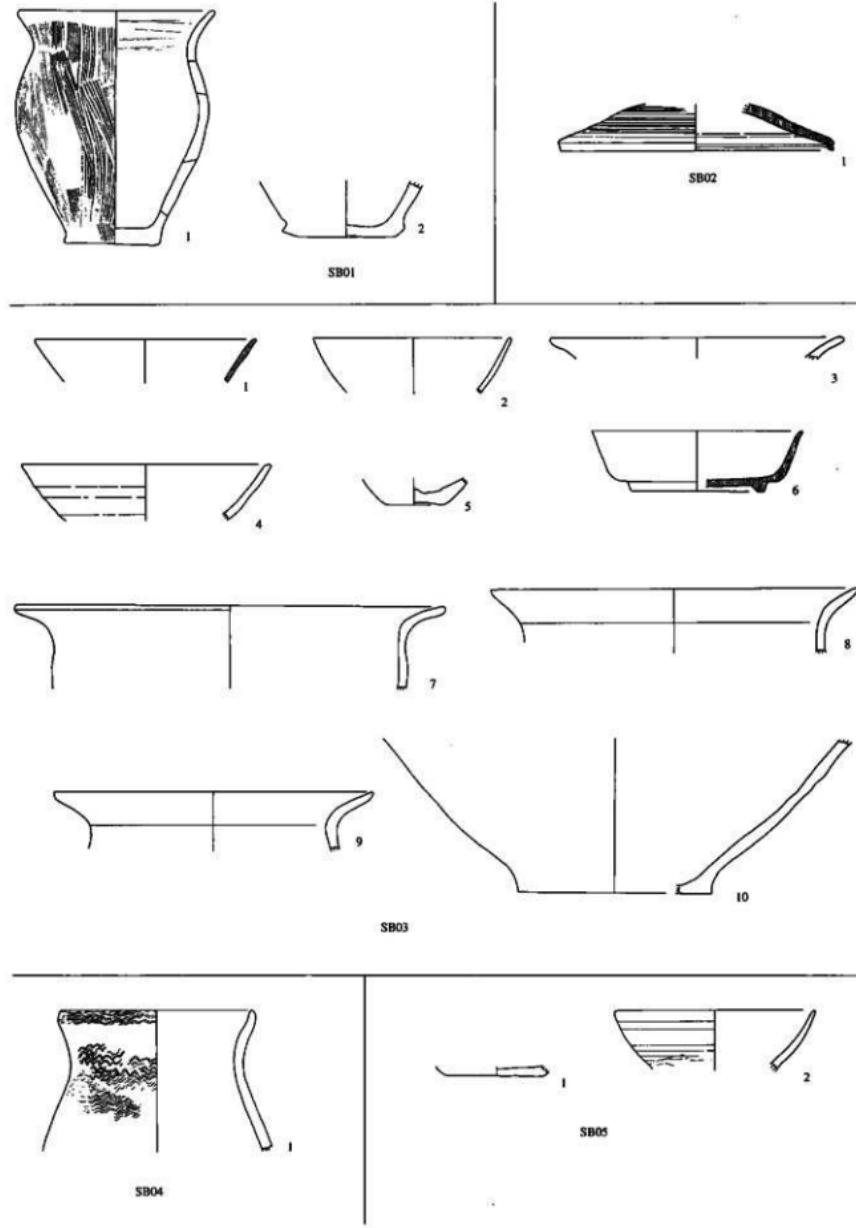
SY06

第42圖 SY05・06 出土土器実測図



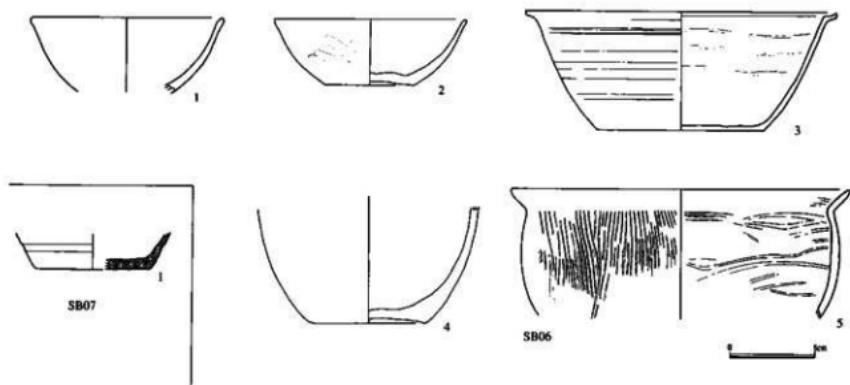
第43図 SY07・10・11 出土土器実測図

図版 第44図

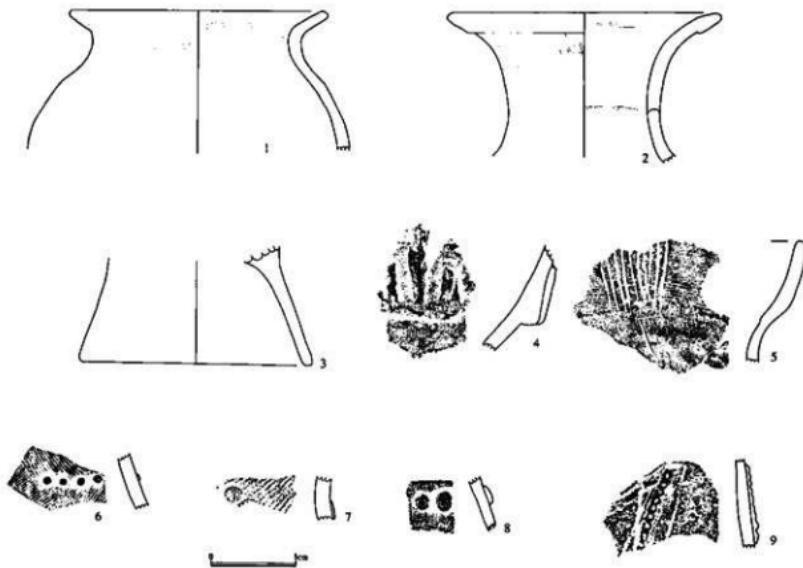


第44図 SB01・02・03・04・05 出土土器実測図

図版 第45図 第46図

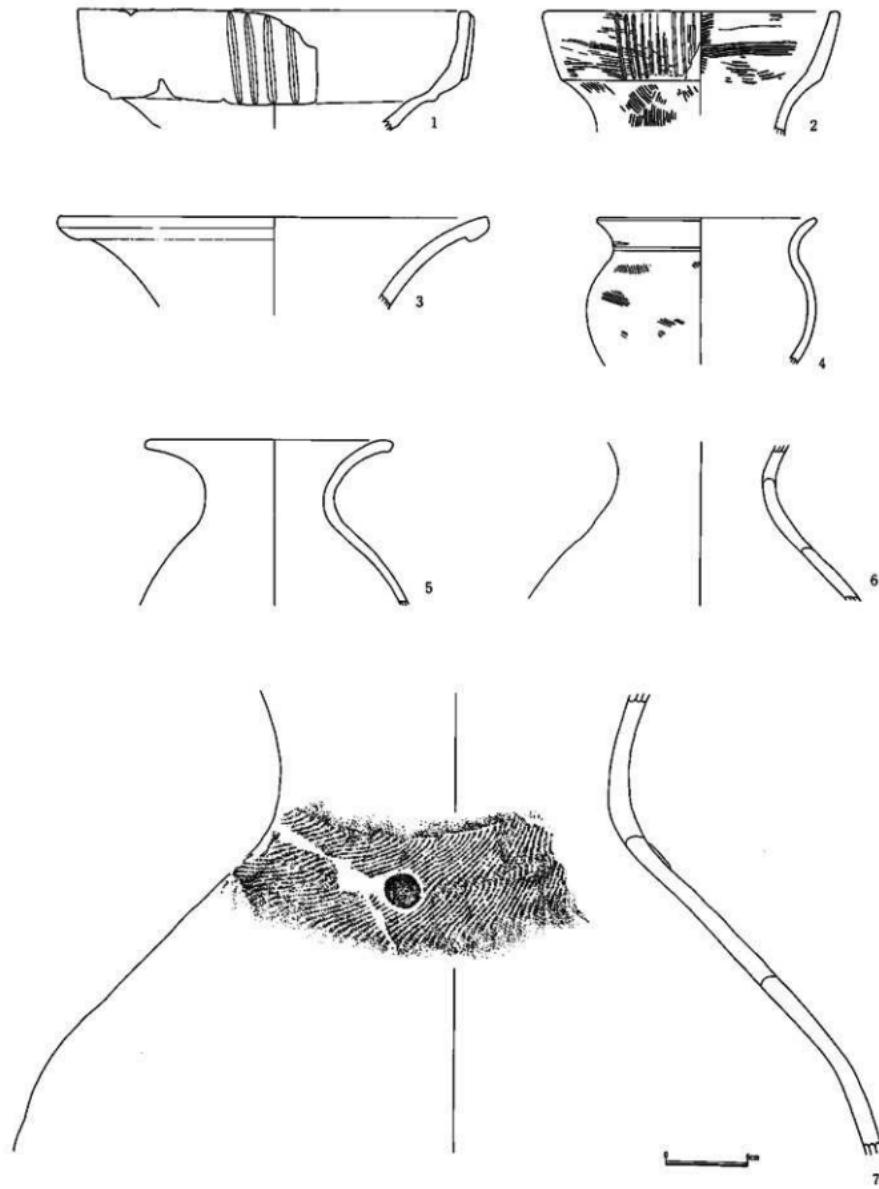


第45図 SB06・07 出土土器実測図

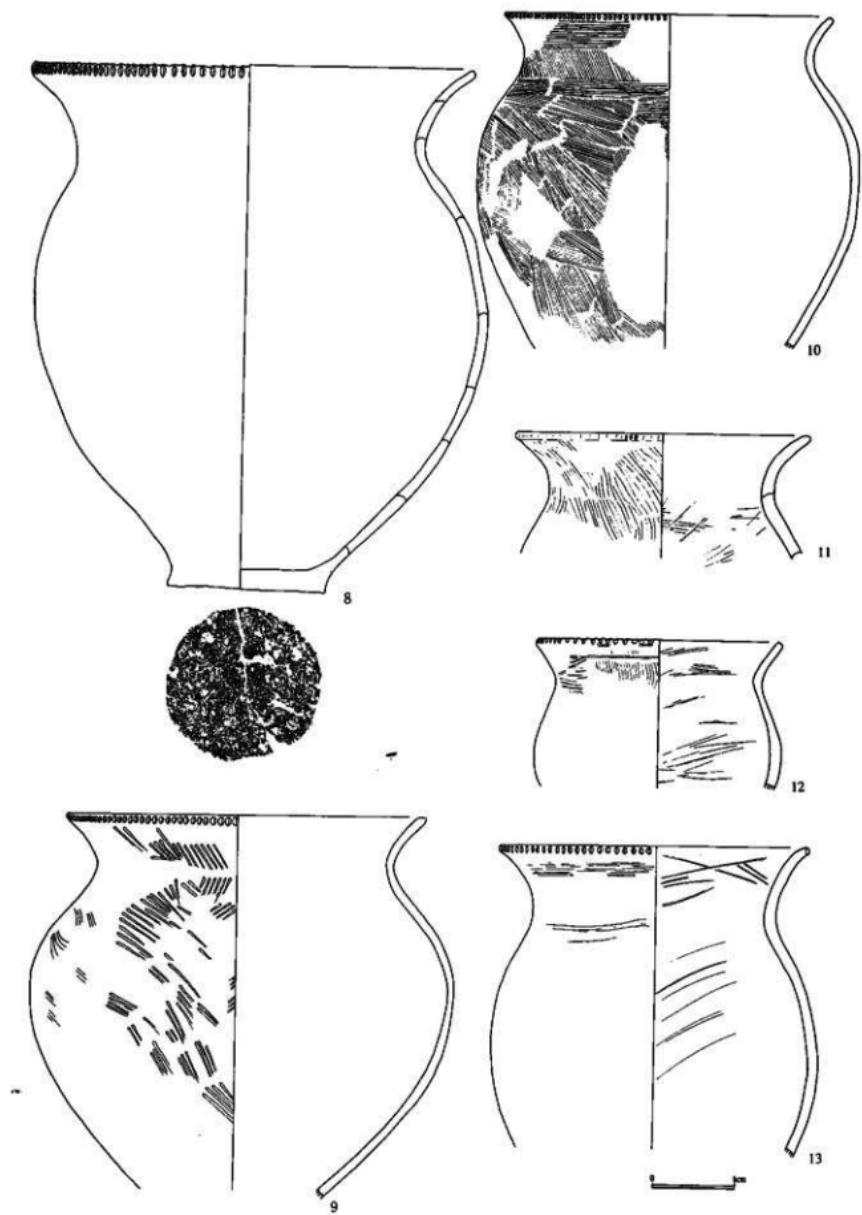


第46図 確認面出土土器実測図

圖版 第47圖

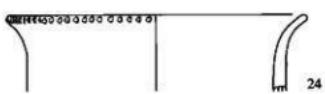
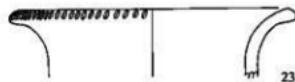
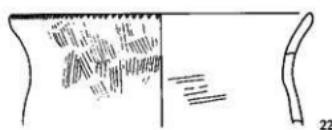
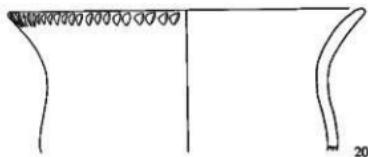
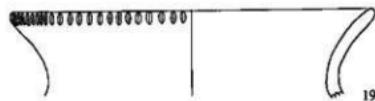
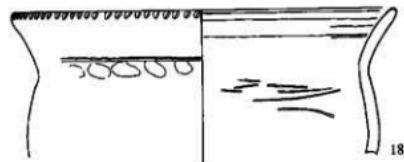
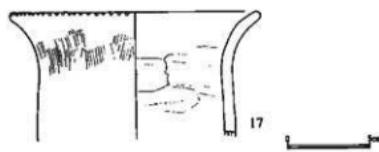
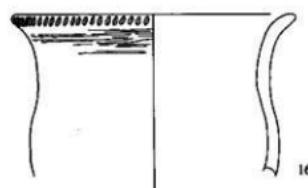
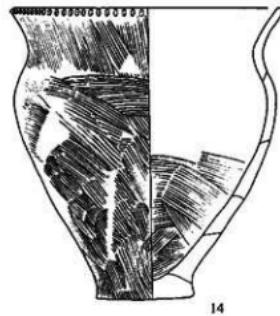


第47圖 SD07 出土土器実測図(1)

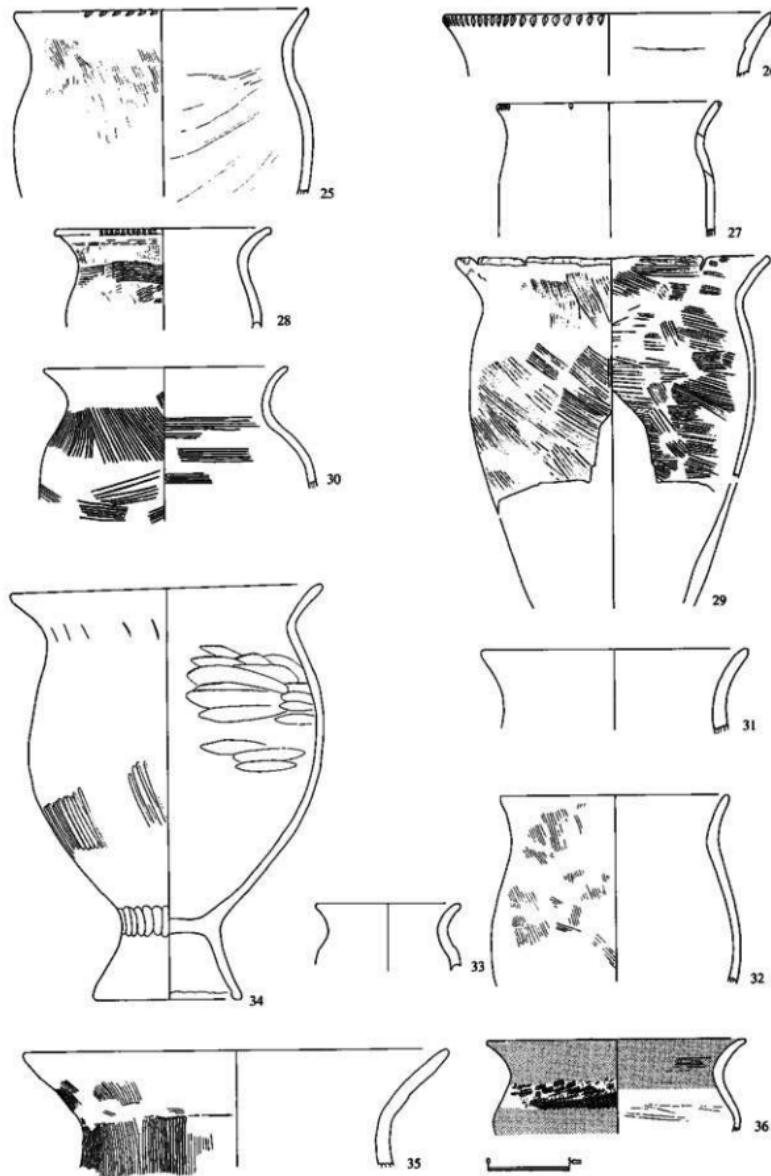


第48図 SD07 出土土器実測図(2)

図版 第49図

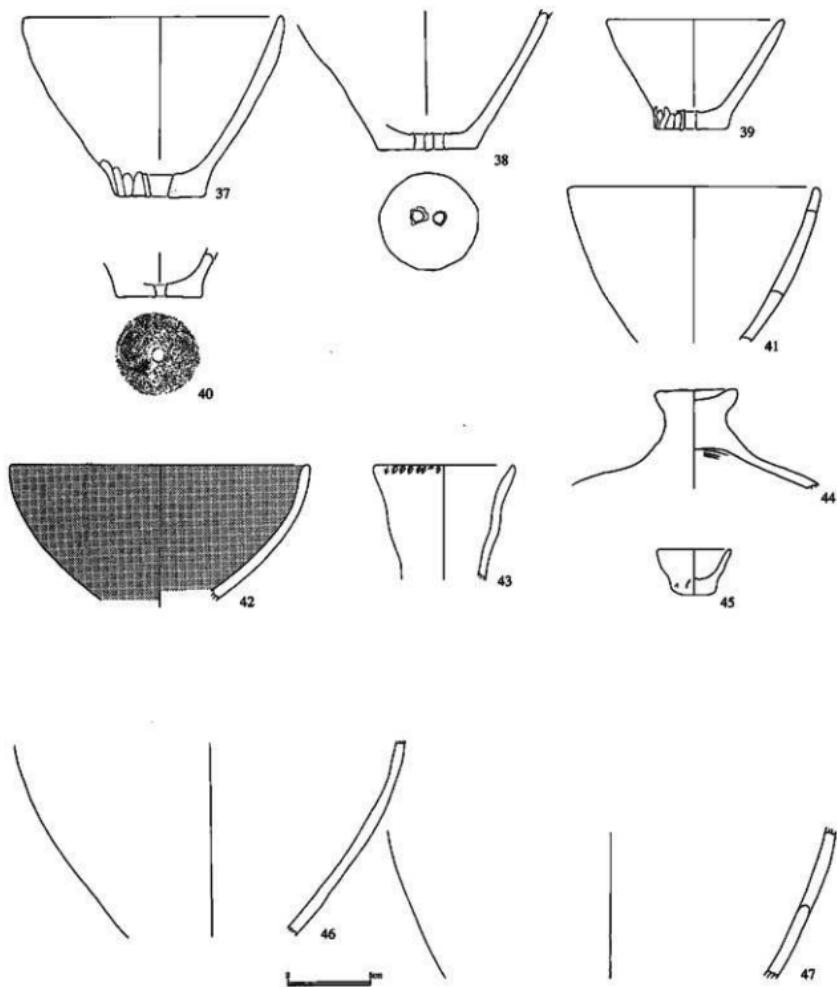


第49図 SD07 出土土器実測図(3)

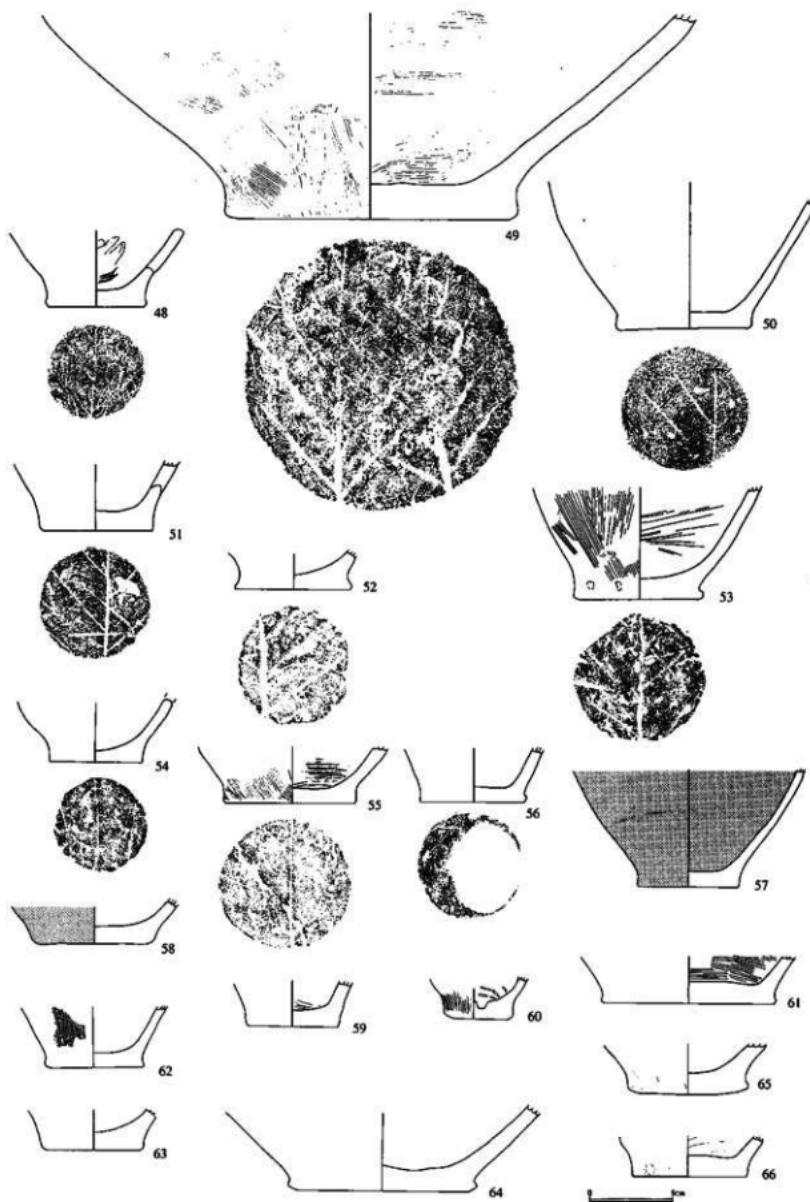


第50図 SD07 出土土器実測図(4)

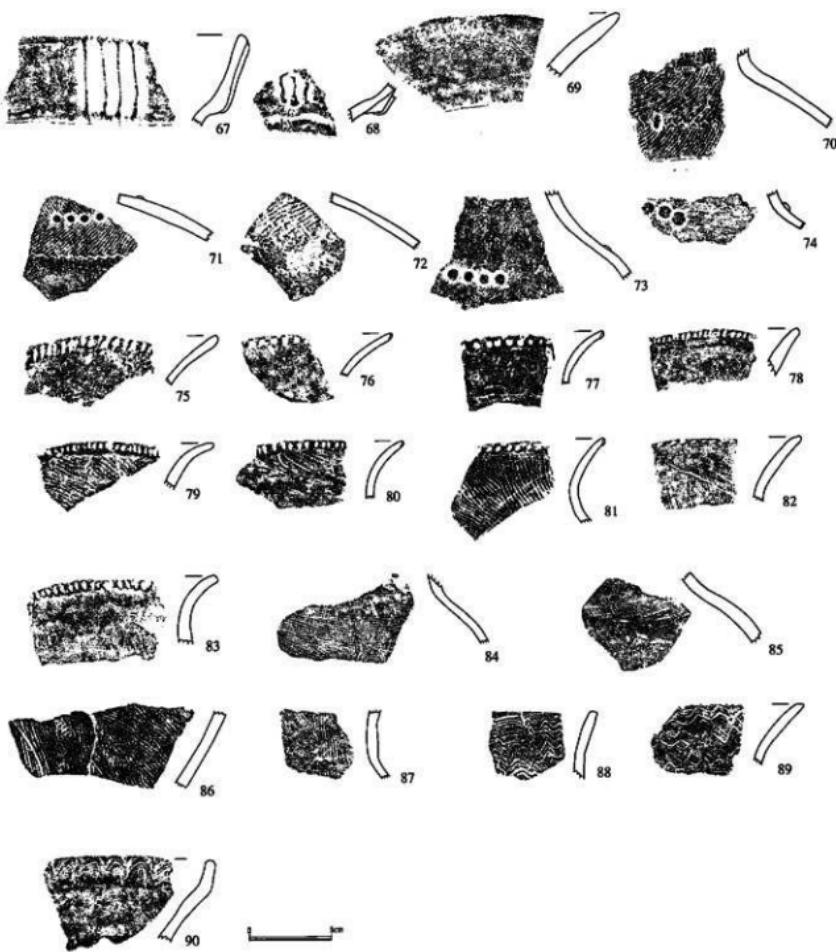
圖版 第51圖



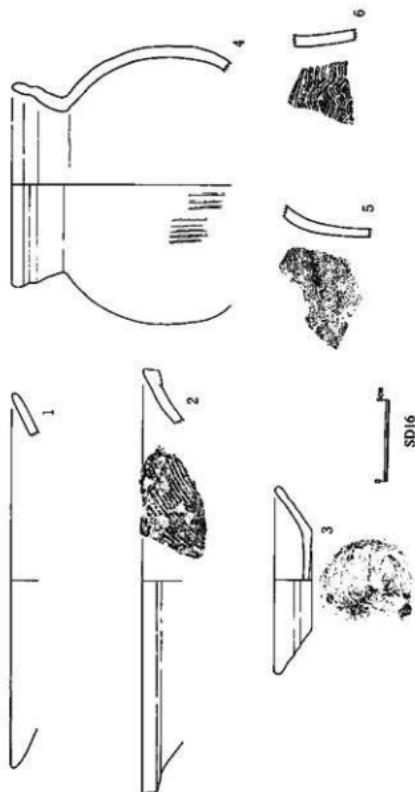
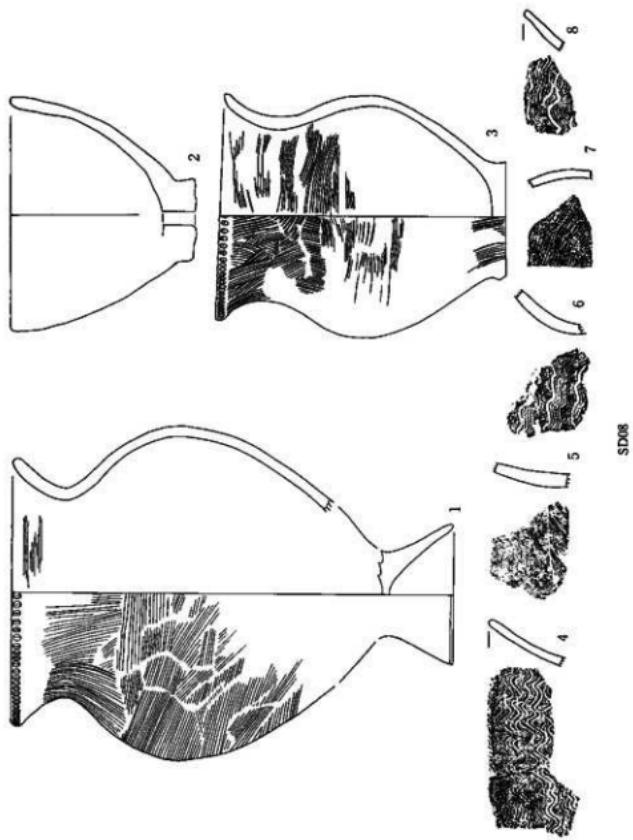
第51圖 SD07 出土土器実測図(5)



第52図 SD07 出土土器実測図(6)

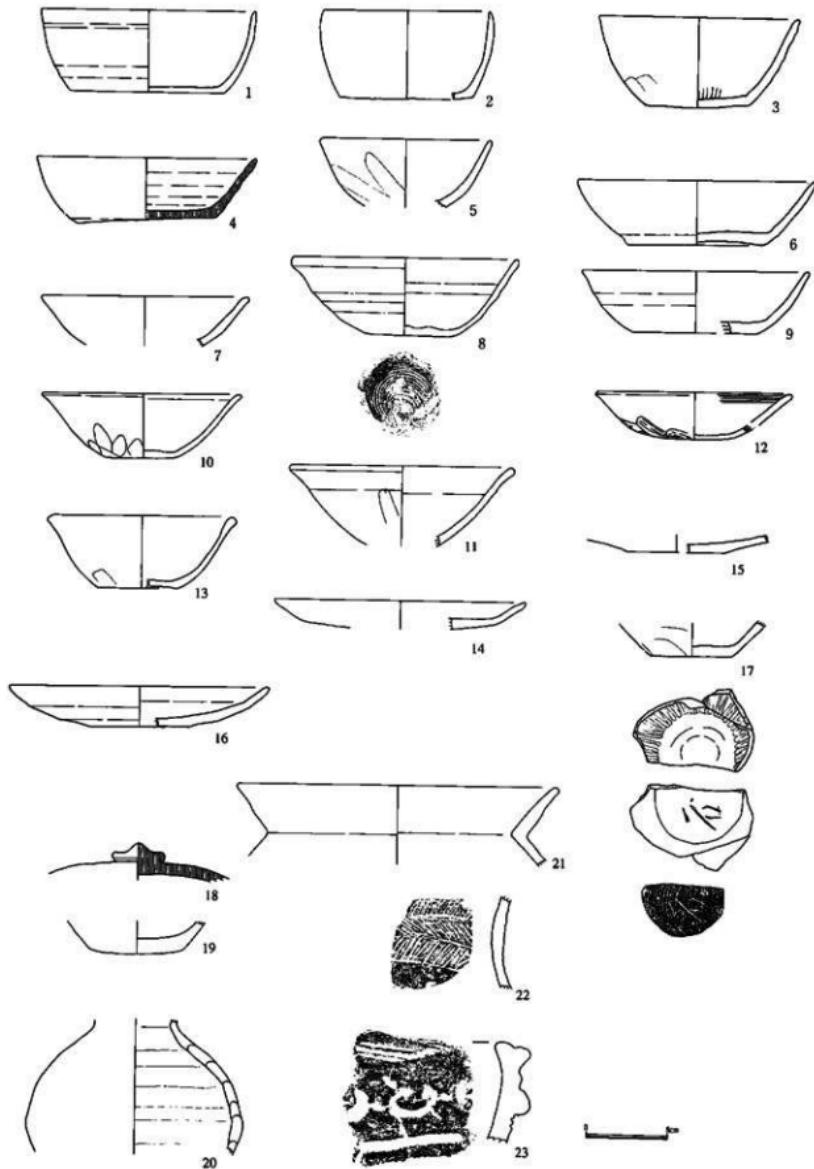


第53図 SD07 出土土器実測図(7)

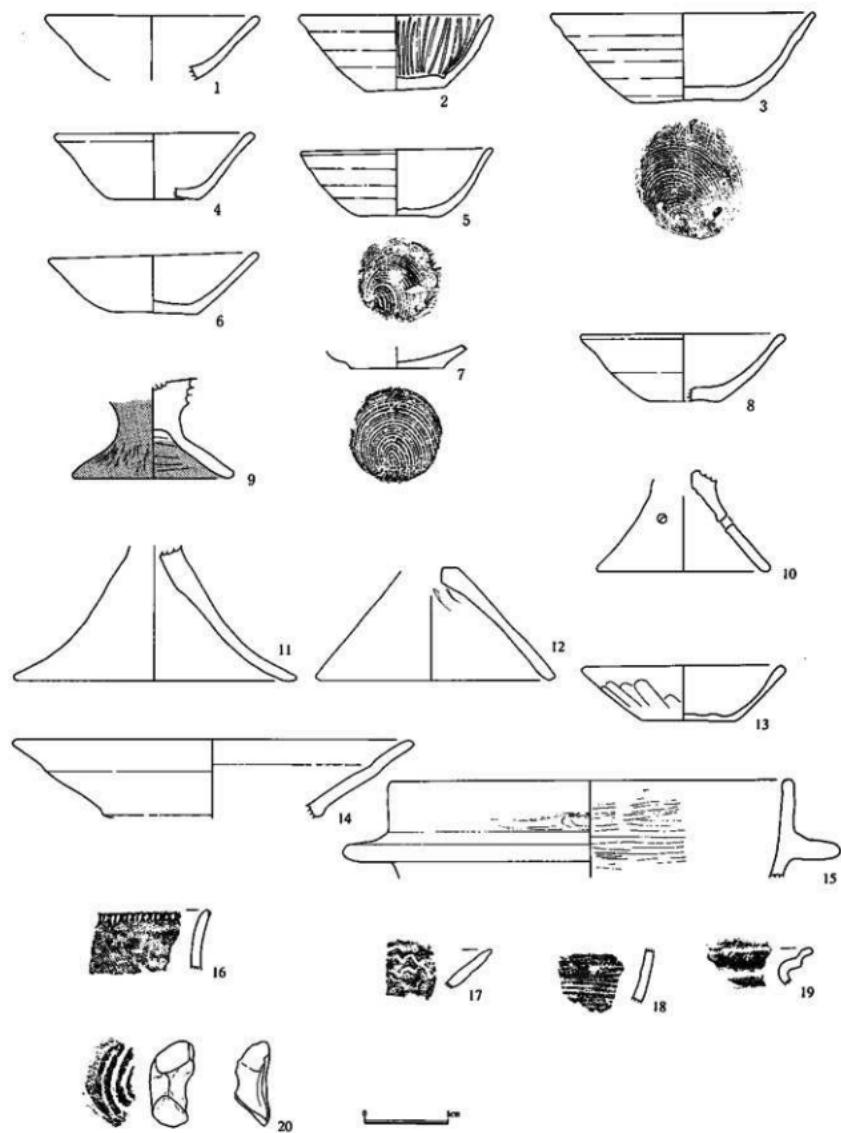


第54圖 SD08・16 出土器物測圖

圖版 第55圖

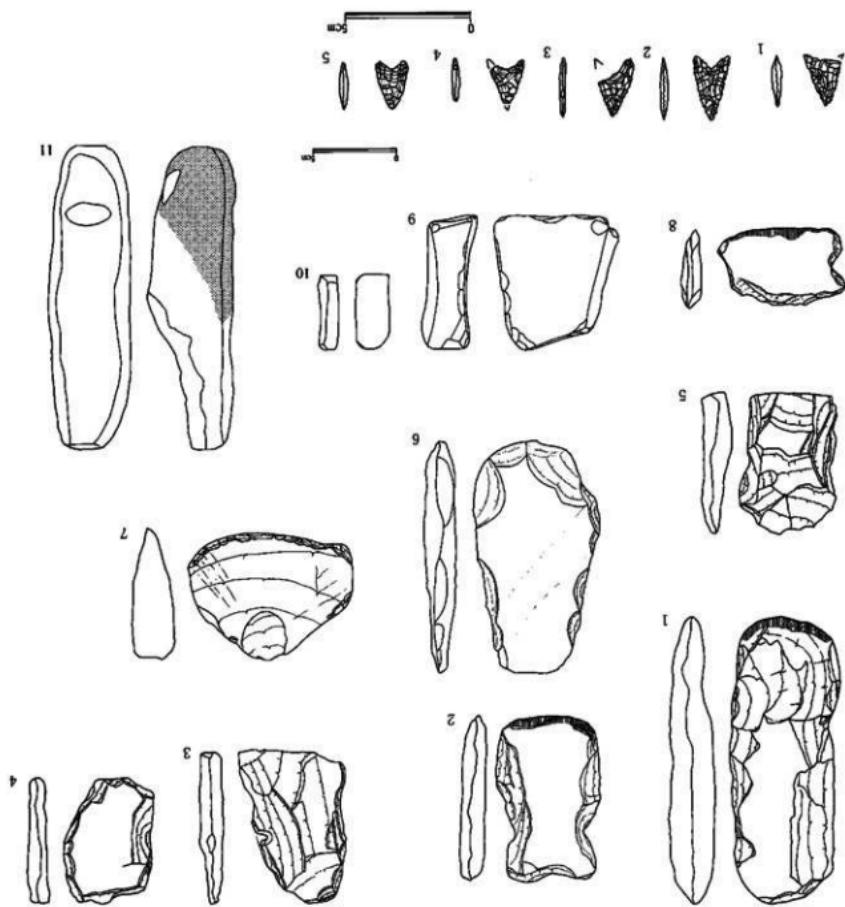


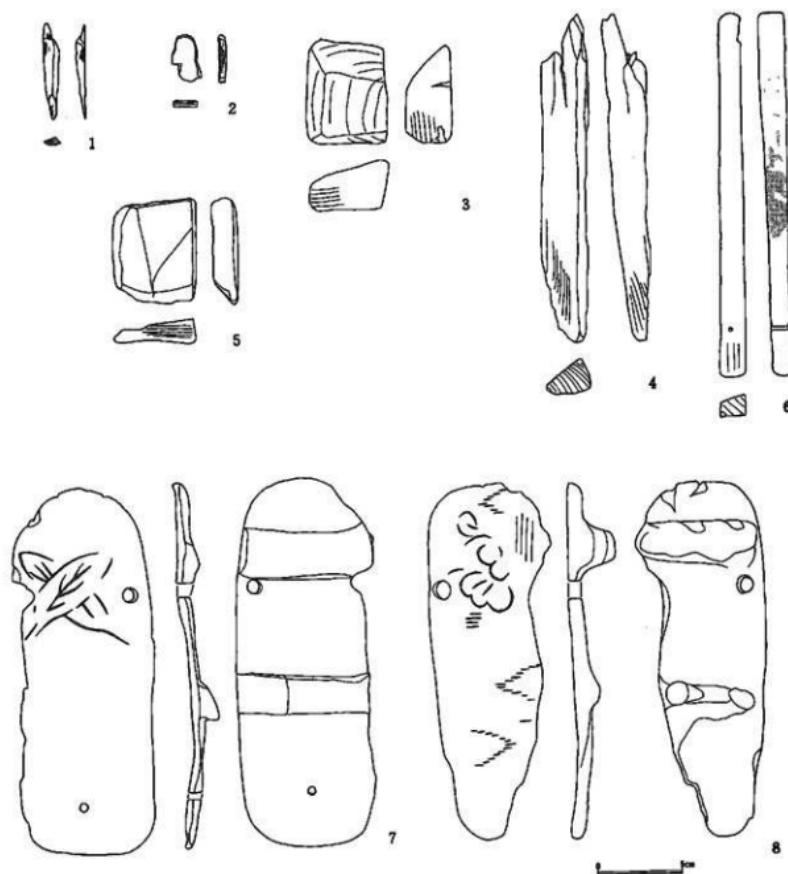
第55圖 NUMA 出土器物測圖



第56図 KAWA 出土土器実測図

第57圖 石器整理圖



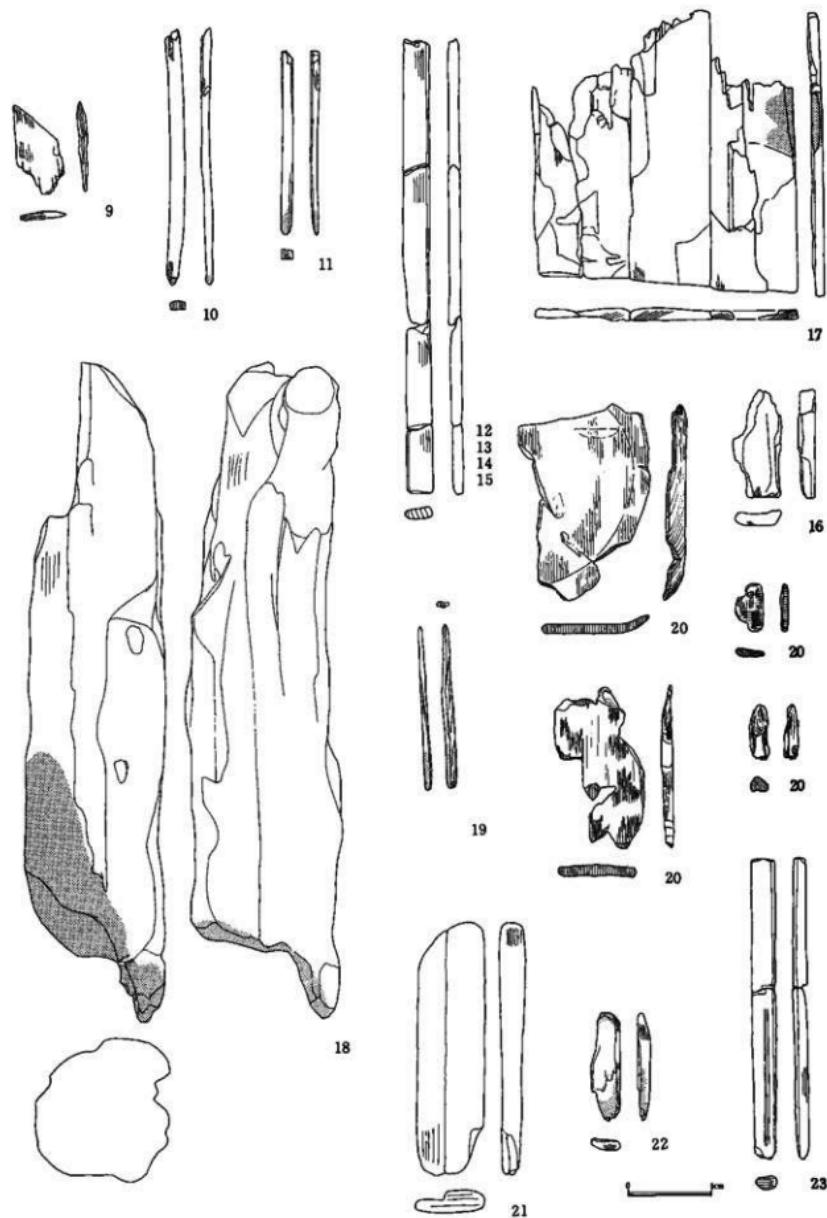


凡例

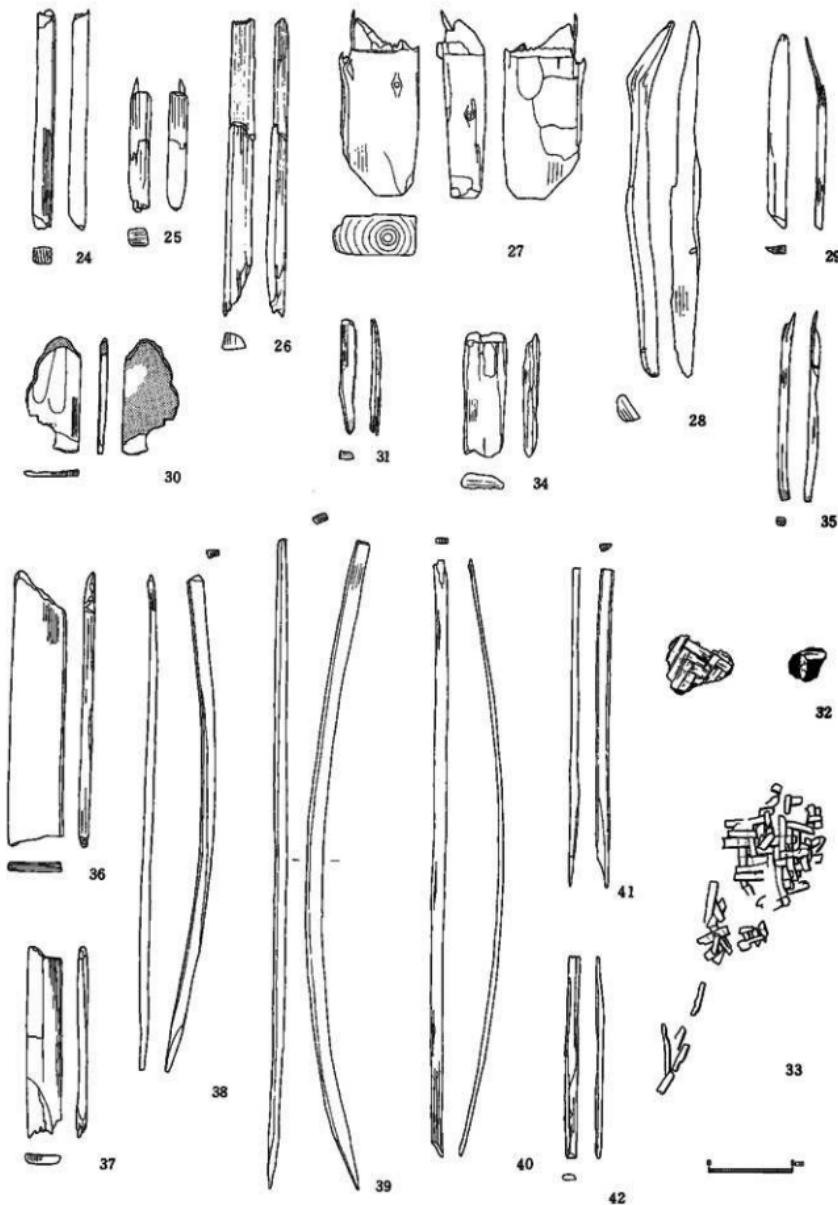
- 焼成痕
- 桜皮
- うるし
- 土

第58図 木製品実測図(1)

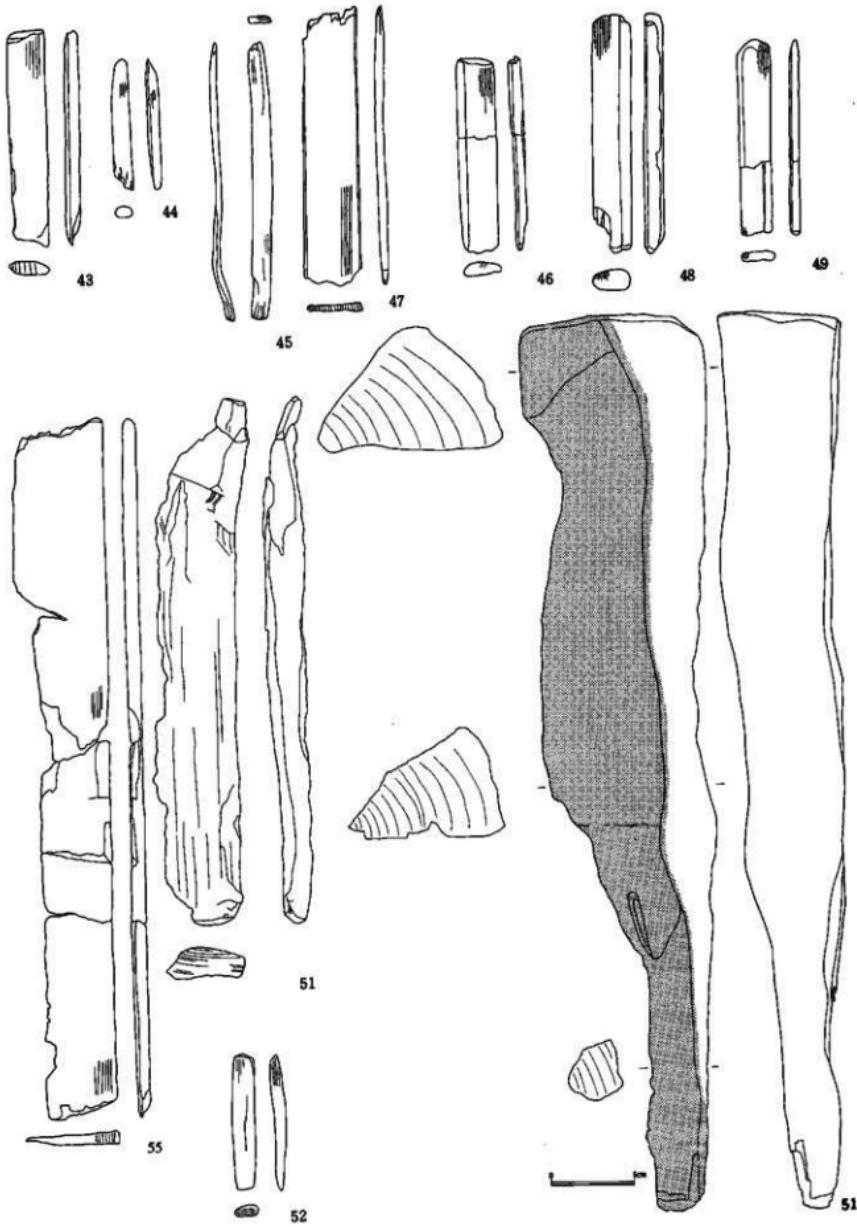
図版 第59図



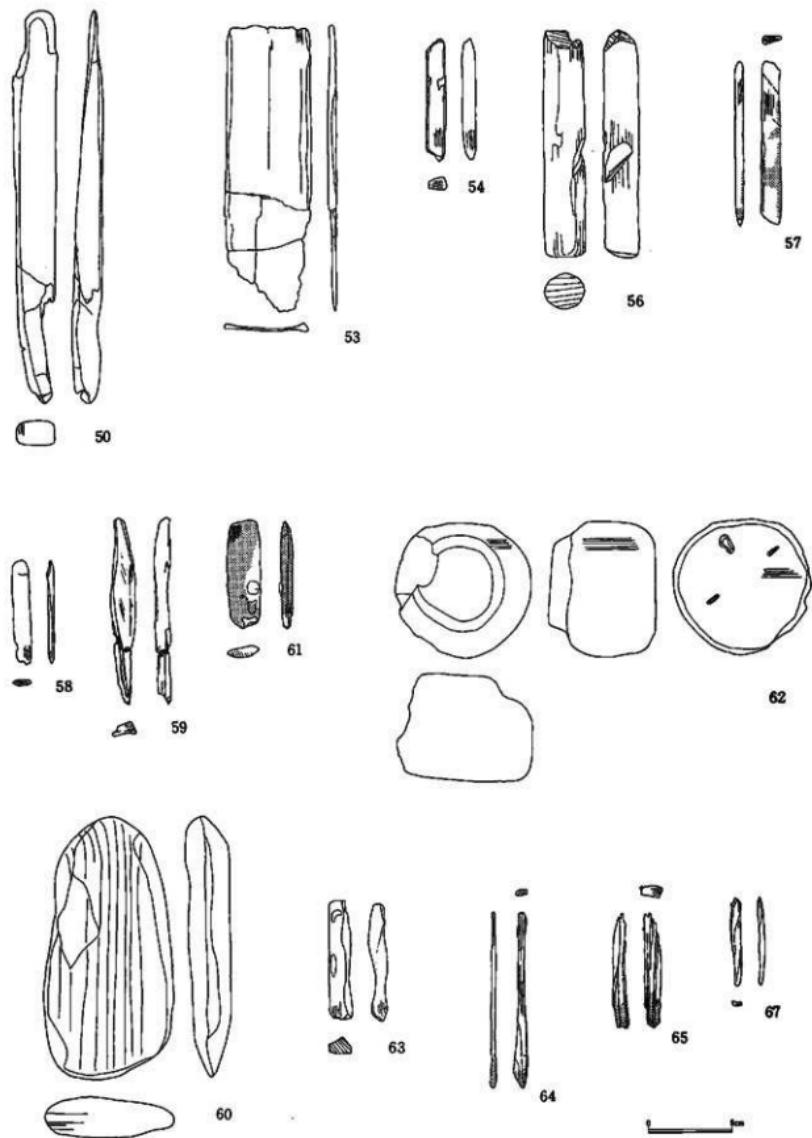
第59図 木製品実測図(2)



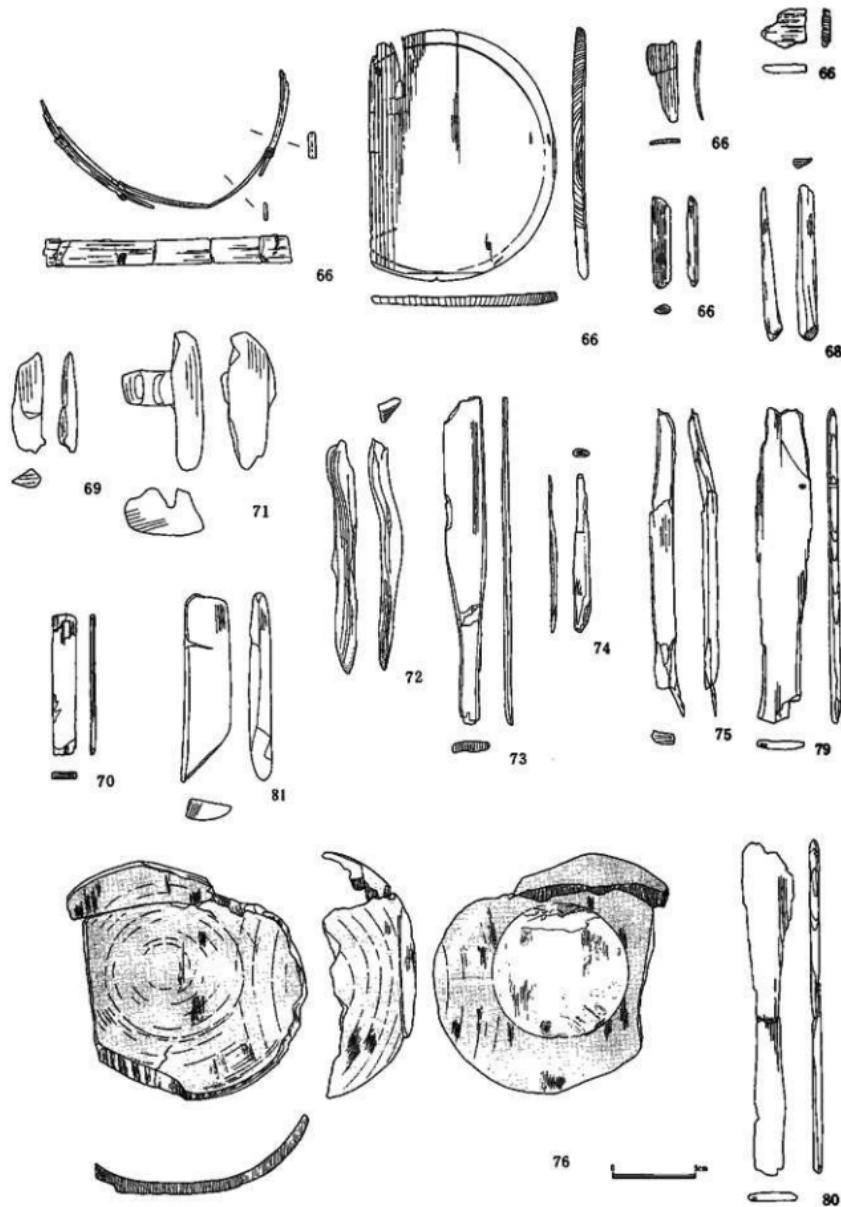
第60図 木製品実測図(3)



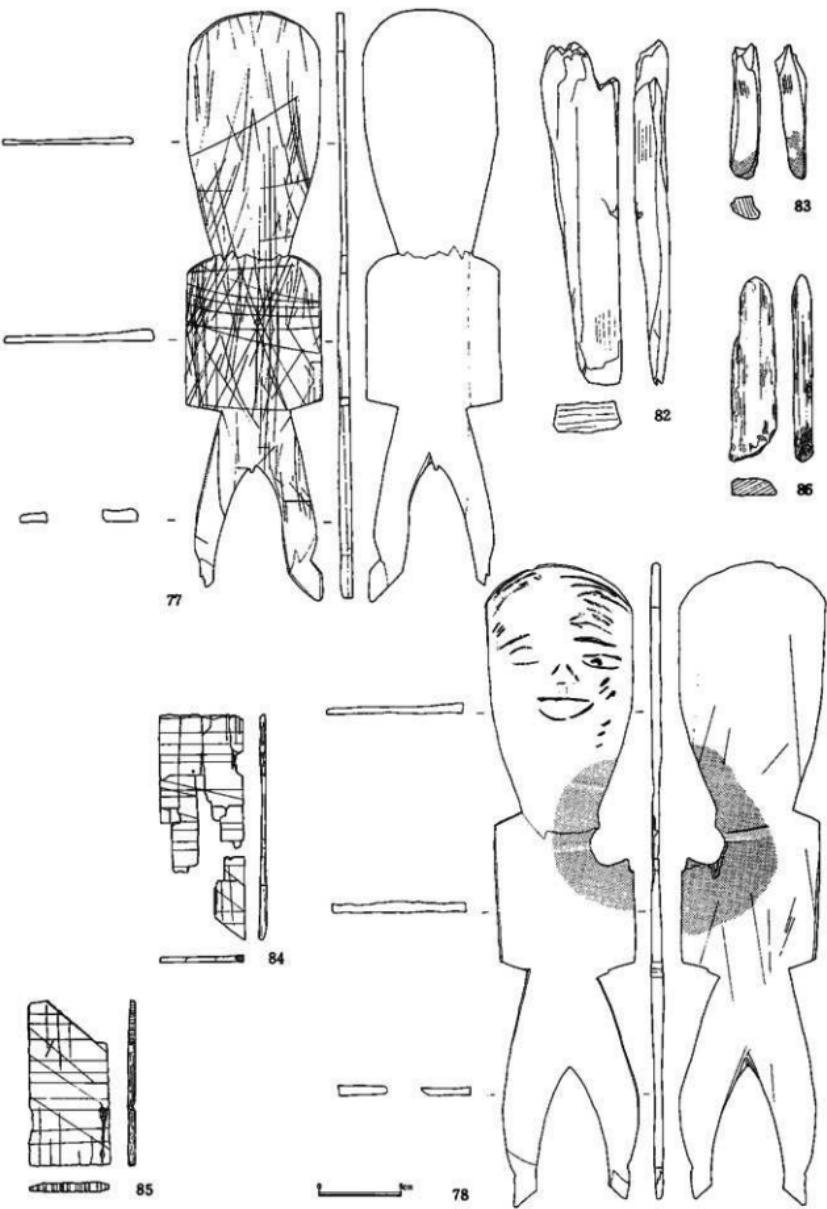
第61図 木製品実測図(4)



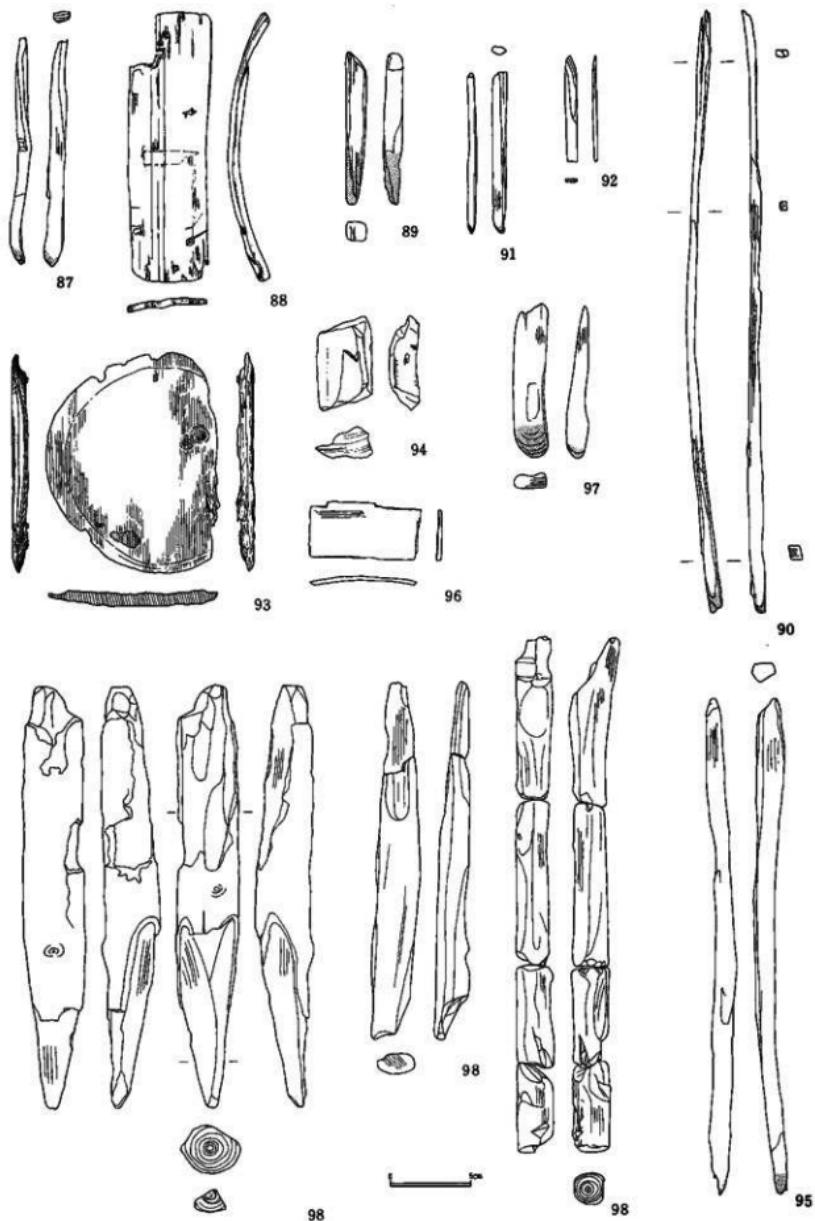
第62図 木製品実測図(5)



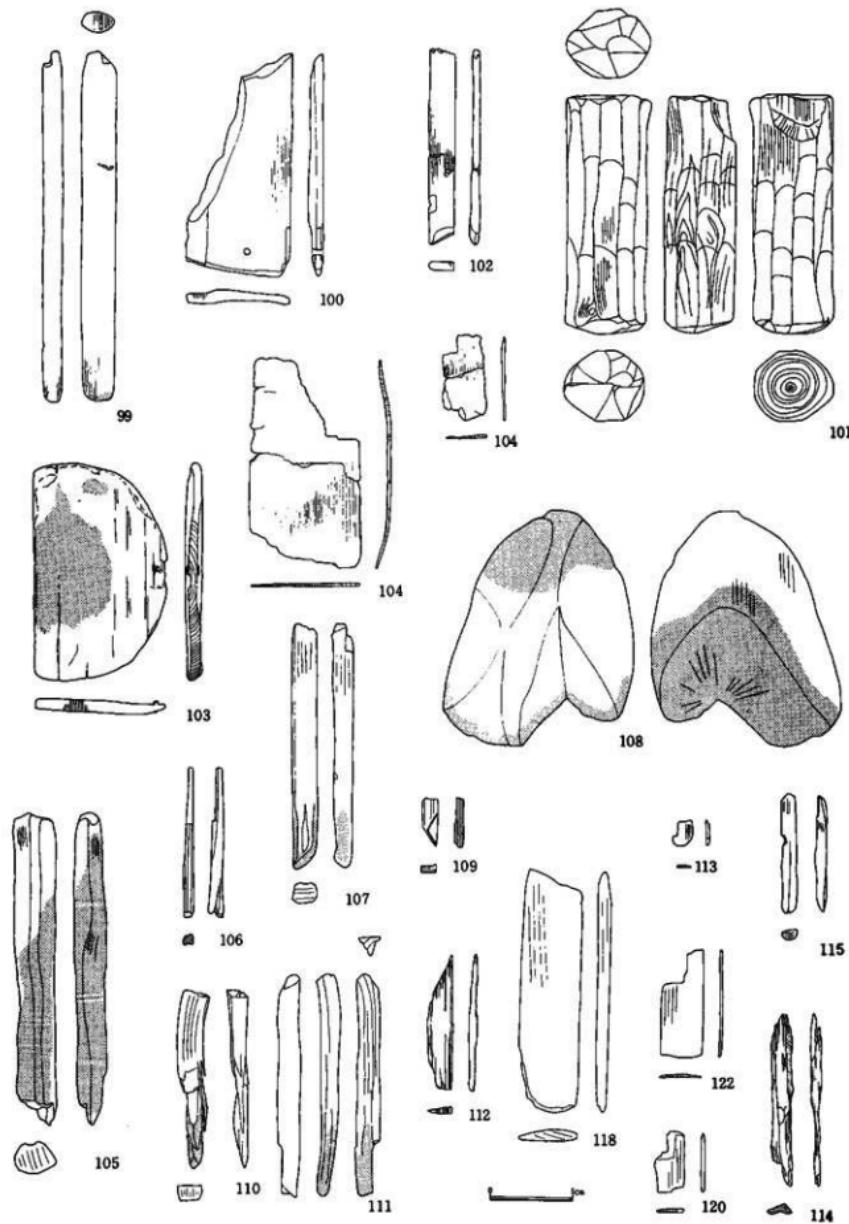
第63図 木製品実測図(6)



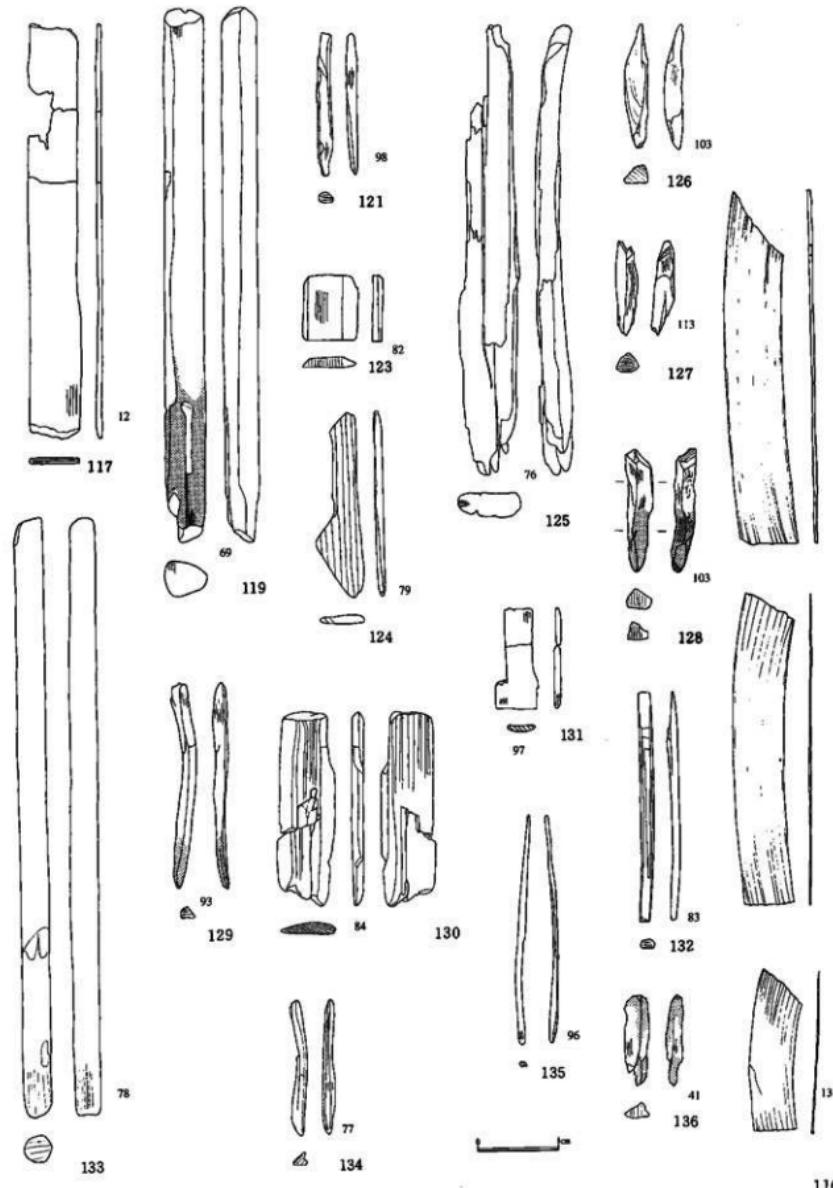
第64図 木製品実測図(7)



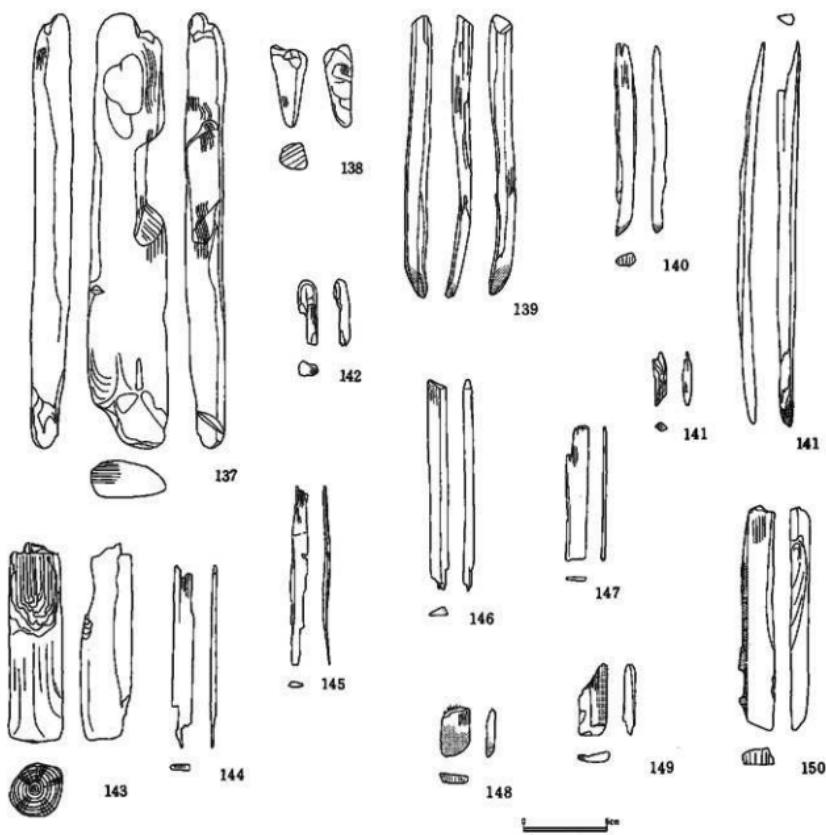
第65図 木製品実測図(6)



第66図 木製品実測図(9)



第67図 木製品実測図(10)



第68図 木製品実測図(11)

写 真 図 版



塙部遺跡西半全景



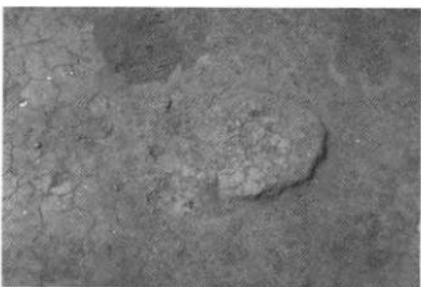
SB01 炭化材出土



SB01 全景



SB01 瓢(1)



SB01 炉

図版2



SD07C 遺物出土



SD07C 遺物出土



SD07C 土層断面



SD07D 遺物出土



SD07E・F 遺物出土



SD08 遺物出土



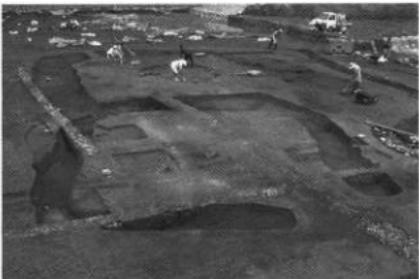
SD07・08 全景〔南から〕



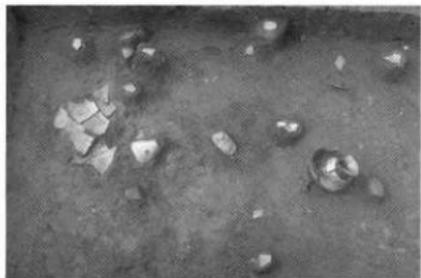
SD07 北半全景〔南から〕



SYO1 全景〔南から〕



SYO2 全景〔南から〕



SYO2 遺物出土



SYO2 垢(2)



SYO3 全景〔南から〕



SYO3 ウマ歯(下顎)・高環(11)出土

図版 4



SY03 東ベルト【南から】



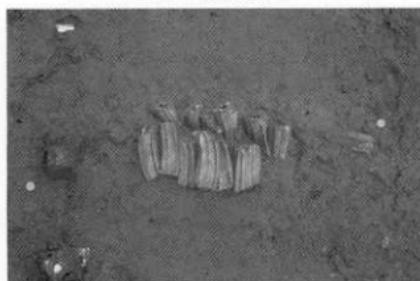
SY03 丸底壺 (6)



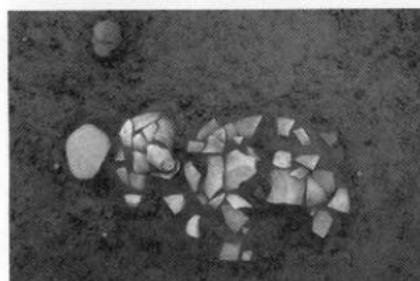
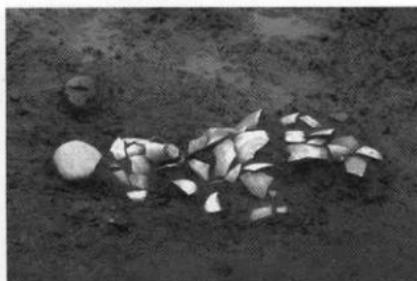
SY03 丸底壺 (3)



SY03 装飾器台 (10)・小型丸底壺 (15)



SY03 ウマ歯 (上顎)



SY03 高環 (11)



SY03 ウマ歯 (下顎)・高環 (11)



SY04 全景 (西から)



SY04 北ベルト (東から) 上部に洪水細砂



SY04 装飾器台 (16)



SY05 全景 (南西から)



SY05・06 全景 (西から)



SY05 土器 (1)



SY06 全景 (南から)

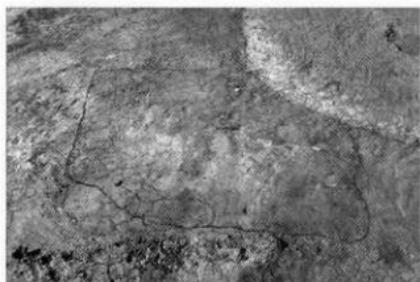


SY10 土器 (1)

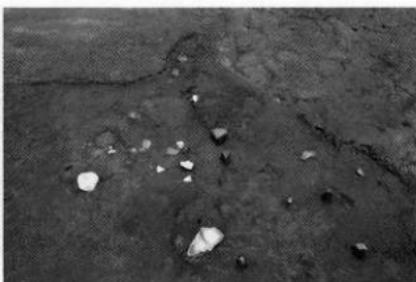
図版6



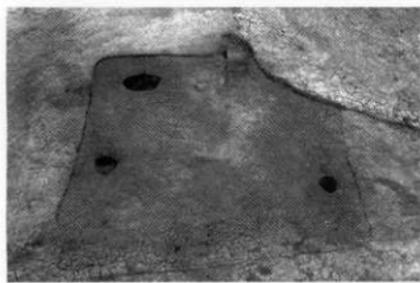
塩部遺跡東半全景



SB02 プラン〔南から〕洪水細砂に切られる



SB02 カマド周辺



SB02 全景〔南から〕



SB05 全景〔南西から〕



SB06 全景〔西から〕奥はSB03



SB06 カマド



SB07 全景〔西から〕奥はSB05



SB08・04 全景〔西から〕



SB09 全景〔南から〕



SB03～09



KAWA 流木



KAWA 肩甲骨 O-24G

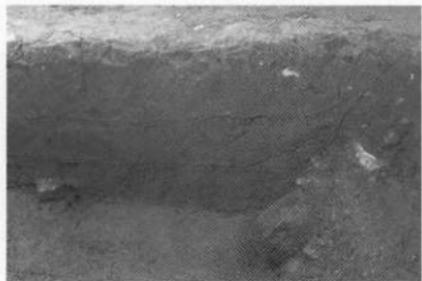
図版 8



KAWA 曲物 (66)



KAWA 頭骨



KAWA 土器 (3) (西端、R-25G)



KAWA 斎歌 (Q-22G)



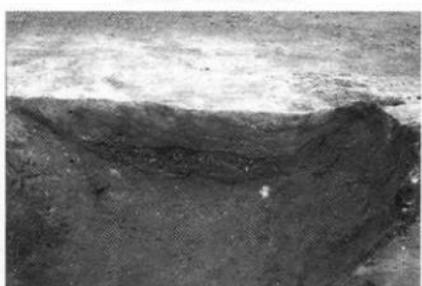
KAWA人形



KAWA 漆塗挽 (76)



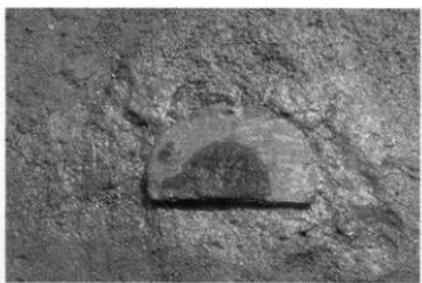
KAWA 断面・壊破片



KAWA 断面



KAWA 斎櫛 (90)

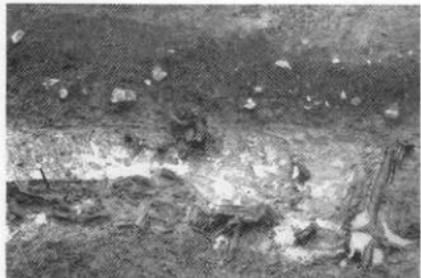


KAWA 曲物 (103)



NUMA 流木 (I-13G)

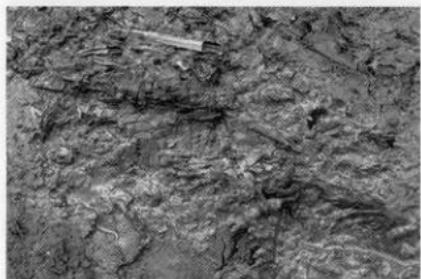
図版10



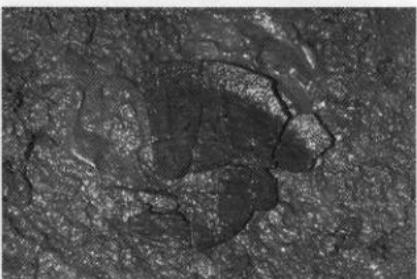
NUMA 遺物出土 (J-19G付近)



NUMA 木製品 (38~42)



NUMA 網代 (32・33)



NUMA 木皿 (20)



NUMA 木製品とクルミ



TANBO (南から)



NUMA 南半全景 (東から)



NUMA～KAWA 断面 (南東から)



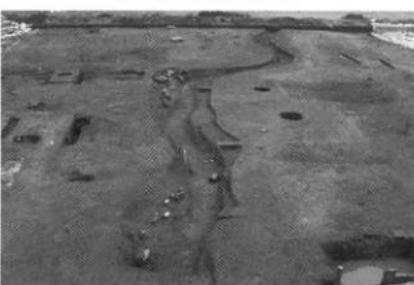
SD16 全景〔NUMA側から〕取水部



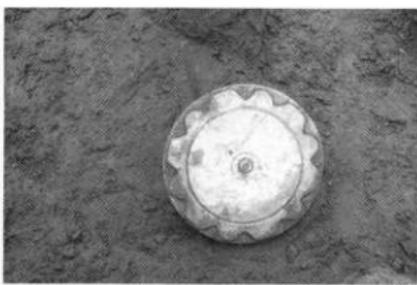
SD16 全景〔南から〕



SD16 温め部



SD01 全景〔南から〕

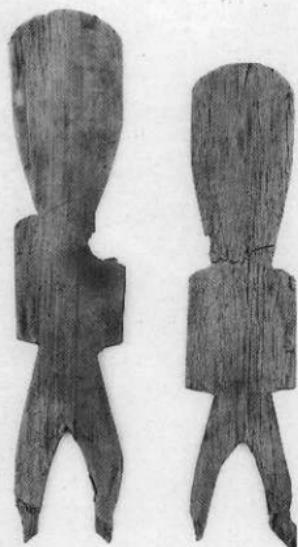


集束焼夷弾 (E-46) 弾頭



焼夷弾 (M-69) (K-28G)

图版12



KAWA人形 (77 · 78)



人形 (78) 頭



曲物 (66)



曲物 (93)



曲物 (88)



曲物 (103)

報告書概要

ふりがな	しおべいせき
書名	塩部遺跡
副書名	山梨県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第123集
著者名	小野正文・大谷満水・村石潤澄・小泉敬
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	山梨県東八代郡中道町下曾根923 郵便番号400-15 電話0552-66-3016
印刷所	株式会社少国民社
発行日	1996年3月30日
所収遺跡	所在地
しおべいせき	やまなしけんこうふしおべ
塩部遺跡	山梨県甲府市塩部二丁目
25,000分の1地図名・位置・標高	甲府北部 東経138°33'39" 北緯35°40'7" 標高267m
概要	主な時代 弥生時代後期～古墳時代前期 奈良・平安時代
	主な遺構 方形周溝墓11基(弥生時代後期～古墳時代前期) 住居址9軒(弥生時代後期1、奈良・平安時代8) 溝3条(弥生時代後期～古墳時代前期) 用水路(奈良・平安時代) 温め施設(奈良・平安時代) 灌漑用溜め池施設(奈良・平安時代) 旧河道路(？～奈良・平安時代)
要	主な遺物 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 翡翠製勾玉1点 奈良・平安時代の土器 木製品(人形・畜籠など)奈良・平安時代) 馬齒(古墳時代前期) 焼夷彈・焼夷彈彈頭(1945年甲府空襲)
	調査期間 平成6年10月5日～10月14日・平成7年4月6日～10月6日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第123集

1996年3月30日 発行

塩部遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター
 山梨県東八代郡中道町下曾根923
 TEL 0552-66-3016
 発行 山梨県教育委員会
 印刷 株式会社少国民社

